

ISSN : 1346-0676

# The Japan Branch Bulletin

The Dickens Fellowship

XXXII



ディケンズ・フェロウシップ日本支部  
年報 第32号



ディケンズ・フェロウシップ日本支部

# 年 報

第 32 号



*The Japan Branch Bulletin*  
The Dickens Fellowship

XXXII

2009

***The Japan Branch Bulletin  
of the Dickens Fellowship***

No. 32

ISSN : 1346-0676

Edited by Eiichi Hara and Yuji Miyamaru

*Editorial Board*

Eiichi Hara	Ryota Kanayama	Takashi Nakamura
Toru Sasaki	Akiko Takei	Takanobu Tanaka
Masayuki Toga	Shiro Yamamoto	

Typeset by Yuji Miyamaru

Published annually by the Japan Branch of the Dickens Fellowship  
Department of Literature and Culture in English  
Tokyo Woman's Christian University  
Zenkukaji 2-6-1, Suginami-ku, Tokyo, 167-8585 Japan  
Tel: +81-(0)3-5382-6348  
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/dickens/>

©2009 The Japan Branch of the Dickens Fellowship



## 目次



### 巻頭言

- ディケンズと演劇再考 . . . . . 原 英一 1

### 論 文

- 見世物小屋としての『骨董屋』と人形の死に様 . . . . . 松本 靖彦 4

### 書 評

- Keisuke Koguchi, *Repetition in Dickens's A Tale of Two Cities:*  
*An Exploration into his Linguistic Artistry* . . . . . 三ツ星 賢三 18
- 藤田 永祐 (著) 『ディケンズ, フォースター, オースティン』 . . . . . 武井 暁子 22
- 新井 潤美 (著) 『自負と偏見のイギリス文化  
 — J・オースティンの世界』 . . . . . 鶴飼 信光 26
- Anselm Heinrich, Katherine Newy, and Jeffrey Richards, eds,  
*Ruskin, the Theatre and Victorian Visual Culture* . . . . . 田中 裕介 29
- 荻野 昌利 (著) 『小説空間をく読む』  
 — ジョージ・エリオットとヘンリー・ジェイムズ』 . . . . . 新野 緑 33
- Andrew Radford, *Victorian Sensation Fiction* . . . . . 橋野 朋子 39
- 欧米言語文化学会 (編) 『実像への挑戦—英米文学研究』 . . . . . 西條 智子 43
- Gary Colledge, Dickens, *Christianity and The Life of our Lord:*  
*Humble Veneration, Profound Conviction* . . . . . 矢次 綾 48
- 要田 圭治 (著) 『ヴィクトリア朝の生権力と都市』 . . . . . 齋藤 九一 52

### Fellowship's Miscellany

- チャールズ・ディケンズからの贈り物 . . . . . 東 徳子 55
- ノッティンガム留学記 2 . . . . . 佐々木 智史 61

- 2008 年度 秋季総会 . . . . . 65

- 2009 年度 春季大会 . . . . . 72

特別寄稿

C・ディケンズとB・オクリ	．．．．．	梅 正行	80
ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約	．．．．．		99
『年報』への投稿について	．．．．．		101
追悼    伊藤廣里教授	．．．．．	西條 隆雄	103
フェロウシップ会員の執筆業績 (2008～2009)	．．．．．		105
お問い合わせ先	．．．．．		110
役員一覧	．．．．．		110
編集後記	．．．．．		111



The Dombey Family

## CONTENTS

**Editorial**

Dickens and Drama Again	..... Eiichi Hara	1
-------------------------	-------------------	---

**Article**

How Puppets Die in the Show Booth Named <i>The Old Curiosity Shop</i>	Yasuhiko Matsumoto	4
---	--------------------	---

**Reviews**

Keisuke Koguchi, <i>Repetition in Dickens's A Tale of Two Cities:</i> <i>An Exploration into his Linguistic Artistry</i>	..... Kenzo Mitsuboshi	18
Eisuke Fujita, <i>Dickens, Forster, Austen</i>	..... Akiko Takei	22
Meg Arai, <i>Pride and Prejudice of British Culture: The World of Jane Austen</i>	..... Nobumitsu Ukai	26
Anselm Heinrich, Katherine Newy and Jeffrey Richards, ed., <i>Ruskin, the Theatre and Victorian Visual Culture</i>	..... Yusuke Tanaka	29
Masatoshi Ogino, <i>Reading the Fiction Space: George Eliot and Henry James</i>	..... Midori Niino	33
Andrew Radford, <i>Victorian Sensation Fiction</i>	..... Tomoko Hashino	39
European and American Linguistic Culture Society, ed., <i>Approaches to the Real Image: Studies in English and American Literature</i>	..... Satoko Saijoh	43
Gary Colldge, <i>Dickens, Christianity and The Life of our Lord:</i> <i>Humble Veneration, Profound Conviction</i>	..... Aya Yatsugi	48
Keiji Kanameda, <i>Biopouvoir and City in the Victorian Age</i>	..... Kuichi Saito	52

**Fellowship's Miscellany**

A Gift from Charles Dickens	..... Noriko Azuma	55
Life in Nottingham 2	..... Chifumi Sasaki	61

**Annual General Meeting of the Japan Branch 2008**

.....	65
-------	----

**The Japan Branch Spring Conference 2009**

.....	72
-------	----

**Special Guest Articles**

C. Dickens and Ben Okri: We Have Been in the Destination of Azaro	..... Masayuki Toga	80
Agreements, Japan Branch of the Dickens Fellowship	.....	99
In Memoriam	.....	
Professor Hirosato Ito	..... Takao Saijo	103
Publications by Members of the Japan Branch, 2008–2009	.....	105



ディケンズ・フェロウシップ日本支部 (2008-2009)

2008 年度総会

日時：2008 年 10 月 4 日 (土)

場所：大阪学院大学 2 号館 B1-04 教室

プログラム

開会 (14:00 ~ 15:00)

開会の辞 日本支部副支部長 佐々木徹 (京都大学教授)

研究発表 (15:10 ~ 16:20) 司会 山本史郎 (東京大学教授)

大前義幸 (日本大学大学院在学) 「作家と挿絵画家，対になる思想—*Oliver Twist* を中心に」

木島菜葉子 (京都大学大学院在学) 「*The Picturesque and Reality in Pictures from Italy*」

講演 (16:30 ~ 17:30) 司会 鶴飼信光 (九州大学准教授)

佐々木徹 (京都大学教授)

「近代的ディケンズ批評の源流を温めて—ミラー，マークス，リーヴィス」

閉会 (17:30)

懇親会 (18:00 ~) 会場：大阪学院大学内

2009 年度春季大会

日時：2009 年 6 月 20 日 (土)

会場：中京大学 名古屋キャンパス 3 号館 1 階

プログラム

開会 (14:00 ~ 14:20)

日本支部長挨拶・報告 原英一 (東京女子大学教授)

研究発表 (14:20 ~ 15:20) 司会 宮丸裕二 (中央大学准教授)

田村真奈美 (豊橋技術科学大学准教授) 「ディケンズと慈善」

市川千恵子 (釧路公立大学准教授) 「厄介なる遺産—『ハード・タイムズ』と『北と南』から『素敵な仕事』へ」

シンポジウム (15:40 ~ 18:00) 司会 原英一 (東京女子大学教授)


「ディケンズと現代作家たち」

講師 桑野佳明 (流通経済大学教授) 「*Two Lives*—C・ディケンズと R・キプリング」

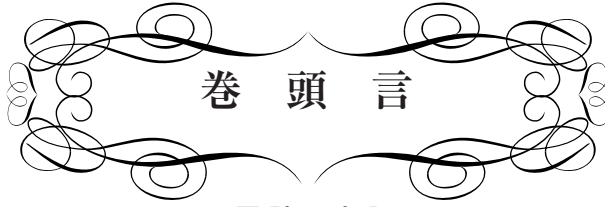
斎藤兆史 (東京大学大学院准教授) 「ディケンズ VS ナイポール」

梶正行 (中京大学教授) 「アザロの到着地にいたのは，われわれのほうだった—C・ディケンズとベン・オクリ」

懇親会 (18:15 ~ 20:30) 会場：エルパ亭 (中京大学名古屋キャンパス 3 号館 1 階)







# 巻頭言

## Editorial

### ディケンズと演劇再考

#### Dickens and Drama Again

日本支部長 原 英一

Eiichi HARA, Honorary Secretary to the Japan Branch

ディケンズが役者になることを真剣に考えていたことは、フォースターの伝記中の次のエピソードでよく知られている。

ほくは〔コヴェント・ガーデン劇場の〕舞台監督のバートリーに手紙を書いて、ほくが若年であることと、自分に正確に何ができると考えているかを伝えた。ほくには人物の性格や癖を深く洞察する能力があると思っていること、他人を観察して、その人物を自分自身で再現するという、生まれながらの才能を持っていることも書いてやった。これは、ほくがドクターズ・コモンズで代訴人のための速記者の仕事をしていたときのことだった。……ある定められた日に、劇場で彼とチャールズ・ケンプルの前で〔道化の〕マシューズの十八番の何でも好きなものを演じてみせることが決まった。姉のファニーがこれに一枚かんでいて、一緒に行って歌を演奏することになっていた。その日が来たとき、ほくはひどい風邪で寝込んでしまった。

後年の素人芝居や自作朗読での見事な演技力を考えれば、このときの「オーディション」に行くことができていたなら、ディケンズがプロの役者として舞台上に立っていたことは間違いない。もしかしたら、喜劇でマシューズを悲劇でマクリーディをしのぐほどの名優になっていたかもしれない。しかし、どれほどすぐれた役者になったとしても、その演技を記録する手段のない時代では、すべては消え去ってしまう。彼が役者になれなかった偶然を、私たちは幸運と思わざるをえない。それでも、ほぼ毎日のように劇場に通っていたディケンズが、小説家になったときに、その影響を顕著に受けていたことはあまりに当然なことだった。

奇妙なのは、ディケンズと演劇が切っても切り離せない関係にあることが批評

家たちによって自明の前提と認められているにもかかわらず、そこに深く切り込んだ研究がほとんど行われていないことである。Robert Garis の名著 *The Dickens Theatre* (1965) を凌駕するものは、いまだに現れていない。その大きな原因の一つは、ディケンズと同時代の演劇を本格的に研究しようとする、一次資料の入手が困難であるという問題にすぐ突き当たることだろう。本『年報』第30号に掲載されている西條隆雄氏の「ディケンズと素人演劇活動」を見ると、ディケンズが素人演劇で上演した諸作品の台本を探し当てるのが至難であったことがよく分かる。長年にわたるリサーチの結果は、それ自体が非常に貴重な資料となっているが、西條氏がここまで苦勞しなければならなかったことは、この方面の研究がまだまだ未開拓であることを示している。

ヴィクトリア朝の創作演劇についての研究が不十分である最大の理由は、現代人の鑑賞にたえない、つまらない芝居ばかりが多いということである。シェイクスピアを生み出したイギリスの演劇は、王政復古期以後、急速に貧困化して、見るべき作品がない時代が約2世紀にもわたって続くことになった。この間に演劇そのものが衰退したわけではなく、上演そのものはむしろ大いに盛んになり、大衆娯楽として発展したのだった。ディケンズの時代には、大小さまざまな劇場がロンドンにも地方都市にも存在していた。しかし、創作される作品を見ると、あまりに大衆的で娯楽性が強く、芝居の展開とほとんど無関係に歌や踊りが入るなど、時代を超えた価値があるとは言えないものが大部分だ。本物の馬や水（歌舞伎でいう「本水」<sup>ほんみず</sup>）を使ったスペクタクルは、見せ物としては面白いが、あくまでその場限りのものでしかない。いかにもディケンズらしいことは、彼が当時の演劇のわざとらしさ、マンネリズム、受け狙いの見え透いた演技などを、百も承知しながら、それらを大いに楽しんでいたことだ。『ボズのスケッチ集』にある「アストリー劇場」では、典型的なメロドラマについて、たとえばこんなふう書いている。

父親たちは、三つの長い幕の間中ずっと微塵の疑いも持たずに常に交流してきていた誰かが、全く突然、自分の子供であることを発見しなければならない。その場合、彼はこう叫ぶのだ。「ああ、これは一体何だ。これはあのプレスレットではないか。あの微笑み。この書類。あの眼差し。夢かまことか。間違いない。そうだ、そうなのだ、これこそ我が子じゃ！」——「お父上！」と子は叫ぶ。そして、彼らは互いに抱き合って、お互いに肩越しに向こうを見て、観客の方は盛大に拍手喝采するのである。

プロットの馬鹿馬鹿しさ、役者たちの大げさな演技、観客の反応ぶり、そのすべてを客観視しつつ、しかも大いに楽しんでいる若いディケンズの姿が思い浮かぶ。こうしたメロドラマは、演劇史の中で、もしかしたら不当に軽視されているのかもしれない。ディケンズが楽しむことができたものを、その愛読者である私

たちも楽しめるはずではないだろうか。先に述べたように、これらの芝居を読もうとすると、テキストの入手に大いに苦勞しなければならないので、私たちにはなかなか機会がない。それでも、比較的入手しやすい、たとえば、ディケンズの畏友であったダグラス・ジェロルドの『黒い瞳のスーザン』*Black-Eyed Susan* などを読んでみると、その面白さを十分に知ることはできる。ヴィクトリア朝の芝居の中には、W. S. ギルバートの『婚約』*Engaged* のように、オスカー・ワイルドが『真面目が肝心』*The Importance of Being Earnest* を創作する契機となり、結果的にイギリス演劇の再生に重大な寄与をすることになった破天荒なナンセンス劇もあって、決して侮れないものがある。

ディケンズが素人芝居で取り上げたベン・ジョンソンやフレッチャーのような古典的喜劇も、イギリス喜劇文学の伝統の中でのディケンズの位置付けを考える際に、無視できない存在だ。とくに、ジョンソンは、すでに何度も指摘されているように、ディケンズと親近性の強い作家である。『ヴォルポーネ』*Volpone* の同名の主人公はベックスニフそのままの偽善者であるなど、ヒューマーに取り憑かれているという点では、ディケンズの多くのキャラクターたちの起源がジョンソンに見られるといってもよい。エリザベス朝やジェイムズ朝の多くのコメディイの中では、トマス・ミドルトンが—ディケンズが読んでいたかどうかは分からないが—彼と非常に近いものを備えたもう一人の作家である。たとえば、『ミクルマス開廷期』*Michaelmas Term* に登場する成り上がりの金持ちアンドリュー・リーシーという男は、自分の卑しい出自を恥じている。そのため彼は、田舎から彼を探してロンドンにやってきた自分の母親を、世間に分からないように隠そうとするのである。『ハード・タイムズ』より200年も前の芝居だが、この男はバウンダビーと全く同じ精神構造を持っている。ディケンズと演劇との関係は、かなり広い視野での再検討が求められるのではないだろうか。



Dickens in *Used Up*, 1850

## 見世物小屋としての『骨董屋』と人形の死に様 How Puppets Die in the Show Booth Named *The Old Curiosity Shop*

松本 靖彦

Yasuhiko MATSUMOTO

ディケンズの『骨董屋』には、旅回りのパンチ芸人をはじめとして、大道芸人やフリーク・ショー、競馬、サーカス、そして蠟人形など、様々な見世物が登場する。シュリック (Schlicke) は、それらの見世物や大衆娯楽を歴史的に掘り下げ、芸人たちの姿を通して、この作品を読み解いた。また、ダイソン (Dyson) やショー (Schor) も、『骨董屋』という作品自体を骨董屋になぞらえている。本稿では、このような観点を敷衍して、『骨董屋』という物語を丸ごと見世物小屋になぞらえ、その中で生起するネルとクウィルプの死について、いくらかでも新たな考察を試みたい。<sup>1</sup>

『骨董屋』は、その主要人物から脇役に至るまで、芸人や見世物満載の物語である。

まず、クウィルプが、人形劇のパンチが息を吹き込まれたようなキャラクターであることは言うまでもない。彼は見るからにグロテスクな形相をした小人のフリークであり、悪役だが、芸人でもある。パンチとジュディ (Punch and Judy) の舞台は額縁でもあり、窓でもあるが、図1の挿絵に関してケリー (Kelly) も指摘しているように (140)、クウィルプが窓から顔を覗かせ



図1

る場面は、彼がパンチを体現していることを示唆している。第33章で突然ブラスの事務所を訪れた時も、クウィルプはまず窓から顔を覗かせてみせる。クウィルプは至るところで窓から顔を覗かせては、そこをパンチ劇の舞台に変えているのである。

シュリッケも指摘している通り(101)、キットは、物語後半で、より複雑な役割を演じることになるものの、基本的には道化として物語に登場している。あらぬ罪をさせられて、刑務所に収

監されるというシリアスな場面においてさえも、キットは動物園の珍しい動物のように描写され、見世物にされている。

ディック・スウィヴェラーも道化じみた人物だが、同時に彼は、言語と想像力を駆使して貧しい現実を彩り豊かに装わせる、言葉の手品師でもある。もっとも、ディックは物語の結末で、本物の手品を披露している。彼は、自分が「侯爵夫人」と名づけた、道化のようでもあり、フリークのようでもある貧しい女中を、教養ある魅力的な女性に変身させているのだ。

第39章ではサーカスが出てくる。バーバラと彼女の母を加えたナブルズ一家が休日にアストリーズ(Astley's)に行くのである。シュリッケも指摘しているが、この場面で、サーカスの公演そのものはほとんど描かれぬ(120)。それは、この場面においては、客席こそが舞台であり、押し合いへし合いしている彼女たちこそが、そこで繰り広げられる喜劇の主役だからである。

これと同じ理由で、旅回りのパンチ芸人たちが登場しても、彼らの演じる人形劇の公演そのものが直接描写されることはない。クウィルプがパンチを体現しているので、パンチ御本尊が活躍する余地がないともいえるが、パンチ芸人が登場する場面での主役は人形ではなく、むしろ人形を操る芸人たちの方だからである。人形遣いのコドリンが額縁から顔を覗かせている場面が、そのことを表している(図2)。素のままの彼自身が道化であり、また見世物なのだ。ここでは、人形の代わりに人間が舞台上に顔を出している。

また、パンチ芸人が登場する第16章以降は、様々な芸人たちが大集合し、『骨董屋』という見世物小屋小説は大きな山場を迎える。パンチ芸人の後は、竹馬

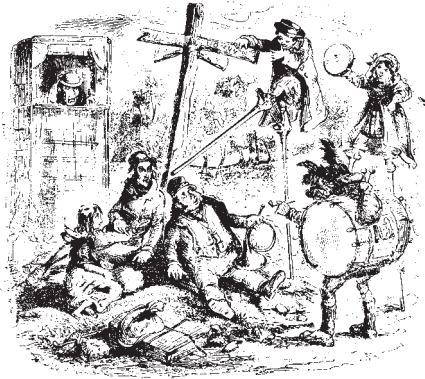


図2

芸人や、犬を使う芸人たち、そして巨人や小人たちの一座の座長も登場し、物語はさながらサーカスカフリーク・ショーの様相を呈してくる。もちろん、ジャーリー夫人の蠟人形展に雇われることになったネルとおじいさんも、この見世物のオン・パレードに巻き込まれていく。まず、おじいさんは、精巧な機械仕掛けの人形だと思われて、子供たちの好奇の眼差しに晒される。さらに、二人が蠟人形に囲まれた生活に慣れ始めた矢先、ギャンブル狂いが再発してしまったおじいさんは、身の毛もよだつ異形のモンスターに化けてしまう。フリーク・ショーが一段落したと思ったら、事もあろうにネルのおじいさんが一番おぞましい怪物に変身してしまうのだ。一方、ジャーリー夫人の蠟人形展でたちどころに人々の注目を集めたネルも見世物になる。ピラを撒こうが、展示された蠟人形の説明役を務めようが、お人形さんのように可愛いネル自身が蠟人形展最大の呼び物になり、生身のアトラクションと化すのである。本来の見世物である蠟人形をネルが食ってしまうわけだが、このネルが一番の呼び物になるという状況は、後に彼女とおじいさんがたどり着く田舎の教会においても基本的には変わらない。薄命であることが明らかなネルの清純な美しさが来訪者たちの噂となり、さらなる来訪者たちを呼び寄せることになるのである。

このように、様々な芸人たちや見世物、骨董品のようなフリークたちが目白押し『骨董屋』は、まるで見世物の見本市のようだが、そればかりでなく、シリアスな件や一見無意味な場面も、見世物の描写として機能していることが多く、細部に至るまで見世物づくしの小説だといえる。その中でも、これはとりわけ人形を用いた娯楽とは関わりの深い作品である。既にみたとおり、パンチが無理やり人間になったかのようなクウィルプと、可憐なお人形さんのようなネルは、極めて人形じみたキャラクターである。従って、この二人を中心に繰り広げられるドラマは、アドルノ (Adorno) も示唆し (172)、原も論じているように、一種の人形劇であり、この見世物小屋のような物語における、メインの出し物だといえる。人形が人間になり、人間が人形に似ているわけだから、これは人形と人間がお互いの領域を侵犯し合っている世界である。この、時に人形と人間の立場が入れ替わるという原理を集約的に体现しているのが、ジャーリー夫人の蠟人形展である。蠟人形展は、人形が人間のふりをする見世物だが、人形を人間に似せるプロである彼女は、「静止したままの状態で人間そっくりの蠟人形を見たことがあるとまでは言わないが、蠟人形そっくりの人間なら見たことがある」と言う (209)。つまりは、静止したままの状態では人間そっくりの蠟人形よりも、蠟人形じみた人間の方が世の中には多い、というわけである。

ネルを主人公としたプロットの主眼は、元々お人形さんのような彼女が更に



人形化していく過程をたどるところにある。おじいさんを伴っての彼女の逃避行は、結果的に死への旅路となるのだが、ゆっくりと静かに死んでいく彼女は、死に近づくにつれ、ますます人形らしくなっていく。つまり、ネルの死への道程は、彼女が人形として完成させられていく過程だともいえる。それとは対照的な最期を迎えるのがクウィルプである。人間になったパンチ人形として物語に登場するクウィルプは、死の直前まで気まぐれなエネルギーに突き動かされたパンチのように振舞い続けるが、死の間際には急激に人間臭くなる。では、以下にこの二人の対照的な死に様をみてみたい。

第52章で、ネルとおじいさんは、二人の終の棲家となる村に到着する。どうやらネルは旅の途上、空気の悪い産業都市を通り抜けた際に病を得てしまったようで、この村に着くころまでには彼女の体は病に侵され衰弱しはじめている。村に着いたときには、ネルは既に自らの死を意識し始めているようだ。ネルとおじいさんをその地に導いた教師が、二人を彼女たちの住まいとなる古い家に案内したときのことである。ネルがその家に足を踏み入れたとき、寒気に襲われて身震いしたのを教師は見逃さなかった。ネルを襲ったこの寒気は、死の予感だと思われる。この家の外観を目にしたときにも、彼女はこの同じ感覚に襲われたと言うが、それは、この家が非常に緩慢に朽ちていく墓所のような建物だからに他ならない。また、彼女はその住まいが「死ぬのを学ぶのにも良い場所だ」と述べている(398)。こここそ自分が骨を埋める場所だ、と直感的に悟ったかのようなのである。

三度ネルがこの寒気に襲われたとき、今度はある視覚的イメージが、彼女がその感覚を払拭する助けとなる。それは天にまで達するかと思われる天使たちの長い隊列が彼女の寝姿を見守っているという夢であり、その夢は彼女が昔見たことのある宗教的な絵画を基にしている。なぜ、このイメージが、ネルを襲う寒気のような死の予感を宥めることになるのかというと、一幅の絵のようなその夢が、死とは安らかに眠ったまま天使たちの手に委ねられて神の御国に運ばれることにすぎず、怖がらなくてもよいのだ、ということを瞬時に呑み込ませてくれるからである。

死が安らかな眠りであることについては、それを身をもって教えてくれる手本がネルのごく身近なところにある。礼拝堂に安置されている‘effigies’である。この田舎の村に着いた翌日、礼拝堂の中で横たわる‘effigies’に囲まれた場所に腰を下ろしたネルは、幸福感を覚える。礼拝堂内部の、時間が止まってしまったかのような静けさに安らぎを覚えたネルにとって、そのような場所に身を横たえて永久の眠りにつくことは、少しも辛いことではないと感じられる。そして、

この日からネルは、折あらば同じ場所に腰を下ろし、時おり聖書を読む時以外は、彫像のように凝固したまま長時間座り続けるようになる。まるで、安眠としての死を体現している‘effigies’に同化したかのようなのである。

傍から見れば、ネルの態度は、マークス (Marcus) が言う ‘inertia’ のそれだと思えなくもない (142)。しかし、ネルが安らかな眠りの姿で凝固することを望むのは、プロット上当然の帰結でもある。なぜなら、第49章の終わりに ‘Quilp [...] stood looking at his insensible wife like a dismounted nightmare’ とあるように (381)、クウィルプは、彼がつけねらう者たちから安らかな眠りを奪う夢魔 (nightmare) でもあり、彼女が ‘effigy’ になることは永遠の安眠、すなわち、クウィルプからの完全な解放を意味するからである。また、ネルが逃げ続けてきたのはクウィルプからだけではなく、優しいおじいさんさえいつ何時化け物に豹変させてしまいかねない、生々しい欲望が渦巻く俗世間そのものからでもあるのだ。安らかに眠り続ける彫像になれば、彼女は永遠にそんな世界と縁を切ることができるのである。

彫像に同化していくかのようなネルの態度はクウィルプと対照的だ。彼は息を吹き込まれた ‘effigy’ だからである。第27章で、ネルが町中の古い門を見上げてみると、突然クウィルプが出現する場面がある。かつては彫像が据えられていたに違いない、空の壁龕を眺めながら物思いに耽っていたところへ、突如クウィルプの姿が目飛び込んできたものだから、ネルには壁龕にいた彫像が命を吹き込まれて地上に降り立ったように感じられる。クウィルプは枠から飛び出して動き始めた ‘effigy’ なのである。

それとは対照的に、物語の後半部で、ネルは凝固して彫像のようになっていくが、彫像のように固まっているのはネルばかりではない。第44章で、ネルとおじいさんに一夜の宿を提供してくれる労働者の男も、燃えさかる炉の炎を凝視し、彫像のように固まったまま静止してしまい、彼が死んでしまったのではないかと思ったネルを不安にさせる (343-44)。炉の炎を唯一の友とする、この男もまた、急激かつ極端な産業化の中で課せられた過酷な長時間労働が生んだフリークなのかもしれない。あるいは、彼は非人間的な生活条件が生み出したグロテスクな蠟人形になっているのだ、ともいえるだろう。つまりは、こんないびつな形で、フリーク・ショーも蠟人形展もまだ続いているのである。上で見たように、「蠟人形そっくりの人間なら見たことがある」と述べたとき、ジャーリー夫人の脳裏にあったのは、産業都市における労働者の生活の悲惨さだった、と断言することはできないが、この男にせよ、礼拝堂で座り続けるネルにせよ、ジャーリー夫人から見たら「蠟人形じみた人間」になっていることは間違いない。なるほど、蠟人形のような人間は至る所にいるわけだ。



実は、ネルの時代は、現実の見世物の歴史においても、蠟人形のような人間を多く目にすることができた時代だった。オールティック (Altick) に拠れば、1820年代後半から40年代後半までは、大陸起源で、「本当の人間が蠟人形の真似をする」娯楽 ‘tableaux vivants’ のイングランドにおける最盛期にあたりと考えられるからである (オールティック 445)。それは、簡単にいえば、生身の演者たちが静止したポーズをとって有名な絵画や彫刻を模倣するという出し物であった。アストリーズの花形だった、あのデューククロウ (Ducrow) も、最初は馬上で、そして後には、舞台上に据えられた額縁の中で古代ギリシャ・ローマの像を演じている (Altick 343)。天下のデューククロウが大理石の彫像に変身して喝采を博したという時代背景に照らしてみれば、ネルが ‘effigy’ に同化するのも、さほど奇異なことではないだろう。しかし、それはまた一方で、ネルがクウィルプからは逃げおおせても、見世物の世界からは抜け出せていないことを意味する。

乱暴な言い方をすれば、‘tableaux vivants’ は絵画の状態を志向する演劇である。‘Tableaux vivants’ の起源について詳細に論じているホルムストレーム (Holmström) にしても、19世紀の文学、絵画、演劇の間の連続性を論じているマイゼル (Meisel) にしても、多かれ少なかれ、舞台を絵画のように構築しようという意識の興隆と ‘tableaux vivants’ とを関連付けて捉えている (Holmström 238; Meisel 45–49)。<sup>2</sup> ‘Tableaux vivants’ が、役者が蠟人形か彫像になることを介して、ひとつの絵姿を提供することを目指す芸ならば、ネルもまた ‘effigy’ になることを通して、一幅の絵として額縁に収まっていくはずである。そして、実はそれこそ、ネルの死の床において最終的にディケンズが読者に提供している出し物なのだ。

『骨董屋』におけるメインの出し物としてのネル (Schor 38) には、死の床においても、最高に美しい絵姿を提供することが求められている。それは見世物として、この上なく魅力的な死体である必要があった。さんざん焦らされた揚句、第71章で、読者はネルの遺体に対面するが、それは、ぱっと見ただけでは生死の判別のつかない、何とも微妙な亡骸である (図3)。

‘She was dead. No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look upon. She seemed a creature fresh from the hand of God, and waiting for the breath of life; not one who had lived and suffered death’ (554).

言うまでもなく、ここでは死が安らかな眠りとして表現されている。眠っているとされた状態で亡くなっていたという子どもの話は、ヴィクトリア朝において他にも例がある (Wheeler 38–39)。「安らかな眠り」としての死を迎える

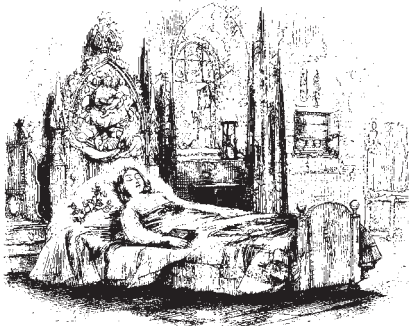


図3

ことは、善きキリスト教徒として望ましい最期であると同時に、その人の魂が確実に救われ、天に召されていることの証である。つまり、それは『骨董屋』との関連で、ブレナン (Brennan) も指摘し (xxi-xxii)、ジョーガス (Georgas) が詳細に論じている ‘ars moriendi’ (往生術) としての「清く正しい」死に方なのである。このように、ネルは宗教的な型に嵌った最期を迎えていると、

ひとまずは言える。

しかし、同時にネルの亡骸には、ディケンズの個人的な趣味も反映している。ケアリ (Carey) も論じているように、彼は剽軽な表情を見せる死体だとか、人間そっくりなのに、決してこちらを見つめ返すことのない眼差しで人をぎよっとさせる蠟人形だとか、生と死の区別に揺さぶりをかける対象に惹かれていた (80-104)。この横たわるネルの姿にも、生と死の間の境界線が判然としないものへの、ディケンズの並々ならぬ興味がうかがえる。

また、その一方で、「生まれたてのほやほや」(‘fresh from the hand of God’) でいながら、まだ息をしていないという矛盾した描写は、作り物めいている。これは、ネルという生身の ‘effigy’ が見事に完成した図なのである。そして、この可憐な眠り姫のような死体こそ、『骨董屋』という見世物小屋小説の取りを飾るにふさわしい、最も面妖な ‘curiosity’ なのだ。

こうしてみると、この場面でディケンズがしていることは、蠟人形師がしていることと似ている。ジャーリー夫人のモデルになったと思われるマダム・タッソー (Madame Tussaud) の蠟人形館には、その名も「眠り姫」(Sleeping Beauty) という人形がある (図4)。これは、あたかも呼吸をしているように機械仕掛けでゆっくりと胸が上下する人形である。<sup>3</sup> 何もワイルド (Wilde) が言うように、ネルの死に様の虚構性に吹き出す必要もないだろうが、ネルの死に、自分の身の上に起こった悲しい別離を重ね合わせ、断腸の思いをするのでもない限り、テキストと挿絵のいずれにおいても一見しただけでは生死の判別のつかない、横たわるネルの姿に初めて対面する読者の眼差しは、図4でマダム・タッソーの「眠り姫」に目を凝らしている紳士のそれに似ていないだろうか。

完成された ‘effigy’ としてのネルの寝姿は、最終的に図3のような挿絵、つ

まりは‘tableau’として頁中のフレームに収まっている。つまり、‘effigy’が、納められるべき壁龕に納まっているわけである。『骨董屋』は、『バーナビー・ラッジ』同様、他のディケンズ作品と異なり、挿絵に木版画が用いられている。その結果、テキストと分離した頁にではなく、テキストの只中に挿絵を入れることが可能になったが、それはまた、この小説をより骨董屋、あるいは見世物小屋らしくすることにもなった。この物語のそこかしこには壁龕が設けられていて、そこには様々な‘effigies’が飾られていたり、あるいは、その空間で登場人物たちが‘tableaux vivants’を演じたりしているからである。

一方、壁龕から抜け出した‘effigy’のクウィルプは、ネルとは対照的に人間臭い死に様をみせる。パンチ劇の人形を強引に人間にしたようなキャラクターである彼は、物語の大部分で、人間離れしたフリークのように振舞ってい



図 4

るが、死の直前の彼の行動には注目すべき変化がみられる。第50章以降、彼は事務所として使っている川べりの小屋に寝泊りするようになるが、第62章で彼のもとを訪ねた Sampson・ブラスは、小屋の中に持ち込んだ船の船首像をキットに見立てて滅多打ちにしているクウィルプを目にする。

Although this might have been a very comical thing to look at from a secure gallery, as a bull-fight is found to be a comfortable spectacle by those who are not in the arena, and a house on fire is better than a play to people who don't live near it, there was something in the earnestness of Mr Quilp's manner which made his legal adviser feel that the counting-house was a little too small, and a deal too lonely, for the complete enjoyment of these humours. Therefore, he stood as far off as he could, while the dwarf was thus engaged; whimpering out but feeble applause; and when Quilp left off and sat down again from pure exhaustion, approached with more obsequiousness than ever. (475)

この様子は、一見、暴走したパンチのようだが、ここでのクウィルプの暴力性は、パンチのそれとは質が違う。パンチは自分の意に反する他の登場人物たちを悉く暴力的に葬ってしまうのだが、それらはみな再生可能な不死身のキャラクターたちである。また、スペイト (Speight) が指摘しているように、パンチ劇は破壊の反復を楽しむ人形劇であり、パンチが他のキャラクターを次々と片付けるのは、それが一番手っ取り早い場面転換の方法だからでもある (78-79)。繰り返されるパンチの暴力が、恨み辛みとは無縁の、あとくされのないものだからこそ、観衆も笑いながら憂さを晴らすことができるのだ。

一方、第62章から引用した場面でのクウィルプの暴力は、過剰であると同時に不可解である。それまでの彼は、嫌がらせをするにしても、威嚇するにしても、喜々として臨んでいる。しかし、この場面での彼は、むしろネルに似つかわしい「ひたむきさ」(‘the earnestness’) をみせていて、それが Sampson に恐れを抱かせている。また、「汗だくになり」(‘the perspiration streamed down his face’), へとへとになるまで (‘sat down again from pure exhaustion’), 船首像に対する攻撃を続けている。ここでのクウィルプの態度には、それまでの彼にみられた喜々とした様子も、楽しんでいる余裕もない。

また、クウィルプは、この船首像にキットへの憎しみをぶつけているらしいのだが、それも妙だ。確かにクウィルプはキットが嫌いだし、恨みを抱いていた。しかし、この場面より少し前、第59章で彼は、Sampsonと組んだ策略により、Sampsonの金をくすねたという濡れ衣をキットに被せることに成功

している。第60章でクウィルプは、図1のように居酒屋の窓から顔を出し、巡査に連れられて行くキットをさんざん弄って溜飲を下げているし、キットの姿を見送った後も、床を転げまわって大喜びしている。従って、彼はキットへの恨みはひとまず晴らしているはずである。 Sampsonの前で船首像を殴りつけてみせる直前にも、クウィルプは、逮捕されたキットが近く法廷で起訴されることを告げた記事を、節をつけて口ずさんでは、大笑いしている。その直後に、キットに見立てた像をへとへとなるまで殴りつけないではいられないクウィルプの内には、キットへの憎しみだけでは説明のつかない、何か過剰な恨み辛みが溜まっているように見える。この過剰を読み解くにあたって、プラット (Pratt) は、クウィルプは醜い自分の対極にある、善良かつ幸福で魅力的な人々への恨みを晴らしているのだ、と言い (138)、また、ウィンターズ (Winters) は、クウィルプの暴力のうちに、ディケンズによる自分の父親への攻撃をみている (177-78)。この船首像が、キット以外の、あるいはキット以上の、何を象徴しているにせよ、この場面でクウィルプがみせる剥き出しの感情と暴力は、語り手も述べているように、あまりに生々しすぎて見世物にはならない。しかし、このパンチの棹に収まりきれない憤懣の存在は、その分だけクウィルプというキャラクターに生身の人間臭さを加味している。

そして、プラットも指摘しているように、クウィルプは、死の場面において最も人間臭くなる。クウィルプの罪は露見し、一寸先も見えない深い霧のたち込めた夜に、彼の小屋に捕り手が迫る。逃げようとして足をすべらせた彼は、真っ暗闇の中、川に落ちてしまう。助けを求めるクウィルプだが、サリー・ブラスから手紙で警告を受け、捕り手を阻むために小屋に通じる門に門をかけたのは他でもない彼自身だった。あっという間に溺死した彼の死体は、かつて絞首刑を受けた海賊たちが晒し者になった場所にゴミのように流れ着く (図5)。クウィルプは、明らかに勧善懲悪の原理に則って処刑されたわけだが、あまりにあっけなく、墓穴を掘ったような皮肉な死に方が一抹の哀れを誘う。助かるうとして必死に足掻く彼の焦りと、自ら活路を絶ってしまっ



図5



たことを悟り、「しまった！」と思う一瞬の悔いを通して描かれるのは、紛れもなく、突然、死に直面してじたばたする人間の姿である。時間をかけて完成されたネルという‘effigy’は、死に近づくほどより人形らしくなるが、クウィルプは死の間際に一気に人間らしくなるのだ。

このように、ネルとクウィルプの死に様は対照的だが、これは、以下のような『骨董屋』執筆当初からディケンズの脳裏にあったコントラストの発展形である。それは、図6にみるような、穢れなく若々しいヒロインと、悪夢のように彼女を脅かす、古びてグロテスクな事物との間の対照である。この古びてグロテスクなものの中には、醜く老いることも含まれている。たとえば、ネルの葬列には老いさらばえてゾンビのようになった老人たちが参加している(559)。ネルのおじいさんのように、人は欲に憑りつかれると化け物になるが、齢の重ね方いかんでは、老いることによっても化けるのだ。

そのように、醜く化ける可能性を含めて、ネルを脅かすあらゆる醜悪なものは、最終的に、クウィルプと一緒に図5のような、物語中のゴミ捨て場に集中投下される。その結果、ネルは図3のような一幅の小奇麗な‘tableau’になって、男たちの永遠の片思いの受け皿となることができるわけだし、また、図6で彼女を取り囲んでいた醜い柵を、図7のようにきれいさっぱり振り捨てることもできるのである。

ネルは醜く化けることをあくまで忌避する生き方を貫いた結果、必然的に‘effigy’になったのだ、ともいえるが、図3のように、自らは決して見つめ返す



図6

ことなく、一方的に男たちの視線に晒される‘tableau’となったネルは、一見、美化されているようで、最高に貶められてもいる。化けることから逃げ切ったネルは、死ぬことによって、全くの見世物になるのである。一方、第17章で、ネルが墓場で出会う年老いた未亡人が、「死は生きることほどには人を変えはしない」と述べているとおり(134)、生きることは多かれ少なかれ化けることであり、化けようによってはかなりの見物になり得る。例えば、ギャンブル熱に浮かされたおじいさんのように、人はグロテスクなフリークに化けることもあれば、ディックと「侯爵夫人」のように、喜ばし



図7

い化け方をすることもあるのだ。『骨董屋』は、そんな様々な人間の化け様を出し物にし、少女が人形になって死んでいくドラマを主軸に据えた見世物小屋である。マダム・タッソーの蝋人形館がいまだにロンドンの名所であり続けている事実に鑑みれば、たとえネルの死に涙する読者が絶滅したとしても、人形が人間に化け、人間が人形化する様を描いた、この物語の面妖さは、まだまだ色褪せることはないだろう。

## 註

1. 本稿は、日本英文学会第 81 回全国大会（2009 年 5 月 31 日、於東京大学）において、口頭で発表した内容に、加筆、修正したものである。
2. ホルムストレームは、‘tableaux vivants’ は、純然とこの美学的意識のみから生まれた訳ではなく、プロの役者による演劇の歴史とは全く別の所から生まれた部分もあることを指摘している（221–22, 238）。
3. Inglis は、『骨董屋』第 32 章で登場する機械仕掛けの尼僧人形と、マダム・タッソーの「眠り姫」とを比較している（11）。

## 参考文献

- Adorno, Theodor W. ‘On Dickens’ *The Old Curiosity Shop*: A Lecture.’ *Notes to Literature*. Vol. 2. Trans. Shierry Weber Nicholsen. Ed. Rof Tiedemann. New York: Columbia UP, 1992. 170–77. Print.
- Altick, Richard. *The Shows of London*. Cambridge, MA: Belknap, 1978. Print. (邦訳オールティック, R・D『ロンドンの見世物 II』小池滋監訳, 国書刊行会, 1990 年.)
- Berridge, Kate. *Waxing Mythical: The Life and Legend of Madame Tussaud*. London: Murray, 2007. Print.
- Bowen, John. *Other Dickens: Pickwick to Chuzzlewit*. Oxford: Oxford UP, 2003. Print.
- Brennan, Elizabeth M. Introduction. *The Old Curiosity Shop*. By Charles Dickens. Ed. Brennan. Oxford: Oxford UP, 1998. vii–xxxii. Print.
- Carey, John. *The Violent Effigy: A Study of Dickens’ Imagination*. 2nd ed. London: Faber, 1991. Print.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Ed. Paul Schlicke. London: Everyman, 1995. Print.
- Dyson, A. E. *The Inimitable Dickens: A Reading of the Novels*. London: Macmillan, 1970. Print.
- Georgas, Marilyn. ‘Little Nell and the Art of Holy Dying: Dickens and Jeremy Taylor.’ *Dickens Studies Annual: Essays on Victorian Fiction* 20 (1991): 35–56. Print.
- Harvey, John. *Victorian Novelists and Their Illustrators*. London: Sidgwick, 1970. Print.
- Holmström, Kristen Gram. *Monodrama, Attitudes, Tableaux Vivants: Studies on Some Trends of Theatrical Fashion, 1770–1815*. Stockholm: Almqvist, 1967. Print.
- Inglis, Katherine. ‘Becoming Automatous: Automata in *The Old Curiosity Shop* and *Our Mutual Friend*.’ 19: *Interdisciplinary Studies in the Long Nineteenth Century* 6 (2008): 1–38. Web. 21 Sept 2008.
- Kelly, Dawn P. ‘Image and Effigy: The Illustrations to *The Old Curiosity Shop*.’ *Imagination on a Long Rein: English Literature Illustrated*. Ed. Joachim Möller. Marburg: Jonas, 1988. 136–47. Print.

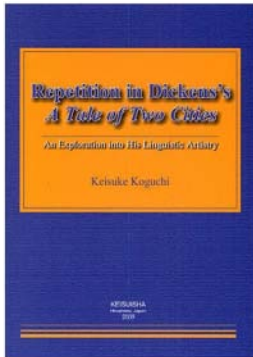


- Marcus, Steven. *Dickens: From Pickwick to Dombey*. London: Chatto, 1965. Print.
- Meisel, Martin. *Realizations: Narrative, Pictorial, and Theatrical Arts in Nineteenth-Century England*. Princeton: Princeton UP, 1983. Print.
- Pratt, Branwen. 'Sympathy for the Devil: A Dissenting View of Quilp.' *Hartford Studies in Literature: A Journal of Interdisciplinary Criticism* 6.2 (1974): 129–46. Print.
- Ransom, Teresa. *Madame Tussaud: A Life and a Time*. Phoenix Mill: Sutton, 2003. Print.
- Rogers, Philip. 'The Dynamics of Time in *The Old Curiosity Shop*.' *Nineteenth-Century Fiction* 28 (1973): 127–44. Print.
- Schlicke, Paul. *Dickens and Popular Entertainment*. London: Allen, 1985. Print.
- Schor, Hilary M. *Dickens and the Daughter of the House*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. Print.
- Speaight, George. *Punch and Judy: A History*. London: Studio Vista, 1970. Print.
- Stevens, Joan. 'Woodcuts Dropped into the Text: The Illustrations in *The Old Curiosity Shop* and *Barnaby Rudge*.' *Studies in Bibliography: Papers of the Bibliographical Society of the University of Virginia* 20 (1967): 113–33. Print.
- Wheeler, Michael. *Heaven, Hell, and the Victorians*. Cambridge: Cambridge UP, 1994. Print.
- Winters, Warrington. 'A Consummation Devoutly to Be Wished.' *Dickensian* 62 (1967): 176–80. Print.
- 原英一, 「人形劇から人間劇へ」, 『ディケンズ・フェロウシップ会報』, 第 14 号 (1991 年), 10–11 頁.

### 図版出典

- 図 1– 図 3; 図 5– 図 7: Charles Dickens, *The Old Curiosity Shop*. Introd. Earl of Wicklow. London: Oxford UP, 1975. Print.
- 図 4: *The Sleeping Beauty being examined by a Victorian gentleman*. Madame Tussaud's Archives.

書 評  
REVIEWS



Keisuke KOGUCHI,  
*Repetition in Dickens's A Tale of Two Cities:  
An Exploration into his Linguistic Artistry*  
(209 頁, 溪水社, 2009 年 3 月, 本体価格 4,200 円)  
ISBN: 9784863270589

(評) 三ツ星賢三  
Kenzo MITSUBOSHI

本書は、著者の高口圭輔氏が、熊本大学に提出された博士論文（英文）に、いくらかの加筆と訂正を行い、上梓した労作—長年にわたる研鑽の結晶—である。チャールズ・ディケンズの後期の佳作 *A Tale of Two Cities* (1859) に著しい特徴の反復法 (repetition) を統計的に精査して、登場人物の性格描写、主題との関わり合い、プロットの発展、パリとロンドンの舞台設定のねらい、絵画的な情景描写、作者の意図、ディケンズの英語の豊饒さと多義性 (polysemy) などを詳しく分析することにより、この愛すべき作品の文体を縦横に論じている。

この著書を、興味を持って、‘from the title to the printer’s name’の通りに紐解いた評者の素朴な感想から言えば、コンピューターを駆使して、語学的・文体論的研究を心ゆくまで突き詰めたという感じを抱いたが、世の研究書にありがちな独断専行とか、もったいぶった、しかつめらしいところがなく、論述に十分な説得力があるように思われる。3章からなる本論の随所に、図表が大小取り混ぜて48箇所があり（ページ数に換算すると2割強）、一目瞭然となっている。しかも、分かりやすい達意の英文で書かれていて、誤植もほとんどないのが嬉しい。

ディケンズの英語ときたら、やたらに文飾を施したり、大げさな表現をもてあそんでいるようなところもあるが、19世紀英語散文の集大成と言われるだけに、語学ならびに文体論の研究対象の宝庫となるのであろう。しかし、一昔前の語学的・文体論的アプローチとちがって、高口氏の論旨の裏づけになる詳細

なデータがコンピューターによってはじき出されている。何種類ものソフトウェアや、氏自ら手懸けたディケンズ全集の Corpus を活用して、膨大な、あまりに膨大な資料を自由自在に操っていることを思うと、もしかして、‘computer literacy’ に自信が持てない人、いや、‘technophobe’ は戸惑うのではないかと余計なことまで考えてしまう。

ディケンズという作家は、学歴がなく、深遠な思想や教養に乏しく、名だたる文豪に相応しい慧眼を持ち合わせていないと言われ、その作品の多くに ‘melodrama’ や、お涙頂戴の ‘sentimentalism’ とか、‘caricature’ を看板とする通俗性、それに、大向こうの人気をねらう姿勢が見られるため、いわゆる気難しい ‘highbrow’ から、しばしば鬻ぎを買ってきた。また、週刊誌や月刊誌に連載したためもあって、この小説家は、雑誌の売り上げ部数に一喜一憂した。読者を立てることをモットーにし、まるで店員のように、‘The customer is always right’ を信条にして、「読者を笑わせ、泣かせ、待たせる」(Make ‘em laugh, make ‘em cry, make ‘em wait) ことを厭わなかったと言えよう。

しかし、20 世紀の中頃から、ディケンズは、英米で再評価されて、手のひらを返したように持ち上げられるようになった。現代の病める人間や社会の姿を先取りして、その生き方やあり方を真摯に追求して飽くことがなかったばかりか、小説の構成や技法の上でも、斬新な手法を開拓して、少なからざる貢献をした、と喝破する有力な批評が相次いだからである。また、彼の英語や文体についても、遅ればせながら、1970 年代以降、注目すべき研究成果が生まれて、広大無辺な英語散文の大家という地位を不動のものにした。

ディケンズ批評のこのような変遷、というよりも、極端な毀誉褒貶が、今後ぶり返されることはないにしても、私たちは、いつも、あるがままのディケンズを、短所は短所とし、長所は長所として、冷静に、厳密に見つめる必要があると思われる。その際、忘れてならないのは、良心的なジャーナリズムがよりどころとする ‘without fear or favour’ で、時の批評の流れにひるんだり、また、おもねることがあってはならない。

*A Tale of Two Cities* は、数ある彼の作品の中でも、批評家と一般読者との間で評価が分かれていることでよく知られている。後者の側には圧倒的な人気があるのに反して、前者はあまり高く買わない。ディケンズ研究の金字塔ともいべき *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* を著した Edgar Johnson だけでなく、*The Concise Cambridge History of English Literature* という名著を物した George Sampson も、‘Many people who do not care for the rest of Dickens like it [*A Tale of Two Cities*] greatly; many who are enthusiastic about Dickens refuse to give it a

second reading' と述べている (629 頁). したがって, 高口氏が, 反復法の視点から, この作品を評価したのは当を得ていると言えよう.

小説というのは, 何もディケンズの場合にかぎらず, 冒頭の書き出しが物を言うが, *A Tale of Two Cities* は, 古今東西のどの作品にも引けをとらない. 'It was the best of times, it was the worst of times' で始まる, 思わず朗読したくなるような, 例の有名な文章は, 著者も指摘しているように (146 頁), 反復法と対照法 (antithesis) が均衡を保って, 見事としか言いようがない. この冒頭の謎めいた 2 節と, 同じく神秘的な第一編の表題「よみがえった」(Recalled to Life) だけでも, 読者をいやおうなしに小説の世界に引きずり込む不思議な力を持っている.

フランス革命という歴史上の大事件を背景にして, 当時のパリとロンドンの二都を舞台に繰り広げられる物語は, 読者の気を逸らさぬように, さまざまな仕掛けや工夫がなされて, 彫心鏤骨の作となっており, 'storyteller' としてのディケンズの面目が躍如としている. 著者は, この作品の 'key word' や重要な内容語 (content word) — 'light', 'dark', 'shadow', 'darkness', 'footstep', 'knit', 'business', 'wine', 'red', 'blood', 'guillotine', 'fountain', 'hand', 'finger', 'head', 'hair', 'eye', 'eyebrows', 'plain-tree' など— を数多く取り上げ, それらの類義語や連語, 修飾語の頻度を克明に調べ, 興味深い解釈を下すのである.

例えば, 'business' という同じ語であっても, 登場人物の職業や役割によってそれぞれ異なる意味合いを持つのが面白い (133-37 頁). 篤実なテルソン銀行員 Mr. Lorry の口癖は 'I am a man of business' で, これが, 作者の意図通り, 実に心憎いほど利いている. 他の人物, 特に Lucie や Doctor Manette のために献身的に奔走する彼の姿は愛情深く, 「必ずしも事務的でない」(134 頁). また, Sydney Carton, Jerry Cruncher, Madame Defarge の 'business' は, それぞれ, 他人が真似することのできない自己犠牲, 金儲けのための死体盗掘, 貴族の暴虐を許さない復讐の火炎であることが読者に分かっている. そして, 貧民街 Saint Antoine の酒場 (wine-shop) に寄り集まる人々が飲むワインは, 'eat, drink, and be merry' のような和気藹々の雰囲気をかもし出すのではなく, 積年の怨恨を晴らそうとする復讐鬼たちの「連帯感を生み出す」(158 頁) ののである.

著者は, 上記の 'hand', 'head', 'eye' という語の頻度を述べた箇所 (84 頁), イギリスの女流小説家ジェイン・オースティン (Jane Austen; 1775-1817) を引き合いに出して, これら 3 語の頻度数を比較しているが, ディケンズと並ぶヴィクトリア時代の大家 W・M・サッカリー (William Makepeace Thackeray; 1811-63) のデータと比較すると, 一層面白い事実が裏づけられるのではない

だろうか。いや、サッカリーだけでなくジョージ・エリオット (George Eliot; 1819–80) やトマス・ハーディ (Thomas Hardy; 1840–1928) など比較の対象にならないだろうか。

その上、ディケンズは、アンシャンレジームにおける貴族階級の暴戾と並んで、暴徒と化した狂信的な革命煽動者を非難攻撃したと言われるが、実際は、この両者の非人間性の程度に微妙な差をつけていないのかどうか、「ディケンズの皮肉な目」(176頁)が光っているのかどうか、例の膨大なデータから、数値と統計による新たな証拠が出てこないのだろうか。このように、あれこれと思い巡らしてゆくと、*A Tale of Two Cities* という作品が、俄然、私たちの関心を引きつけてやまないのである。一体、この小説を、どうして臆面もなく、「二度と読もうとしない」などと言えるのだろうか。

語句の反復や繰り返しが絶妙な効果をもたらすときはよいが、反対に、‘ad nauseam’ (うんざりするほど) になることがないとは言えない。例えば、権勢を誇るフランス貴族一家から濡れ衣を着せられ、18年間も、Bastille 監獄に幽閉の憂き目を見た Doctor Manette をロンドンに連れて帰ろうとする娘の Lucie が繰り返す ‘weep for it’ はくどすぎるように思われる。また、この小説の最終ページで、断頭台の露と消える前の Sydney Carton の述懐に見られる語句 ‘I see’ の多すぎる繰り返しを、著者は、結論部で、主題の再生・復活 (resurrection) や「ディケンズの来世観」との関連で高く評価しているが (191頁)、Carton 自らに語らせることによって、愛する女性のために身命を投げ出すことの崇高さ、「自己犠牲という英雄的行為」の純真さを、かえってくもらせてしまい、あらずもがなの感を否めないのではないだろうか (135頁)。

ところで、先述したように、本書には誤植がほとんどない。それは、著者が、細心の注意を払って仕上げたからに他ならないが、ひょっとしたら、ここでも、コンピューターの威力を見せつけているのかもしれない。二、三気がついた点に触れておくと、33頁3行目の ‘Solomn’s’ は ‘Solomon’s’, 54頁の表の1と3は、それぞれ ‘A faint voice’ と ‘a white-haired man’, 59頁13行目の ‘are’ は ‘is’, 190頁の13行目の ‘Interesting’ は ‘Interestingly’ が、また、196頁12行目の ‘A Tale of Two Cities’ はイタリック体が正しいのではあるまいか。

チャールズ・ディケンズの英語と文体を究めんとする高口圭輔氏は、著書の最後に、‘work in progress’ について言及し、*A Tale of Two Cities* を論じた観点から、この小説家の「全作品」(192頁)を考察するという抱負を語っているが、頼もしいかぎりである。評者のように、いつの間にか馬齢を重ねて、ついに<高齢

者>の仲間入りをすると、「青春をこっそり盗む時の翁」(Time, the subtle thief of youth)に不平をかこったり、‘Old soldiers never die; they only fade away’と口ずさむぐらいしかなく、内心忸怩たるものがある。安田女子大学で教鞭をとられる少壮気鋭のディケンズ研究家高口氏が、ますます活躍されんことを祈念してやまない。

藤田 永祐著、

『ディケンズ、フォースター、オースティン』

Eisuke FUJITA, *Dickens, Forster, Austen*

(266 頁, 春風社, 2008 年 7 月,

本体価格 2,200 円)

ISBN: 9784861101540



(評) 武井暁子

Akiko TAKEI

本書は、著者が勤務先の紀要に発表した論文 6 篇を選び、加筆し、まとめたものである。対象は、ディケンズ『二都物語』、『デイヴィッド・コパフィールド』、『荒涼館』、フォースター『インドへの道』、オースティン『高慢と偏見』、『説得』(掲載順、作品名と人名表記は本書に従う)と、いずれもイギリス小説のカノンを構成する作品群だ。著者は、前書きで、「現在の文学と古典の文学とは、音楽におけるように互いに補い合っているといえよう」と述べ(5 頁)、数多い作家の中からこの 3 人を取り上げたのは「それぞれにイギリス小説の伝統を代表する、古典性と現代性を併せもつ文人たちである」からだと言う(5 頁)。本書出版の意義について、「わが国では、しばらく前から若者たちに限らず一般の人々にも、活字離れの風潮が広がっているようである。イギリス小説の研究書の類も、そんな時代だからこそ専門家のみならず一般の読書人にも読まれ、観賞されるのが望ましいであろう」と断じる(5-6 頁)。本書は、一般読者がわかりやすく読めることを重視したため、通常の研究書より、あらずじにかなりのスペースを割き、その合間に自説を展開するスタイルをとっている。



第1章『二都物語』論は、「ディケンズの世界をありきたりの域を超えて親しく知ろうとするには格好の作品」,「ほぼ中間点まで物語を追いながら作品を鑑賞していくことで,ディケンズの世界を考察してみたい」との言通り(9頁),作品論の他にディケンズ入門編の役割を果たす。著者は全45章の中から,14章のハイライトとなる場面を引用し,ディケンズの人物描写,重要なテーマについて解説を行う。例えば,第1巻第5章での,ロリーとドファルジュのマネットの長年の投獄に関する会話を引用し,「長年牢に幽閉されるという観念は,ディケンズがもつ暗いオブセッションの典型的なものである。この恐怖は彼のほとんどの小説に直接的,間接的に登場してくる。この脅迫観念の素因になったものは少年時代の辛く恐ろしい体験にあった」と述べる(16-17頁)。作品後半への言及がないのは,読者の楽しみを奪わぬためとも,また応用は読者にゆだねるともとれるアンダーステイトメントの感がある。

第2章『デイヴィッド・コパフィールド』論は,「いかにもディケンズらしい人物描写」を通して,この作品の魅力を解明しようというものである(46頁)。考察の対象はメル,ベッツィ,ミスター・ディック,ステアフォース,クララ・ペゴティ,ミセス・ガミッジだ。例えば,メルについては「描かれていない彼の人生を,彼の奇癖は雄弁に伝えてくれる。ここに記された個人的奇癖は,ミスター・メルの内的感情生活のエッセンスの表出にはほかならないからである[中略]ディケンズのこのぶっきらぼうな記述には,普通の平面的な写実的描写が達しえない深みとふくらみがある。創作心理の面からみれば,たんなる写実的描写より,作者の作中人物への感情移入の程度は高く,芸術的燃焼度もまた高いのである」と分析する(47頁)。他には,滅多に論じられないミセス・ガミッジの神経症の考察は評者の研究対象と重なり,短いながらも興味深かった。さらに,「いかにもディケンズらしい人物描写」を論じるなら(47頁),ミコーバー,ユライア・ヒープについても著者の自説を聞きたいところだ。

第3章『荒涼館』論は,「ディケンズが創造した人物たちの中で最も人気がない一人」である主人公エスタ・サマソンを(78頁),「女らしい情感を秘める活きた個性をもつ存在」として擁護し(80頁),再評価を試みる。『マンズフィールド・パーク』の主人公ファニー・プライス擁護と共通する難しさがあり,どのような新機軸を打ち出すのかと期待しながら読んだ。著者は,エスタがウッドコートに対する関心や好意をことさら抑制し,まわりくどく間接的に表現することを,いくつかの引用を通して指摘し,その原因として「生まれと育ちの特殊な事情」,「ヴィクトリア朝の社会が処女に要求した嗜みの観念が,内気な乙女に及ぼした影響」を挙げる(87頁)。エスタの出生と叔母の禁欲的な教育がエスタの人格形成に重大な影響を及ぼしたことは衆目の一致するところで

あり、エスタ批判の主要な原因にもなっている。エスタ擁護のためには、幼いエスタにとっては叔母の教育が一種のトラウマになったことを心理学的に分析し、天然痘の後遺症で容貌を損ない、ウッドコートを失うかもしれぬ局面に陥って、ようやく自己抑制の呪縛から逃れるまでの過程を綿密に検証すれば、さらに説得力が増し、論考に独自性が出ただろう。

第4章『インドへの道』論は、作中のイギリスとインド、イギリス人とインド人の対比を基にして、「インド人とイギリス人のあいだに真の友情と理解ははたして可能か」(107頁)、「現代人としてのフォースターがもつ、自由主義やその不可知論に対する鋭敏な批判、懐疑、限界性の意識」を考察する(145頁)。秩序と混乱、科学と自然、意識の世界と無意識の世界、理性と非理性といった二項対立を用いて、フォースターが看破した西欧の合理主義と物質文明の限界を、著者はわかりやすく解説する。さらに、二項対立から論を進めて、著者は、フィールドینگ、アデラ、ムア夫人、ロニーなどの主要人物の言動を丹念に分析しつつ、イギリス人個々の間にもインド理解の差があることを明らかにする。とはいえ、マラバー洞窟に赴いて精神に混乱をきたしたアデラやムア夫人同様、著者もこの長大な作品の持つ多様性、フォースターの複合的視点をときに扱いかねている観がある。最大の山場である、アデラのアスイズ告訴と裁判に題材をしぼって、イギリスとインドの対比を論じるというというアプローチもあったかもしれない。また著者がこの作品の最大のテーマとして挙げた「インド人とイギリス人のあいだに真の友情と理解ははたして可能か」については未解答だが(107頁)、作品の結末から判断する限り、評者は「不可能」という解釈に立ってきた。

第5章『高慢と偏見』論の「虚構性と現実性」と題する前半は、エリザベスとダーシー双方の視点から、初対面から結婚に至るまでの出来事を時系列にそって列挙し、構成とプロットが整っており、現実性と虚構性が絶妙に絡み合っていることがこの作品の特徴だと結論付ける。例えば、リディアのブライトン行きと駆け落ちはプロットの不可欠の一部であり、ベネット氏の無責任な父親としての性格設定が役に立っていると、著者は言う。別の例では、エリザベスとダーシーのペンバリーでの予期せぬ再会が自然に見えるよう、オースティンがいかに入念に工夫をこらしているかを立証する。「シンデレラストーリーのヒーロー、ダーシー」と題する後半では、性的要素が抑制されたロマンスのヒーローとしてのダーシーの人物設定を分析し、「彼の尊大さ、高慢さには不器用さがあるのだ。この不器用さは技巧や計算の有無を意味し、それは極めて損になるかたちで顕れた誠実性にほかならない」と主張する(200頁)。オースティン研究では、女性登場人物が論考の対象になることが圧倒的に多いので、



この箇所は興味深かった。ダーシーの「不器用さ」はイギリスのジェントルマンの美点の本質であり、ナイトリーにも同種の性格があることに言及すれば、より視点が広がったであろう。

第6章『説得』論は、オースティンの最後の完成作品であるこの小説の「秘めやかなロマンス性」を(216頁)、ウェントワースとの婚約破棄後アンが体験する孤独と疎外、ウェントワースとの再会、葛藤、大団円にいたるまでのアンの心の動きを丁寧分析しつつ、明らかにする。この作品の根幹をなす問題は「アンがラッセル夫人の『説得』に従ったのは妥当だったか」ということだ。著者は「この作品の底に流れる関心は、人の正しい生き方とは、という問題である。それはときとして極めて苦しい選択を人に強い、それに従うには己の全力を要するとするのである [中略] そして人は正しいモラルにしたがって生きて初めて本当の人間的な喜び—この作品では愛の成就の喜び [中略] を克ちうるのだと作者は主張する。よしそれが苦悩と哀しみにつながろうとも価値ある生活があるのだ」と結論する(255頁)。評者は、アンがラッセル夫人の説得への服従とその結果として招いた8年間の不幸と若さの消失は、年長者への敬意、家父長制社会で女性にのみ課せられた義務が往々にして自己決定権を奪う危険性をはらむというオースティンの主張であると解釈するのだが、これは見解の相違であろうし、これからも『説得』を論じるうえで重要なテーマになるだろう。比較対象として取り上げられた漱石の『道草』結末の会話は、第5章で論じるほうが妥当ではないか。

以上のように、本書は奇をてらわず、わかりやすさを主眼としたもので、長年の研究で培った堅実さには一定の評価を与えるべきであろう。単行本として出版するからには、テーマや取り扱う作家、作品にもう少し一貫性があればさらに読みやすくなったことであろう。時代と作風が全く異なる3人の作家を一冊の単行本で論じる必然性は何なのかが明確に示されていると学生や院生の理解を容易にすることであろう。作品の出版年代順に章を割り振るなども工夫の一例となりえた。

個々の章においても論理の飛躍がある。例えば、第3章は、『荒涼館』論、ブロンテ、オースティンとの比較、『荒涼館』論、『デイヴィッド・コパフィーールド』との比較、『荒涼館』論、『カラマーゾフの兄弟』との比較、『荒涼館』論という構成だが、他の小説家や作品との比較がいかにも唐突に登場し、とまどった。著者はそのたびに「話を『荒涼館』に戻したい」(86, 97頁)、「話を『荒涼館』の世界に戻すと」(89頁)、「ところで、話が飛ぶことになるが」と断っているのだが(94頁)、さながら転調が多い楽曲を聴いているかのようであった。古典音楽の作曲法に従って、転調は1回にとどめるべきである。

評者は、学位論文執筆時に指導教授から「段落と段落のつなぎは馬車の走りと同じようなものだ。次の段落で急に話題を変えると馬車は転覆する」との指導を受けたが、その指摘にならえば、本書の読解にあたり、かなりの揺れを経験した。射程を大きくとり、複数の作品を論じる著書を滑らかに前進させることの難しさを痛感した。



新井潤美著、『自負と偏見のイギリス文化  
—J・オースティンの世界』

Meg ARAI, *Pride and Prejudice of British Culture:  
The World of Jane Austen*

(岩波新書, 184 頁, 岩波書店, 2008 年 9 月, 本体価格 735 円)

ISBN: 4004311497

(評) 鶴飼信光  
Nobumitsu UKAI

ジェイン・オースティンの作品、その生きた時代、人生、作品の受容などをバランスよく論じた好著が、本学会員新井潤美氏によって岩波新書に加えられた。本書の大きな魅力の一つは、イギリスの寄宿学校におられた著者の経験に基づき、オースティンや摂政時代がイギリス人にどう受け止められているかが実感をもって伝えられていることである。また、近年の一大オースティン・ブームを含め、オースティンへの古今の人々の入れ込みようの紹介も興味深い。作家論として、パロディーと風刺の精神がことのほか強烈だった習作期の諸作品、投資、土地開発といった新たなテーマを題材とした未完の『サンディトン』にも目を向け、主要六作品だけからは分からないオースティン像を提示しているのも本書の有意義なところである。ヴィクトリア朝と対照的な摂政時代の放埒さ、華やかさの生き生きとした紹介も本書の読みどころだが、本書の力点はその時代思潮のオースティンへの直接的な影響よりは、摂政時代へのイギリス人の郷愁と共感に置かれている。偽善や抑圧とは対照的な笑い、自分の姿を笑う余裕があるという「自負」、周囲には受け入れられていようが自分から見て愚かで馬鹿げていることならそれを容赦

なく笑う「偏見」とにイギリス文化の特性を見るのが著者の視点で、それが『自負と偏見のイギリス文化』という書名にもなっている。本書は、こうした独自の視点を備えているだけでなく、これからオースティンに親しもうとする読者にも最良の手引きとなるような諸作品の紹介と考察で構成されており、さらには、ディナーの時間の変化、カントリー・ハウス観光など、作品の理解に役立つ文化の豆知識のコラムも織り込まれている。このような本書が一般読者にも入手しやすい新書として出版されたのは、とても喜ばしいことと言えるだろう。

オースティンについて新井氏は既に岩波文庫に書簡集を編集・訳出する仕事をなさっているが、その時の「まえがき」でも触れられているように、オースティンの遺族は書簡の改編や廃棄を通して、オースティンをヴィクトリア朝の謹厳な道徳観に合致した人物に仕立て上げようとしていた形跡がある。今回の著書では1800年、24歳のオースティンが姉に宛てた手紙で、舞踏会に知り合いの三人の人物が全員黒で身を固めて現れたので「私は、彼らのくさい息が許す限り、礼儀正しく話をしました」と書いていたのを、遺族が1884年刊の書簡集で「状況が許す限り、礼儀正しく」と書き換えていたという改編の印象的な事例が紹介されている。後代の伝記作者たちも上品で優雅な淑女としてのオースティン像を築き上げ、オースティンをヴィクトリア朝の作家と勘違いしているイギリス人が現在でも少なくないらしい。

しかし、1775年に生まれ1817年に没しているオースティンは、十八世紀末からヴィクトリア女王が即位する1837年までを一般に指す、広義の「摂政時代（リージェンシー）」の自由奔放な快樂主義の風潮の中で生きた作家である。そうしたオースティンの「リージェンシー的」な感性を、新井氏は特にオースティンが死の直前の半年間に十二章まで書いていた未完の『サンディトン』に見出している。確かに、自分が住む海浜の町サンディトンを流行の最先端の海水浴場にしようとする土地開発の投機にのめり込む人物のきらきらした欲望を描き、ロマンスにかぶれほとんどストーリーに化している男性、健康への過剰な心配にとらわれた何人もの人物を強烈に戯画化するこの作品は、上品に取り澄ました作家によるものとはほど遠く、新井氏が指摘するようにほとんど現代のイギリスにも通用するテーマに満ちている。

新井氏はまたオースティンの習作期の作品にも「リージェンシー的」はげしさを見ておられる。ただしこれは、ミドル・クラス出身のしゃれ男ブラメルに新しいコートをけなされてジョージ四世が人前で泣き崩れるような、時代の感傷主義へのオースティンの奔放な反発に向けられた注目である。オースティンの創作の出発は当時の情緒過剰で現実逃避的な小説への反発にあったが、意図的に荒唐無稽にされた習作期の作品の風刺は相当にきつい。例えば『恋愛と友

情』のヒロインは、初対面の若者と瞬時に恋に落ちて結婚、夫の友人の妻ソフィアとも初対面で永遠の友情を誓い、二人の夫が馬車の事故で死亡するのを目撃した時には発狂し、友人ソフィアの方は何度も失神しすぎて風邪を引きそれがもとで死んでしまう、といった具合である。感傷主義が時代の風潮であった一方で、その風潮を笑いのめすオースティンの奔放さ加減もまた、ヴィクトリア朝とは対照的なリージェンシーの気風であるのは確かだろう。

オースティンのそうした感情偏重批判は『分別と多感』でもっと成熟した形で描かれるに至り、パロディーの精神は『ノーサンガー・アビー』を生み出す。また、感情偏重を批判する一方、オースティンは『説き伏せられて』では過剰だったかもしれない「分別」の結果を描く。しかし、成熟はオースティンをリージェンシー的なものと無縁にしているのではない。「パロディーから始まる恋愛小説」、「恋愛と結婚—女性の死活問題」、「アッパー・ミドル・クラスのこだわり—階級を示す目安は何か」という三つの章を立て、完成された六つの長編、未完の『ワトソン家の人々』、オースティンの実人生などを新井氏が丁寧にたどり、示しておられるように、過剰なほど敏感な階級意識のおかしみ、結婚相手獲得のための狡猾だがしばしば成功しない作為の滑稽さ等々は、リージェンシーの開放的な笑いの対象となり、そうした笑いは現代人の心をもとらえ続けるのである。

『自負と偏見』でダーシーにとって最初大して美人に見えなかったエリザベスが、どんどん魅力的に見えるようになっていったように、同一のもの見え方、感じられ方は大いに変化する。オースティンの作品に堅苦しいきまじめさを感じ取ってしまう人々も少なくないらしく、新井氏はイギリスでの学校時代、オースティン好きを表明すると立派だと言ってからかわれたというエピソードを紹介しておられる。しかし、オースティンの作品を一度読んで不幸にも堅苦しさが感じられなかった読者も、感じ方が大きく変化する可能性はある。新井氏が紹介しておられる近年のオースティン・ブームは、オースティンへの人々の感じ方の大きな変化を反映しているだろう。新井氏の今回の著書はオースティンをいわばリージェンシー的に楽しく享受しようという精神に貫かれているように感じられるが、その精神は読者にも伝わり、オースティンの楽しさに満ちた受容をますます広めてゆくことだろう。



Anselm Heinrich, Katherine Newey  
and Jeffrey Richards, ed.,

*Ruskin, the Theatre and Victorian Visual Culture*

(265 頁, Palgrave Macmillan,  
2009 年 5 月, 本体価格 £50.00)

ISBN: 0230200591

(評) 田中裕介  
Yusuke TANAKA

たとえ日本では観劇の習慣をもたなくても、イギリスに行けば劇場に足を運ぶことを愉しみのひとつに数えている向きは本誌の読者には多いであろう。日本の演劇には安っぽい学生芝居かけばけばしい商業主義興行しかないと考えるのは明らかに偏見であるが、劇場通いという行為が日本の日常生活にはなじまないようだと思っている人々が多いと思われる（日本の伝統演劇の問題が生じるがそれは割愛）。そのはしくれである私も先だつての短期のロンドン滞在中には何度か劇場に足を踏み入れたが、なかでもロングラン興行中の評判のミュージカル『ピリー・エリオット』には（事前には暇潰し程度の考えていたのだが）全身が巻き込まれるような思いを味わった。

ヴィクトリア・パレスでのこの「総体」に関わる感興を体のどこかに残したままだったからこそ、帰国して披いた本書『ラスキン、演劇、ヴィクトリア時代の視覚文化』の序論で「19世紀の演劇」を「あらゆる芸術の総合の重要な場」として捉えるという記述を目にしたとき、その「総合」という語が生々しく感じられ、本書を「ラスキン」と「演劇」の関係を静的に記述しただけの論文がばらばらに並べられた書物と未読の段階で考えていたことが浅慮と認識されたのであった。

総合芸術としての演劇という文脈に沿って、ラスキンの言論活動を捉え直す。この単純な要約に含まれる本書の意図は、重層的な批評性を帯びていると言わねばならない。それを解きほぐしつつ本書の内容を紹介したいと思う。まず総合芸術としての演劇という把握について。歴史的に言えば、19世紀末以降、あらゆる芸術においてジャンルの純粋性に高い価値が置かれるようになり（つまり絵画ならば絵画でしか表現できないものを提示している絵画が評価されるようになり）、演劇も前衛演劇に代表されるような実験性と抽象性への道をたどりはじめる。その流れの中で大きな芸術的成果が生じたことは疑いないが、19世紀の演劇は全般に猥雑な大衆演劇として軽視される傾向にあったといえよ



う。文学や絵画でも事情は同じだろうが、モノである活字として画布として残されている両者に比べて演劇についてはその再評価の試みに圧倒的な困難が付きまといていることは否めない。上演それ自体が物理的に残されていないのだから。しかしそれゆえに、歴史の中で消えてしまった全体性としての演劇を断片的であらざるをえない様々な活字と図像の史料を通して復元することをひとつの基軸とする本書は、モダニズム以降、芸術の純粹性という美名のもとに芸術と社会の総体的な関係を犠牲にしてきた近代文化の流れに逆行してその修正を迫る試みとして捉えられる。そのような野心的な編集意図を伝える序論を執筆したのは編者のひとりキャサリン・ニューウィー (Katherine Newey) であるが、彼女はその認識をたとえ明示的な言及はなくてもレイモンド・ウィリアムズに負っていると言って間違いないだろう (「感情の構造」というウィリアムズの鍵概念は3ページでさりげなく用いられている)。「演劇」とは、ヴィクトリア時代の社会を総体として包み込むかたちで存在していたが失われてしまった全体的な芸術の「隠喩」なのである。その意味で序論の言挙げに比べればややトリヴィアルな記述に走る論文が多いと感じられても、ヴィクトリア時代の文化「全体」への扉が開かれているという前提があるために、その一見瑣末な考証も楽しんで読むことができる。

この図式に「ラスキン」という項目を付け加えることで、ヴィクトリア時代はいかなる風景として立ち現れることになるのだろうか。ラスキンが何よりも絵画という「高級文化」の批評家であるかぎり、「劇場」と「ヴィクトリア時代の視覚文化」という二つの項の前にその名前を置く本書の戦略からは、大衆文化というオルタナティヴを提示することで社会の全体性の幻想を安易に振り撒く (もっとも低水準の) カルチュラル・スタディーズの手法と一線を画そうとする意思が見えてくる。やや理屈っぽく言えば、失われた全体としてのみ演劇を措定する素朴な疎外論的視点への没入を防ぎ止める効果が生じているのである。確かにラスキンという高級文化の権化とも思われる批評家を通してヴィクトリア時代の演劇事情を眺めることで、あたかも二重、三重に輻輳する光線のように「文化」は捉えられるのであり、その中でこの時代が立体的な姿として映し出されることが期待されるだろう。有名俳優ヘンリー・アーヴィングとエレン・テリーの「写真」という新しいメディアに対する意識とその使用法を扱ったシーアラー・ウェスト (Shearer West) 論文、ヴィクトリア時代の演劇を取り巻く諸々の要素が当時の漫画・戯画の中でどのように表象されたのかを論じるジム・デイヴィス (Jim Davis) 論文、ヴィクトリア時代の演劇において「エキストラ」の果たした役割を分析するデイヴィッド・マイヤー (David Mayer) 論文、大衆劇場であったブリタニア劇場の上演事情を精査したジャン

ス・ノーウッド (Janice Norwood) 論文などは、ラスキンとさして深いつながりをもたないように思われるにしても、本書の枠組みの中でラスキンという名前を通して、高級文化と大衆文化の相互浸透という意味づけがあるために、単に知られざる文化の掘り起こし作業の散漫な記述にはとどまらず、ヴィクトリア時代の重層的な文化の一断面を見せてくれる印象の読み物になっている。サヴォイ・オペラを題材とする J・A・ヒルトン (J. A. Hilton) 論文も同じ系列に並べることができるが、上記の四論文が大衆文化探究の方への遠心的・拡散的傾向を有しているのに対して、サヴォイ・オペラに記された何気ない言い回しからラスキンの影を丁寧に読み解くというアプローチを採っている。ただしこの論文でも、単にテキスト間の比較に埋没するのではなく、ラスキンへの目配せがはっきり了解できた当時の観客へのこの批評家の影響の広さを指摘することを忘れない。アマチュア劇団によるギリシア古典演劇の演出にオリンピア派の画家たちが与えた影響を論じるジェフリー・リチャーズ (Jeffrey Richards) 論文も、ラスキンを正面から扱ってはいないが、ここではだからこそ、意外な題材の選択の効果と相俟ってこの批評家が歴史の環境で自由に呼吸しているように感じられ、ヴィクトリア時代の文化の幅広い音域を示唆することに成功していると思われる。その意味ではヴィクトリア時代における『ヴェニス商人』の上演に際してラスキン『ヴェニスの石』が大いに参照された歴史的事実に照明を当てるリチャード・フォウクス (Richard Foulkes) 論文が基づくのは予定調和の枠組みかもしれないが、舞台建築などの細部にまで行き届いた論述が手堅い印象を残した。

上に挙げた論文群の不十分な紹介を通してさえも、本論集において演劇が、狭義のそれにとどまらず、建築、絵画、戯画、写真、文学などを包摂する総合芸術の隠喩であることが理解されたであろうと思う。そのような芸術の全体性が分解する過程を歴史的に考えるならば、序論に書き込まれている概念「モダニティ」が浮上することは避けがたい。そして本論集の暗黙の理論的前提となっているのが、ウィリアムズと並んで、ボードレールを「モダニティ」の詩人として論じたヴァルター・ベンヤミンであることが感得されるのである。ただしラスキンにおける近代性とメディアの問題を、断片的以上に扱っている論文は見当たらない。ラスキンをいわばイングランドの「ボードレール」として捉えてその像とのずれと重なりを正面から扱う、多少理論寄りの論文を読みたかった気もする。

その点に照らして、パントマイムの純真無垢を愉しんだラスキンの劇場体験を、彼のセクシュアリティとは言わないまでも、同伴した若い女性たちから得られた感覚の経験と重ねるレイチェル・ディキンソン (Rachel Dickinson) 論

文に興味を惹かれた。ラスキンがターナーに、そしてラファエル前派の画家たちに認めて評価した重要ではあるにせよ茫漠とした語‘nature’を単にいわゆる自然と見做すのではなく、都市における感覚の経験としても発現すると考えるならば、彼が同時代の演劇から得ていた感興として論じることとも可能と思われるのであり、この切り口がラスキンをモダニティの批評家として再生させる突破口になりうるかもしれない。通説ではブラウニングの「劇的独白」という形式を評価していたと言われるラスキンだが、実際は反対にきわめて激烈な批判をこの詩人に向けていた事実を未刊行の書簡から炙り出すアンドリュー・レン (Andrew Leng) 論文も、ラスキンにとって17世紀フランスの喜劇作家であるモリエールという意外な文学者が重要な存在であったという論をテキストの細密な注釈を重ねつつ立てるアンドリュー・テイト (Andrew Tate) 論文も、「ラスキン」と「ヴィクトリア時代の視覚文化」をつなぐ媒介項として「絵画」ではなく「演劇」を設定する枠組みを通して、先の方で挙げた論文群とは異なりラスキンの膨大な著作群を新しく読み直す方向性を示しているのだが、あわせて絵画に定着された自然とは別のものとして‘nature’を位置づける論点を内包しているといえよう。レン (Leng) 論文で解釈のひとつの基礎を提供していたのが、ラスキンのローズへの愛であり、これはラスキンの伝記的記述で必ずと言っていいほど言及される事実だが、(やや本書の主旨から逸脱するとしても) そのセクシュアリティについても精神分析を援用した本格的な論文が欲しかったところである。おそらくそのような観点のもとでこそ、ラスキンの‘nature’は狭義の芸術論の枠組みから離れて、感覚の体験を性と狂気の問題へとつなぐ不気味な概念として甦ることになると思われる。

以上の三論文の指し示す方向性を、ヴィクトリア時代の文化を遠心的に探究するそれ以上に評価したい気持ちが私にあるのは、ラスキン読み直しの作業の前に必要な種の解毒剤としての役割を果たしているとも思えるからである。どんな事典のラスキンの項目にも記述されているのは、ターナーとラファエル前派の画家たちに対して先駆的な評価を下した半面、ホイッスラーの絵画に悪罵を投げつけるなどモダニズムへいたる芸術の動向を理解し得なかったという事実である。もちろんこれ自体はヴィクトリア時代の文化を語る上では欠かせないトピックといえるけれども、そこを着地点とすることでラスキンの言語の途轍もなく広大な可能性を低い水準におしとどめてしまう危険性がある。だからこそ、「演劇」との関わりを通じてラスキンのテキストそのものの再解釈へ踏み出そうとするこの志向は、ラスキンにまわりつく長年の通念に従ってその著作を読んでしまうという自家中毒症状を癒す効能があるといえよう。リチャーズ (Richards) 論文も、とくに1870年代以降、ボッティチェリ評価や



バーン＝ジョーンズ擁護の文章に見られるように古典主義的芸術への傾斜を一方で見せるラスキンの実像を浮かび上がらせることを通して、中世主義者としてのラスキンが強調されがちな傾向に対して解毒剤として働いている点でも評価したい。

本論集収録の論文群が、手に負えないほど膨大なラスキンの著作のいまだ読まれざる総体を完全に提示しえているとは言うまい。だがもちろん、本書に先立って刊行された Sharon Aronofsky Weltman, *Performing the Victorian: John Ruskin and Identity in Theater, Science, and Education* (2007) の成果も視野に入れつつここで提示された「演劇」という論点をひとつの出発点と定めることで、ラスキンの全体像を探究する試みが正しい軌道に乗ることは強く期待できるだろう。この切り口を通じてひとまず厄介な通念が洗い流されたとするならば、その曇りなき眼をもってラスキンの絵画論の読解に立ち戻り、モダニズム以前の可能性に満ちた「近代」と深く関わった批評家として彼を受容することが今後は求められるに違いない。その作業がラスキンの名の記された著作群を対象とするからこそ、まだ知らないヴィクトリア時代を複数の文化の層の堆積した全体として浮かび上がらせる可能性をもつのだということを、本書は十分に納得させてくれた。



荻野昌利著、『小説空間をく読む』  
 —ジョージ・エリオットとヘンリー・ジェイムズ』  
 Masatoshi OGINO, *Reading the Fiction Space:  
 George Eliot and Henry James*  
 (199 頁, 英宝社, 2009 年 5 月, 本体価格 2,400 円)  
 ISBN: 4269721030

(評) 新野緑  
 Midori NIINO

ジョージ・エリオットとヘンリー・ジェイムズの「空間」の扱いに、他のヴィクトリア朝作家とは異なる両作家の特質を見ようとする本書は、同時に、「一部の尖鋭な文学理論家たちの晦渋な理論に振り回され、少数のエリート読者のみの参加できる知的ゲームの道具と化しつつある小説

を、そのソフィスティケーションの呪縛から解放し」(6頁)、「読者一人ひとりの読書経験の積み重ね」とそれによって「磨かれた鋭い洞察力を秘めた眼力」(5頁)でテキストに立ち向かうことを重視すると言う、著者による「精読」のすすめでもある。年来、『暗黒への旅立ち』(名古屋大学出版会)、『さまよえる旅人たち』(研究社出版)、『視線の歴史』(世界思想社)等々、西欧の文学や絵画における空間表象の意義と連続性を、幅広い歴史的・文化的知識と堅固なテーマ批評の方法で読み解いてきた著者の仕事を思えば、本書の主張には案を打ちながらも、著者自身のソフィスティケートされた研究スタイルとその主張との間のギャップに多少の違和感を覚える読者もいるかもしれない。しかし、文学研究が作品を<読む>作業から大きく遊離しつつある現在において、それを実行するのに「かなりの勇気を必要」とし、「一般受けもしない」(4頁)「精読」に取って代わってみせる著者の姿勢には、早い時期から確かな方法論を持って研究を続けてきた著者ならではの、文学研究者としての強い信念と自信が感じられる。襟を正して読むべき書物と言うべきか。

本書は第一部でエリオットを、第二部でジェイムズを論じている。取り上げられる作品は「作品間の論理的脈絡性」を意識せずに、「特に興味深いと思えたものを、恣意的にサンプルとして選別」(7頁)したものだ。その意味で、広くヨーロッパを視野に入れて、文学作品のみならず絵画をも含めた多様な芸術作品の間の隠れた連関をあぶり出す従来の著者の研究と、本書は一線を画しているといえる。しかし、エリオットとジェイムズを「ヴィクトリア朝小説界において、小説を『芸術作品』(‘work of art’)として強く意識した草分け的存在」として、彼らの物語の「空間的配置」(7頁)に焦点をあてる本書は、二人の作家による時空の表象のあり方と、作品に潜む芸術性とを解説する点で、著者の従来の関心にしっかりと繋がってもある。

以下、本書の主眼とする「精読」の手法を、具体的に追ってみよう。まず、『サイラス・マーナー』を取り上げた第一章で、著者は、貯め込んだお金を盗まれ半狂乱になったサイラスがレインボウ亭に飛び込んだ直後に描かれる小説の第六章、レインボウ亭での村人たちの会話に光をあてる。そして、そこで展開される三つの会話の密かな繋がりから、ラヴェロウの縮図としてのレインボウ亭の意義を探り、一見論理的脈絡を欠くかに見えるこの場面が、単なるコミックリリーフではなく、『マクベス』のダンカン王殺害に続く門番の場面にも似た効果、つまり、それまでサイラスの心理に同化していた読者の「焦点のズレ」を正して、「これまでの絶望と錯乱に替わる健全な良識の世界に戻す」(32頁)ための「巧妙なからくり」(33頁)であることを明らかにする。

作品に潜むある種の断絶の隠された意義を読み取ろうとするこの姿勢は、『フ

ロス川の水車場』におけるエリオットの〈川〉へのこだわりとその象徴的意義とを論じる第二章にも見ることができる。ここで著者は、「読者に唐突感と違和感を抱かしめる」(39頁)フロス川の氾濫とマギーの水死という結末に注目。冒頭のプロス川の描写や、マギーとステイーヴンとの川下りの場面なども視野に入れながら、〈川〉に隠された作家の意識的、無意識的な思いを、ジョージ・チャップマンとの過去の忌まわしい恋愛への『アポロギア』のような自伝的要素や、天国に至る「死の川」といった、作家の想像力の根幹にある「アーキタイプなく川〉のイメージ」(50頁)とのつながりを中心に論じる。

歴史小説である『ロモラ』の「多角的解釈」(55頁)を目指す第三章の中心をなすのは、小説の舞台となるフィレンツェの地理的位相である。ここで著者は、アルノ川を接点とする南北二つの世界に「ロモラの父バルドのヘレニズム文化崇拝とサヴォナローラの禁欲的キリスト教」(57頁)という対立的な思想の枠組みが託されているとして、その二つの世界の「分水嶺」としての「橋」に注目する。そして、ティトとロモラの運命の転換にいかにも「橋」、あるいはアルノ川を「渡る」という行為が重要な意味を持つかを丁寧に跡づけ、「時間」あるいは「歴史」に対する作者の姿勢を浮き彫りにする。

『ミドルマーチ』を扱う第四章では、小説第六十章のラーチャー一家の家財の公開競売のエピソードに着目し、ドロシアやリドゲイトの運命が大きく動こうとする時に、その「物語の流れを一頓挫させる」(69頁)競売の場面を、作者が挿入した理由を探る。そして、競売場の位置づけがラディスローの人物造型に持つ象徴的な意味や、競売にかけられるグイードの贖作<エマオの晩餐>が示す「復活」のテーマの皮肉な含蓄などを詳細に論じ、一見瑣末なディーテイルを「溶媒」として、さまざまな異分子を抱え込んだ小説の「有機的統合」を図るエリオットのひらめき、「創造的精神の一端」(79頁)を明らかにする。

第五章の『ダニエル・デロンダ』論は、著者も言う通り、川と橋のイメージを論じた『ロモラ』論の延長線上に置かれたものだ。ここでも著者は、作品における〈川〉の重要性を、主人公デロンダの名の由来や、第四十章のブラックフライアーズ橋でのデロンダとモーディカイとの出会い、さらにデロンダとマイラとのテムズ川での邂逅などから詳しく解説する。そして、「民族の宗教的連帯」と「伝統と文化に対する不動の信仰と誇り」(95頁)とを持つユダヤ人に、当時のイギリス国民が見失った理想を見たエリオットが、自らの思いを、「現代の叙事詩のヒーロー」(93頁)としてのデロンダに託したと結論づける。

ジェイムズを論じる第二部では、まず、第六章で『ローデリック・ハドソン』を取り上げ、中世の叙事詩にその名が由来する二人の主人公ロデリックとローランドに、ジェイムズの分身、すなわち彼の「ディオニュソス的自我」(108

頁)と冷静な観察者としての自己の投影を見る。そのうえで、ミケランジェロの<ピエタ>やラファエロの<小椅子の聖母>、あるいはロバート・ブラウニングの物語詩に作品の場面設定や人物造型のインスピレーションの源を見出し、目の前にある「現実」を忠実に描くと同時に、網膜に焼き付けられた「既存の芸術作品の画像」をその「現実」に「溶解させて、それを再構築し、新しい形に表現」(119頁)するジェームズ独自の手法を明らかにするのである。

『ある婦人の肖像』を扱う第七章では、イザベラが夫のもとに戻る小説結末の、一見唐突とも思われる選択の意義を、彼女が幼少時を過ごした祖母の家や、オールバニーの閉ざされた部屋、開放感溢れるガーデンコート、そして美術品に囲まれたフィレンツェのヴィラやロッカネラ宮殿など、彼女が通過するさまざまな空間の解釈を通して考察する。そして、オールバニーとロッカネラ宮殿との空間的類似性を明らかにすることで、キャスパーの強引なキスが引き起こした性的嫌悪感から逃れようとするイザベラがローマに帰った理由を、外界から遮断されて自らの空想に遊んだ過去への回帰願望として説明している。

『悲劇の女神』を論じる第八章では、自身の標榜する芸術世界を空間に配置しようとする作家の試みを、ニックがジュリアの邸宅ザ・プレイスの庭園を訪れる場面や、ミリアムがテアトル・フランスの楽屋を訪ねる場面、ニックがミリアムやゲイブリエルの肖像画を描くアトリエの描写などから読み解こうとする。そこに明らかになるのは、ニックという「一人の画家の職業的認識の深化の過程」を提示する際の「芸術空間の設定の巧みさと劇的処理の鮮やかさ」(158頁)であって、著者はそこに、「世紀末の真只中に生きる芸術家として、周囲の唯美主義者たちと異なる自らの芸術的立場を明らかにしよう」(161頁)とするジェームズの芸術観を読み取っている。

『鳩の翼』と『使者たち』を扱う最終章の中軸をなすのは、視線の問題である。「ジェームズの小説にはつねに眼差しのバトルがある」という著者は、『見る』、『見られる』のせめぎあいが、最高潮の盛り上がりを見せる」(163頁)『ねじの回転』から説き起こし、『鳩の翼』では、ミリーが滞在するアルプス山道の宿場町ブリューニヒとフリードリヒの絵画<雲海を望む旅人>や聖書の「キリストの誘惑」との類比、あるいは最後の夜会の場面の解釈を通して、「現代版<精霊降臨>の図像」(172頁)としてのミリー像を浮かび上がらせる。さらに、『使者たち』では、主人公ストレーザの「見る」行為の変化を、小説冒頭のゴストリーとのチェスター散策、ストレーザのパリ彷徨、コメディエール・フランセーズのボックス席、郊外の白馬亭など、小説の様々な場面に埋め込まれた登場人物間の「視線のバトル」を通して読み解き、想像力と過去の記憶に埋没していた主人公が心理的、時間的覚醒に至る過程を明らかにする。


本書においてまず特徴的なのは、たとえば『サイラス・マーナー』の第六章をめぐる議論のように、一見論理的脈絡を欠くかと思える小説内の一場面を取り上げて、その隠れた意義や物語全体とのつながりを解き明かす著者の姿勢である。こうした姿勢は、そもそも知的に見劣りがするとして「エリオット作品のなかでいわば継子扱い」をされていた『サイラス・マーナー』に「緻密な知的計算と演出装置」(20頁)を見ようとする第一章をはじめ、「読者に唐突感と違和感を抱かしめる」(39頁)結末の意義を探る第二章の『フロス川の水車場』論、あるいは、「物語の流れを一頓挫させる」(69頁)競売の場面が「物語の有機的統合に大きく寄与」(79頁)することを証明する『ミドルマーチ』論、あるいは今日の「常識から見れば、はなはだ不可解」(122頁)な小説結末のヒロインの行動を、「作品全体にとってかけがえのない組織の一部」(124頁)としてその意義を問う『ある婦人の肖像』論など、本書の至るところに見ることができる。こうしたアプローチからは、従来批評家の間で議論喧しい作品の問題点をも含めて、物語のあらゆる謎、意味のギャップを読み尽くそうとする著者の強い意志が感じられる。作品を読む時の微妙な違和感、それを敏感に感じ取る感性もさることながら、文学から絵画まであらゆる知識を用いてそうした意味のギャップを埋め尽くそうとする著者のテキスト解説への強い思いが、そこにある。

この<読む>ことへの情熱は、たとえば、エリオットとジェイムズの「意識の根底につねに時間・空間を有機的に一体化しようとする強い意志が働いている」(8頁)という言葉が示すように、作品の芸術的価値を、その有機的統一性に見る著者の姿勢と深く関わっているだろう。作品を評価する際に頻繁に繰り返される、「緻密な知的計算」(20頁)、「芸術的統一性」(23頁)、「有機的統合」(79頁)などの言葉は、そうした著者のテキスト観を端的に示している。文学作品を、個々のディテールが互いに有機的に結びついた統一体、あるいは「生命組織」(124頁)とする著者のこの視点が、作品に連続して現れる<川>や<橋>といったイメージにこだわり、小説の時間的、空間的構造を透視する本書の軸というべき関心へと向かうのは、当然だろう。この意味で、『『ロモラ』の時空を<切る>』と題された本書の第三章は、著者の<読み>の精髓を示している。アルノ川を横軸として、南岸に財閥バルディー族の旧居が立ち並ぶオルトラノ、橋を渡ったすぐそこに、15世紀権力抗争の本舞台となった町の中心街、そして、北東部の町はずれにドミニコ派修道会の本拠サン・マルコ修道院を配するフィレンツェの空間的位相に、「ルネサンス・ヒューマニズムとヘブライズム両文化の交流と対立の場」(60頁)としての小説の基本構造を読み取ったうえで、著者は、二人の主人公がその二つの世界の「分水嶺」である「橋」を渡



る場面に注目する。過去から未来へと続く時間の流れを象徴するアルノ川を横切り、バルディ邸と市の中心部とを往復するティトの行為が、過去との宿縁を断ち切ろうとする彼の刹那的な生き方を表象する一方で、サルヴァナローラの教えに従い、「服従の道に沿って流れる川」に乗って生きることを選ぶロモラが、時間の流れ、あるいは自らの運命を受容するという読みは見事といえようか。

作品に用いられるイメージからその時間的、空間的構造を読み取る方法は、ともすれば、本来ダイナミックな時間芸術であるはずの小説世界をスタティックで単純な構造へと図式化した印象を与えがちなものだ。じっさい、自分の読みの方法をCTの画像に喩えてみせる著者の「序文」の言葉も、そうした可能性を多分に意識したものだろう。しかし、本書にそのような感覚が薄いのは、エリオットやジェイムズの創作ノートや書簡、伝記、あるいは評論などから、作品執筆当時の作家の意図や、意識的、無意識的な作家の精神状態を丹念に読み取って傍証する著者の周到な姿勢に加えて、聖書をはじめとする過去から現在に至る文学作品はもとより、たとえば、競り売りされるグイードの贗作<エマオの晩餐>の皮肉な含蓄を論じた『ミドルマーチ』での議論のように、古今の芸術作品を縦横に用いて、小説の場面構成や人物造型のインスピレーションの源を探る、ひろやかな文化論的な視点が、本書に浸透しているからだろう。たしかに、そうした文化論的視点を、基本的には作品内の要素の有機的な連関性を見出そうとする構造分析と融合させるのは、至難の技で、絵画への直接的な言及が増える本書の第二部において、時に本論からは少し分離した「付記」という形を交えながら、作品の重要な場面の分析が一種の箇条書き形式で展開されているのは、著者の方法がはらむかすかな危うさを示唆するものかもしれない。しかし、文学研究が作品を<読む>作業から大きく遊離しつつある今、本書が、テキストの読解と広範な文化的知識とを融合するための重要な指針となることは疑いがない。







Andrew Radford, *Victorian Sensation Fiction*  
 (A Reader's Guide to Essential Criticism, 240 頁,  
 Palgrave Macmillan, 2008 年 11 月,  
 本体価格 £45.00)  
 ISBN: 978-40230524885

(評) 橋野朋子  
 Tomoko HASHINO

Palgrave Macmillan 社の ‘A Reader’s Guide to Essential Criticism’ と題するシリーズの中で出版された本書は、いわゆる「手引書」と位置づけられる研究書である。しかし、「手引書」とは言え、本書は、例えば学生がセンセーション小説のいろはを学ぶための「導入書」として活用するには内容的に極めて難解である。本書は、複雑多岐にわたるセンセーション小説研究の論点をテーマ別に検証、概括し、センセーション小説研究全般を包括的にとらえたものであり、センセーション小説を専門とする研究者が本書の恩恵に浴するところは大である。1980 年代頃から研究の対象として注目されるようになったセンセーション小説は、以降、研究が盛んに進められるに伴い主要な研究書が続々と出版され、21 世紀にかけて、文化、歴史、政治、ジェンダー、様々な角度からの考証にも堪えうるテーマとして発展を遂げてきている。センセーション小説研究の第一人者である Lyn Pykett は本書を「センセーション小説研究における主要な動きを概観するのに有益な書であり、扱われているテーマは偏ることなく広範囲にわたり、見解もバランスのとれたものである」と評している（背表紙より）。文学研究の一つのジャンルとして、ある一定の成長・発展を遂げてきたセンセーション小説研究は、現時点では多元的複雑化の様相を呈しつつあり、微に入り細を穿つ状態にあると言える。そのような多岐にわたるセンセーション小説研究を深めていく上で、全体像を包括して概観する本書は「手引書」として有効な指針となるであろう。

第 1 章 ‘The Rise, Fall and Revival of Sensation Fiction’ は、センセーション小説の流行に対する同時代の批評界からの辛辣な反応の代表的な例として、Henry Mansel による批評（‘Sensation Novels’, *Quarterly Review*, April 1963）を取り上げ、21 世紀現在に至るまでのセンセーション小説をめぐる批評、研究の動向を順を追って整理している。Kathleen Tillotson が Houghton Mifflin 出版の 1969 年版 *The Woman in White* の序文に寄せたエッセイ ‘The Lighter Reading of the 1860s’ を契機に文学研究の対象として注目されるようになったセンセーション小説は、1980

年代に入って *The Maniac in the Cellar: Sensation Novels of the 1860s* (1980) で著名な Winifred Hughes などによる本格的な研究書が出版されるようになった。その後センセーション小説は、フェミニストの視点、フーコー的解釈など、解釈の幅を様々に広げて考察されるようになり、1990年代には Lyn Pykett, Ann Cvetkovich, Lillian Nayder などの著名な研究者たちによって様々な周辺事象が多角的に検証され、文学形態における亜流にすぎないという認識のもと顧みられることになった。センセーション小説は、21世紀の現在、Andrew Maunder が *Varieties of Women's Sensation Fiction, 1855-1890* (2004) で指摘するように、センセーション小説流行の事象を抜きにして正確なヴィクトリア朝時代像を描くことが不可能なほどまでに、文学研究にける地位を確固たるものとした。本書の第1章は、多面的に細分化しつつあるセンセーション小説研究の系譜を概括した有用な資料となっている。

続く第2章から第5章までは、センセーション小説研究のアプローチにおける主要トピックがテーマ別に扱われ、それぞれに関して主要著書の論点が整理されている。主だった研究書が最新のものも含めて網羅されていて、読み進めながらメモを取るだけで、センセーション小説研究に関する豊富な文献一覧が出来上がる。第2章 'Crime and Detection' では、「秘密」、「犯罪」、「警察組織」といったセンセーション小説における重要な要素をめぐる研究が取り上げられ、探偵小説としての研究の流れも触れられている。第3章 'Class and Social (Im-)Propriety' では、読み物におけるクラス分け、センセーション小説を下層階級由来のものとして線引きし階級構造を維持しようとする知識階級の姿勢、及び、階級間の明確な区分けが浸食されていくことへの危惧などの事柄に関して、Jenny Bourne Taylor, Nicholas Rance, Deborah Wynne, Winifred Hughes などによる議論が概括されている。下層との一線を画する最大よりどころとして機能していた「礼節」(propriety)の概念が脅かされるという構図は、センセーション小説において「家庭の天使」でありながら、同時に「狂気」、「犯罪」、「逸脱」といった要素を併せ持つヒロイン像そのものにもあてはまり、続く第4章 'Women, Gender and Feminism' では、ジェンダーの観点に立った議論を中心に Elaine Showalter, Tamar Heller, Ann Cvetkovich, Lillian Nayder, Lyn Pykett などによる最新の解釈が要約されている。作品としては Mary Elizabeth Braddon の *Lady Audley's Secret* (1862), Ellen Wood の *East Lynne* (1861) と *St Martin's Eve* (1866) などが議論されている。第5章 'Domesticity, Modernity and Race(ism)' では、「家庭」を「反抗」、「墮落」、「犯罪」の舞台として構築するセンセーション小説、同ジャンルの「同時代性」への固執、センセーション小説に反映された異文化、異人種のとらえ方などの時空的性質をめぐる考察について、Jenny Bourne

Taylor, Pamela Gilbert, Lillian Nayder, Deirdre David, Ian Duncan などの批評が取り上げられている。

結論の章へと続く第6章 ‘The Mutation of Sensation’ では、Sheridan Le Fanu の他、センセーション小説の第二世代と呼ばれる1870年代から1880年代にかけての女性作家たち、また、一般的にセンセーション小説とは一線を画して扱われる後期ヴィクトリア朝の代表的な作家たちにとって免れることのできなかつたセンセーション小説の影響について、そして Neo-Sensation Writers と呼ばれる現代作家たちの存在など、センセーション小説が一時的流行の後にも変異、変貌をとげて現代に至っているという認識が示されている。著者 Andrew Radford は、センセーション小説の研究の多くがいまだに *The Woman in White*, *East Lynne*, *Lady Audley's Secret* といった代表的作品に主眼を置いていることを批判し、今後のセンセーション小説研究の一つの方向性として、Sheridan Le Fanu や、まだ十分に認知されきれていない1870年代から1880年代にかけての多くの女性作家たちの存在を示している。

なぜ現象としてのセンセーション小説は、同時代においても、また現代においてヴィクトリア朝時代を検証する上でも、さまざまに議論されるのであろうか。本書を通して「境界線の危うさ」という、テーマの種別を超えた一つの要素が浮かび上がってくる。それは、下層階級と中産階級という階級間の境界線でもあり、通俗小説と正統文学というジャンルの境界線でもあり、「不道徳な」女性と「理想的」女性という概念的な境界線でもあり、「家庭」と外部のみならず、「国家」と異種なるものとの空間的な境界線でもある。本書の中だけでも、境界線の「危うさ」、すなわち隔てられた二つの領域の「互換性」に関しては、dissolution / conflation / permeability / infringement / incursion / infiltration / miscegenation / amalgamation といった様々な言葉で表現されており、多岐にわたるテーマの根幹にある現象であることが分かる。

また、センセーション小説研究における論点を概括した本書からは、センセーション小説および作家のイデオロギーをめぐる規範的解釈が、研究の発展と共に、一義的で断定的なものから両義的解釈へ、そして解釈の二極化を経て、相反する解釈が共に真であり錯雑として断定を許さない多義的なものであるという見解へと進んできたことが分かる。*The Maniac in the Cellar* (1980) における Winifred Hughes の ‘the sensation novel operates as an audacious assault on the hypocritical and stagnant traditions of mid-Victorian gentility’ という主張は、センセーション小説を「お上品ぶり」(gentility), 「礼節」(propriety) に対する攻撃・挑戦と見る見方や、例えば Wilkie Collins に関しての、敢然たる社会批判者、フェミニストとしての評価、または *The Moonstone* (1868) に彼の帝国主義

批判の姿勢を読みとる見方など、センセーション小説及び作家の姿勢を社会規範に対する反発ととらえる認識に大きな影響を与えたと言えるが、センセーション小説における「転覆的傾向」(subversiveness)を一概に主張することは現在では短絡的であると見られている。Lyn Pykett が『*The 'Improper' Feminine: The Women's Sensation Novel and the New Woman Writing* (1992)』で主張しているように、センセーション小説に反映されているイデオロギーに関して、道徳的である領域とそうでない領域とを一刀両断的に区別することは不可能であり、センセーション小説の中では、相反する価値観が錯綜し、茫漠たる危惧の念が漂っているのである。

1860年代を‘sensational decade’として限定的にとらえ、センセーション小説の流行が前触れなく突如1860年代に出現した現象であったとする見方に対して、著者 Andrew Radford は本書において一貫して異議を唱え、センセーション小説が数多くの他のジャンルとの深い関わりのもと形成され、時代の推移の中で変異しながら現在に及んでいること主張している。ここ数年はディケンズ関連のテレビドラマ化、映画化の動きが目覚ましく、また2009年には Dan Simons 著 *Drood*, Matthew Peal 著 *The Last Dickens*, そして Richard Flanagan 著 *Wanting* というように、Dickens や Collins をめぐるヴィクトリア朝時代を題材とする小説が立て続けに三本出版された。ヴィクトリア朝の世界には、21世紀を生きる我々を捉えて離さない何かがあるのであろう。掘り進めるほどに深淵の度合いを深めるヴィクトリア朝のセンセーション小説をめぐる世界もまた、21世紀の現在において色褪せない魅力を放ち続けていると言えるであろう。

#### 書評対象図書及び評者の募集

『年報』の書評では、ディケンズ関係及びディケンズと関係の深いヴィクトリア朝文学・文化関係の書籍を扱っております。もちろん海外での出版物も対象です。取り上げるべき本がありましたらご推薦ください。また、評者についても自薦・他薦・著者本人の推薦のいずれでも歓迎ですので、支部長（編集担当）または年報編集補佐までお申し出ください。少なくとも国内で出版されたディケンズおよびヴィクトリア朝関係書籍はすべて取り上げたいと考えておりますが、評者の引き受け手がなく断念した場合があります。ご協力をよろしくお願いします。



欧米言語文化学会編,  
『実像への挑戦—英米文学研究』  
European and American Linguistic Culture Society, ed.,  
*Approaches to the Real Image:  
Studies in English and American Literature*  
(260 頁, 音羽書房鶴見書店,  
2009 年 6 月, 本体価格 2,625 円)  
ISBN: 9784755302466

(評) 西條智子  
Satoko SAJOH

本書は『ふぉーちゅん』同人として発足した研究会の創立 20 周年を記念して出版された論文集である。同会は、10 周年の節目に『英米文学の原風景—起点に立つ作家たち』(音羽書房鶴見書店, 1999 年)を刊行しており、今回、新生言語文化研究会から欧米言語文化学会へと名を改め、会員の研究成果を再び一冊の本にまとめた。

巻頭には 20 周年を言祝ぐ二つの文章が載せられている。出口保夫名誉顧問は、歴史的事実に基づく実証的評伝研究に取り組んで来た自身の研究生活を振り返り、井内雄四郎顧問は、比較文学界の泰斗、島田謹二氏の功績を称えながら、異文化圏での研究の難しさを語る。「あとがき」によれば、原典を精読し、参考資料を広く渉猟するという出口氏の研究態度は、本学会が基本とするものである。また、他国における外国文学研究に倣うことで「英文学の実像に迫ることができる」(5 頁)という井内氏の言葉から、本書の表題が生まれたという。果敢に「挑戦」するのは 30 代から 40 代の若き研究者たちである。

15 編の収録論文のうち、詩を扱ったものは、「王党派詩人としての役割—ロバート・ヘリックのアングリカニズム」のみである。ヘリックは、チャールズ王を支持した司祭で詩人だが、英国国教会の中道主義が詩作に表れている。古河美喜子氏は、抒情的な作品の中に込められたピューリタニズム批判にその一端が窺えとし、そこには、ホラティウスが説いた「中庸」の精神が投影されていると指摘する。

続く 4 編は、アメリカン・ルネサンス期の小説を論じたものである。「E・A・ポーの『アモンティラードの酒樽』を恐怖小説として読む」堀切大史氏は、この作品が恐怖小説たる所以を探り、理由なき復讐や不可解な事柄への恐怖など、『『わからない』恐怖』(43 頁)が恐ろしいと結論づける。高橋愛氏は、ハーマン・

メルヴィルの小説『タイピー』の語り手の呼称「トンモ」が、西洋と非西洋の折衷名であることを重視し、語り手は、近代アメリカ男性という自己から「特定の言説ネットワークに束縛されることのない自己」（57頁）への構築を試みていると声明する。この視座での入れ墨問題の捉え方がとりわけ興味深い。「他者性の引き入れにより主体の枠組みを攪乱させる」（57頁）入れ墨の力に語り手は開眼しない。高橋氏はそこに試みの中断を見ている。「トンモとは何者か—『タイピー』における自己の再構築」は、論に一貫性があり、説得力に富む。

内堀奈保子氏は、ナサニエル・ホーソーン研究に「フェア・マン」と「ダーク・マン」という概念を導入し、ジェンダーの問題を提起して、独創性を発揮している。「ナサニエル・ホーソーン作品における〈フェア・マン〉と身体表象」では、「緋文字」と「税関」を材料とし、「フェア・マン」と「ダーク・マン」を「見られる身体」と「見る身体」に読み替えて、「同性愛的な関係をよびこむ存在」（71頁）、それゆえに「近代のジェンダー力学の虚構性を露呈させる攪乱的な存在」（71頁）としての「フェア・マン」像を導き出す。同じ作家の研究でも、西山里枝氏は、表題『『ブライズデイル・ロマンス』における生と死—ホーソーンのロマンスの核心に迫る』が語るように、ホーソーン文学の主要なテーマのひとつに取り組んでいる。「生」と「死」の対立概念を基軸とした作品分析を通して『ブライズデイル・ロマンス』のロマンス性を再考するのが本論文の目的である。

19世紀のイギリス文学研究としては、チャールズ・ディケンズの作品論と「ジョン・アッシュワースによる民衆教育の試み—日曜学校についてのケース・スタディ」がある。「『二都物語』—歴史的テーマと個人の生と死」は、個人の物語とフランス革命を作家がいかに調和させて描いたかを解明しようとする試みである。周知のように、ディケンズのフランス革命観はトマス・カーライルに負うところが大きい。吉田一穂氏は、この点も視野に入れながら、カニバリズムという側面から群衆の生と死を論じ、シドニー・カートンの身代わり行為については、キリスト教的観点から捉えている。カートンの死はキリストによる贖罪を意味するが、永遠の命の獲得という点で、民衆の精神的再生と重なり合うという。一方、水野隆之氏は、『『我らが共通の友』における相互関係の再生』を上流階級のユージン・レイバーンと下層階級のリジー・ヘクサムとの結婚に見る。人々を結びつける仲介役のジョン・ロクスミス／ハーモンとリジー、相互関係を築けない上流社会の人々、皮肉にも恋敵のユージンをリジーに結びつけるブラドリー・ヘッドストーン、これらの登場人物にまつわる人間関係について検討している。

閑田朋子氏は、日曜学校に焦点を絞り、特に、身なりの問題を取り上げて、



アッシュワースの民衆教育を論じるが、『つつましい暮らしの不思議な話』と豊富な二次資料による論証が手堅い好論となっている。閑田氏によれば、ミドルクラスのソーシャル・コントロールと見なしうる、清潔な服装と安息日の遵守の強要は、アッシュワースの教育活動においては異なる意味を持つ。日曜日の良い身なりは労働者の見栄であり自尊心の表れだと熟知していた彼が、ミドルクラスの価値観を労働者文化の中で再構築し、「貧しい人々がシャツ（衣食や世俗の自尊心）も聖書（信仰）も手に入れるための教育」（131頁）を施したという指摘はなかなか鋭い。「きちんとした服は雇い主の見方を変え」（130頁）するため、アッシュワースは、貧困者の「外見を整え、職を見つけてやった」（130頁）という。ここで、安息日遵守法案を痛烈批判するために書かれた『日曜三題』（1836年）の冒頭部分が思い出されよう。休日は小綺麗な装いで外出したいという民衆の思いや、着飾ることが彼らに与える喜びを感知したディケンズは、分不相応とも思える虚栄心を良しとし、程よい自尊心が就職につながるという考えをも示している。ディケンズの著作をざっと見渡したところでは、日曜学校に関する記述はあまりないのだが、あちらこちら掘り返してみようかという気にさせる論文である。

本書の後半は、20世紀の作家を扱う論考が並ぶ。先ずは「接合／分節と蒐集の力学—ヘンリー・ジェイムズの『黄金の盃』論」。中村善雄氏の考えでは、「蒐集品」との同化を受容しながらも不倫を通して同化作用を攪乱するアメリカ、流通の結節点であるとともに亀裂を生み出す分節点としてのユダヤ人骨董商、「白」への帰属に抵抗する「黒」としての彼ら、二人は、夫婦関係、大富豪の蒐集行為、アメリカの同化政策といった、「重層的な統合作用に対して縦断的に貫通するひび」（148頁）であり、ヴァーヴァー父娘は、「接合を促し、亀裂の表出を修復する」（148頁）。「蒐集」「接合」「分節」「移動」というキーワードで『黄金の盃』を読み解く、その切り口には新鮮さが感じられ、さまざま位相から切り出された断片が上手く「接合」されている。この次に「雪女」の自伝的意義を追究するのは横山孝一氏。「ラフカディオ・ハーンの『雪女』ができるまで—夢の中の母」において、ハーンによる実母の理想化と願望充足型の夢、他方、気性の烈しい母の顔の封印とのっぺらぼうの悪夢、それぞれの連関をいくつかの作品の中で確認し、女の恐ろしい顔が描かれた「雪女」に双方の夢からの解放を見ている。

ジェイムズ・ジョイス論のひとつは「ジョイスの『円熟』—青春と老い」である。松山博樹氏は、『若い芸術家の肖像』におけるステーブンの精神的成長過程を周囲との距離感の変化という視点で辿る。一体感と疎外感、優越感と劣等感などの相反感情が混在する精神世界を「老い」に集約する議論である。

もうひとつは、「ジェイムズ・ジョイスと絵画—モダニズムの認識論的考察」で、木ノ内敏久氏は、印象派からキュビズムまでの絵画とジョイスの小説に見られる表現方法、および、画家と作家の時間・空間感覚が、モダニズム期の認識論の変化に基づくことを主張する。実例を挙げながら、異なる芸術領域の作品の類似性を丁寧に検証し、「視覚の転換」という共通項に着目して洞察を深めてゆく木ノ内氏の論文は読み応えがある。

物語性を抑えて心模様のみを綴る、キャサリン・マンズフィールドの創作技法を紹介し、「カナリア」から孤独と無常の悲しみを感じ取るのは奥井裕氏である。「孤独と無常の悲しみ—マンズフィールドの『カナリア』について」は、研究会での講読・注釈・解説のまとめを修正したものだそうだが、研究論文としての体裁をもう少し整えてもらいたい。残る二つはD・H・ロレンスとジョージ・オーウェルの作品論である。「森のロレンス—『チャタレー夫人の恋人』の性とエコロジー」は、エコロジーに必要な性についての論考である。植月恵一郎氏は、森の意味を多角的に捉え、森での性交は生態系を維持する雌雄の関係に還元できることを示す。そして最後が「『1984年』—ウィンストンの敗北の意義」である。オーウェルは全体主義体制に傾く社会に警鐘を鳴らす目的で『1984年』を執筆したが、その世界はあまりにも陰惨である。近藤直樹氏は、全体主義と闘う個人の、つまり、「党」の「超人」志向に対峙する「人間」の、偉大さと卑小さ、絶望と希望、という観点からこの小説を地道に読み直し、絶望的な結末に射す希望の光を新たに指し示す。それは「人間」の「絶望を直視しつつ希望を抱く態度」(246頁)である。

「あとがき」で植月氏が明かすのだが、本企画では、「円熟」をテーマとして論文を募ったという。広辞苑の「円熟」の定義から始まり、「ジョイスの『円熟』は時代に先行していたのだった」(182頁)で結ばれる論文に違和感を抱いた理由のひとつがここにあった。確かに、各作家の円熟期の作品が研究対象とされている。しかしながら、作家の個人的経験による精神的成長や、時代の推移と社会の変容に応じた創作活動などで、作家の成熟度と作品の完成度を測ろうとする論考が少ないため、この統一テーマが浮かび上がってこない。

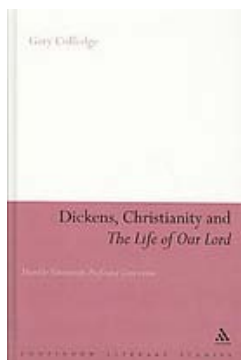
テーマとの整合性以外にも、複数の論文に共通の気になる点がある。第一に、議論の核とする概念とそれを表象する肝心要の語句の扱いに慎重さが欠けている。たとえば、『我らが共通の友』論を読むと、断絶したものを含めて、誰もが誰かとつながっているという、この小説独特のネットワーク現象を図式化できるけれども、ヴィクトリア朝英国社会と作品世界で欠如し、ユージンとリジーの結婚を通して再構築されるという、個人間、階級間の、「相互関係」の「相互」の内容一何を基盤とする関係で、どのような働きかけが双方からある／な

いのか一が明確でない。ともに表題に「生と死」を含む『ブライズデイル・ロマンス』論と『二都物語』論にしても、前者では、「生」と「死」のイメージも、「現実」「非現実」その「中間領域」も整理されておらず、後者では、民衆とカートンの「精神的に死んだ状態」(94頁)が暴露されないまま「精神面における生」(96頁)が安易に議論される。しかも、カートンの自己犠牲からキリスト教的英雄主義を読み取りたいのであろうが、キリスト教哲学の扱いが適切でないため、混乱が生じている。

第二に、先行研究が有効に参照されていない。『ヘスペリディーズ』から政治的メッセージを摘み取る作業が単純に見えるのは、ヘリックの詩の批評、伝記的研究、英詩論を参考にした「読み」ではないためだろう。当時の社会事情と歴史に関する記述に割かれる紙面の量には驚かされるのだが、対照的に、『チャタレー夫人の恋人』論では、引用方法からしても、他の研究者の解釈に頼りすぎる感がある。挿入された参考知見が論の流れを邪魔する一例は「ジョイスの『円熟』」。最後に、心理的洞察の甘さが気になるものを二つあげておく。ハーン論で、ジークムント・フロイトの理論は願望成就型の夢の説明には援用できないのか、子どもが抑圧するのは母の怒った顔だけなのかなど、疑問に思う。それ以前に、フロイトの著作物を直接参照しないのが不思議である。「アモンテイラードの酒樽」論では、分身関係について、「死」と「再生」をキーワードとした独創的な説明が続くが、「恐怖」を抉り出す目的の論文でありながら、分身にまつわる恐怖に言及しない。心理学・精神分析学関係の文献にあたるべきであろう。ついでながら、「メッツェンガーシュタイン」以降の、自己破壊の衝動や不条理な内的動因を内包する一連の作品を押さえておくことで、論考も論者も「円熟」のテーマに近づくのではないか。

ほかにも、論文としての構成の拙さ、読者を考え込ませるような論の展開、理解に苦しむ日本語表現などが散見される。書式面で全体の統一がなされていないし、索引にも不備な点が認められる。とはいえ、若い研究者たちが作品を丹念に読み、多くの二次資料に目を通して、自分の見解をまとめようとする姿勢は窺える。研究成果を世に問う機会が論文集の上梓というかたちで彼らに与えられたことは喜ばしい限りである。当学会のさらなる発展を祈りたい。





Gary Colledge, *Dickens, Christianity and The Life of our Lord: Humble Veneration, Profound Conviction*

(Continuum Literary Series, x + 183 頁, Continuum,

2009 年 8 月, 本体価格 £60.00)

ISBN: 9780826423535

(評) 矢次綾

Aya YATSUGI

本書は、牧師 (pastor) で教師でもあるゲイリー・カリッジが『イエスの生涯』(以下、*TLOL*) を取り上げながら、ディケンズの宗教観を解明するものである。その興味を中心は、ディケンズがいかなる神学的知識や神学的主張を持っていたかというよりもむしろ、彼がキリスト教をどのように理解し、その理解を、*TLOL* を通してどのように自分の子供たちに伝えようとしていたかにある。ウォルダールの『ディケンズと宗教』(Dennis Walder, *Dickens and Religion*, 1981) をはじめとしたディケンズの宗教観に関する先行研究でもあまり触れられなかった *TLOL* に焦点を当てている点の他に、1830 年代から 60 年代にかけてのイギリス国内における宗教を巡る社会的、思想的文脈を結果的に再構築している点にも本書の有意性はあると評者には思われる。

*TLOL* を一読したとき、ディケンズの率直で真面目な書きっぷりに拍子抜けの感を否めなかった評者にとって、カリッジの著作は読み始める前から刺激的に感じられた。1840 年代に執筆された *TLOL* は、ほぼ同時期に執筆された『子供のためのイギリス史』(以下、*CHE*) と共に、ディケンズが教育熱心な父親として我が子のために製作したものであり、彼の宗教と宗教教育についての考え方、および過去に対する態度の例証になるはずだが、どのように扱えばよいのか評者には分からなかった。ディケンズが 1843 年 8 月 7 日付けの書簡の中でアンジェラ・バーデット・クーツに語った執筆動機「息子 (長男のチャーリー) が戦争や殺人に対して寛容な心を持つように、間違った英雄に夢中になったり、栄光の剣の輝かしい面だけを見て錆びた面について何も知らなかったりということがないように」すること—そのままに戦闘や処刑の場面を詳細に描写し、独断と偏見に満ちた歴史を *CHE* で繰り広げたように、*TLOL* にも何か一捻りがあるのではないかと、評者が過度の期待を持って *TLOL* を読み始めたのもよくなかった。1840 年代に執筆中だった歴史物語と現存の *CHE* が同じものである証拠はないし、*CHE* を 1851 年から 53 年にかけて『ハウスホール

ド・ワーズ』誌に連載した際、ディケンズは我が子以外の読者を否応なく意識していた想定される。それに対し、ディケンズに出版の意思が全くなく、1934年になってやっと出版された *TLOL* について、*CHE* がこうだから *TLOL* もそうであるはずだと安易に考えてはいけなかったのである。

全7章から成るカリッジの著作の第1章（‘An Essay Version of the New Testament’）は、*TLOL* の形式とディケンズの執筆意図を吟味することに充てられている。カリッジがディケンズのことを、イエスの生涯を再構築する編纂者と呼んでいるように、*TLOL* は主に福音書から取ったエピソードを時系列順に並べることによって構成されている。作者の恣意が働いているとすれば、福音書におけるエピソードを取捨選択し、子供の理解力を考慮して言葉を置き換えたり、省略を行ったりなどするときくらいである。要するに、ディケンズが過度の誇張を行ったり独断的なコメントを差し挟んだりすることによって独自性を発揮するのではなく、キリスト教徒として我が子に何を伝えたいかだけを念頭において製作したからこそ、*TLOL* はその宗教的信条を明確に反映しているはずだとカリッジは主張し、その後の章で論を進める前提にしている。

第2章（‘Telling that Gracious and Compassionate History’）、第3章（‘The Eternal Majesty of Heaven’）では、宗教的懐疑の時代という文脈の中で *TLOL* やその他の作品に見られるディケンズの宗教観が論じられる。カリッジはまず、*TLOL* が執筆された1840年代のイギリスが、福音書こそイエスの生涯を記した絶対的かつ正統的な文書と見なしていた時代から、福音書の記述を再検討してイエスの生涯を再構築する時代への過渡期にあったことを確認する。次に彼は、そのような動きがあったにも関わらず、一般の人々が福音書を必ずしも批判的に読んでおらず、ディケンズもそのような人々のうちの一人であったことを検証し、福音書に記されたエピソードをつなぎ合わせて *TLOL* を製作すること自体を、ディケンズが宗教的懐疑に陥っていない証拠と見なしている。同時代の子供向けのキリスト伝で、福音書の記述を基に著された宗教書として、ルーシー・バートンの『神と救い主イエス・キリストについての福音書物語』（Lucy Barton, *The Gospel History of Our Lord and Saviour Jesus Christ*, 1837）などが挙げられているが、それらが教義上、神学上、歴史記述上の諸問題に時として頓着している一方で、*TLOL* では福音書の記述が損ねられたり批判されたりしていない。これもまた、ディケンズが宗教的懐疑の流れに、少なくとも *TLOL* 執筆時に同調していない証拠だとカリッジが指摘している点である。

第3章でカリッジはディケンズを19世紀半ばにおけるイギリス国教会の典型的な平信徒と位置づけ、*TLOL* がそのような彼の宗教的信条を裏づけていると主張している。科学の発達により、万物の創造主としての神の存在に異議が



唱えられつつあった1840年代にあって、ディケンズは科学に関心を寄せている点、神を万物の創造主で人類の歴史の編纂者と見なし、あらゆる出来事や存在の背後に神意(Providence)を見出している点、科学が神意の行使されるのを幫助するものと考え、万物の創造主としての神の地位に揺るぎはないと信じていた点で、同時代の多くの人々と共通していた。そのような考えを反映して、*TLOL*において神は物語の表舞台に登場しなくても、あらゆる出来事の動向を定めるものとして、随所でその存在が仄めかされている。小説の中でも、例えばエスタ・サマソンは顔に傷を受けたことを神意が作用した結果と解釈し、神意という言葉を実際に使いながら神に感謝している。カリッジによれば、この場合に限らず、ディケンズの考える神意は善なる神が人間に対して好意的に働かせるものであり、苦難に満ちた宿命や罰を課すものではない。ディケンズが、例えばミセス・クレナムを描きながらカルビニズム的な宗教観を批判しているのは、そのような見方が彼の考える神や神意のあり方に反するからである。

カリッジは第4章(‘Where the Two Ends of Life Meets’)でディケンズの死生観を論じており、その前半を彼の考える天国のあり方、その後半を地獄のあり方を吟味するのに充てている。*TLOL*における天国は「キリストのまします場所で、誰もが死後に迎えられることを希求し、あらゆる人に再会して、みんなと一緒に永久に幸せに暮らせる場所」(第1章)だが、カリッジによれば、ヴィクトリア朝の人々は天国をそのような場所だと考えることによって死への恐怖を緩和しようとした。人々はまた、特に早世した子供が、慈悲深き神の御心によって現世における苦難を免除されて天国に迎えられたと見なしたが、そのような見方を裏づけるかのように、ディケンズはリトル・ネルが逃避行の果てに美しく穏やかな死を迎える様子を描いている。その一方で、ディケンズは同時代の多くの人々と同様に、現世における行為次第で永久の刑罰に処せられ、地獄へ送られる可能性もあると信じていた。その傍証として、カリッジは『バーナビー・ラッジ』(以下、*BR*)や『二都物語』(以下、*TTC*)において犯罪者が永久の刑罰に処せられていることを挙げている。ただし、クリスチャンではない評者に理解しがたく思われるのは、永久の刑罰の対象が*BR*ではルーバン・ヘアデイルを殺害したバーナビー・ラッジ・シニア、*TTC*ではマダム・ドファルジュの姉を暴行した当時のサン・テヴレモンド公爵とその弟に限定されていないことである。すなわち、各々の父親の犯した罪を贖うために、バーナビー・ラッジ・ジュニアは狂気に犯され、チャールズ・ダーネイは死刑宣告を受けている。結果的に前者は恩赦を獲得して死刑を免れ、後者は生き延びるものの、世代を超えて課されるほど永久の刑罰は厳格で過酷なものだということなのであろうか。



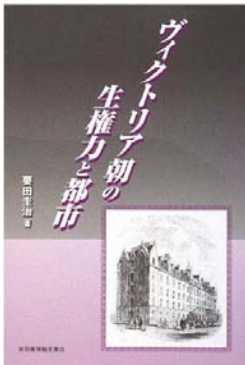
カリッジは第5章（‘It is True! He is the Son of God’）ではイエスの特性を、第6章（‘Our Blessed Saviour Jesus Christ’）ではイエスの行為をディケンズがどのように理解して、*TLOL*を描いているかを解明している。その際にカリッジはユニタリアニズムの影響が見られるか否かに着眼しているが、その理由は、ディケンズが1843年3月2日付けのコーネリアス・フェルトン宛ての書簡の中で表明しているように、ユニタリアンに慈善と寛容の精神を見出し、1842年から47年にかけてウエスト・エンドのユニタリアン派礼拝堂に自分の席を確保していたことから、ちょうどこの時期に執筆された*TLOL*はユニタリアニズムに基づいているのではないかと従来から指摘されているためである。

結論から言えば、カリッジは*TLOL*における記述にユニタリアニズムが影響している可能性は極めて低いと判断している。それは、第5章では「神の子」という表現を鍵にして、ディケンズの考えるキリストの特性の一つに神性があることを検証した結果であり、そして、第6章ではディケンズが人を救済するイエスの姿を*TLOL*に書き込みながら、イエスには神と同等の力が授けられているという考えを示唆していることを検証した結果である。第5章で以上の検証を行う際にカリッジが取り上げている場面の一つに、トマスがイエスの身体にある釘の跡を確認してはじめて復活という奇跡が起きたことを信じ、「我が主よ、神の子よ」（*TLOL* 第11章；John 20. 27-28）と言う箇所がある。トマスがイエスを神と認めたこの言葉こそ、ディケンズと同時代の人々がキリストの神性を認める根拠とし、ユニタリアンがそれを論破するのに苦戦を強いられた箇所であった。第6章でカリッジが着目した場面の一つは、マグラダのマリアがイエスの足に香油を塗りつけるのを見て立腹したパリサイ人に対し、イエスが「神は彼女を赦したもう」（*TLOL* 第5章；Luke 7. 36-50）と言う箇所である。イエスの発言に続けて、ディケンズは「そこにいた人はみんな、キリストには罪を赦す力があるのだろうかといふかったが、神はその力をキリストに既に与えていたのだ」という解説を加えることによって、イエスは自らが赦すと述べているのではなく、神の赦しを布告しているに過ぎないというような主張を例えばユニタリアンが差し挟む余地を与えていない。

第3章から第6章にかけてのカリッジの議論を考慮するなら、ディケンズが*TLOL*に彼なりの神学的主張を表出させていても、それは宗教について語る際に否応なく表出する副産物だと考えるべきであろう。最終章（‘Seeking for No Other Footsteps’）でカリッジはディケンズを宗教的な小説家だと見なしているが、その根拠として彼はディケンズの神学的信念を挙げていない。

カリッジがディケンズを宗教的だと見なす根拠の一つとして挙げているのは、ディケンズ自身が1861年にデイヴィッド・マクレイ宛ての書簡の中で「控

えめで、慈悲深く、誠実かつ寛大であること」をキリスト教的な美德と捉え、登場人物の美点として作中に書き込むことをキリスト者としての自分の責任だと述べていることである。その15年前にディケンズはイエスがそのような美德を行動の中で発揮する様子を *TLOL* に書き込み、イエスを手本として仰ぎながらその教えに従うよう我が子を促していていたわけだが、これも彼がキリスト者として果たそうとした責任感の表れだと言えよう。ディケンズがこのような考えを持っていたことを念頭に置けば、エスタ・サマソンやエイミー・ドリットといった人物たちが発揮する善意のあり方を理解しやすいように思われる。スクルージがマーレイや3人のクリスマスの幽霊に導かれて改心するや否や慈善行為に目覚める件についてもそうである。彼らはキリスト者としての責任を果たそうとしているのだ。カリッジが著作の最初からたびたび言及していた *TLOL* の有用性は、小説に表れるディケンズの宗教観をひも解くためのインデックスにすることにある。*TLOL* がこのように使われることに対し、ディケンズはどのような感想を持つだろうか。小説は読んでもらいたいけど、我が子のために書いたキリスト伝がそういう使い方をされるのもいかなものか、と複雑な心境に陥るのだろうか。



要田圭治著、『ヴィクトリア朝の生権力と都市』  
 Keiji KANAMEDA, *Biopouvoir and City in the Victorian Age*  
 (iii + 289 頁, 音羽書房鶴見書店, 2009 年 4 月,  
 本体価格 2,940 円)  
 ISBN: 9784755302398

(評) 齋藤九一  
 Kuichi SAITO

本書は序章に続いて6つの章、それにあとがきと参考書目が付せられた292ページの著作である。6つの章には「個人の誕生」、「生権力」、「労働者住宅の建設」、「音」、「都市」、「都市の死」というタイトルがつけられて読者の興味をそそる。索引はないが、序章も含めて各章は多数の小見出しで区切られている。小見出しの総数は73であり、索引よりも小見出しを著者は愛好するかのよう

である。小見出しの内容は多岐に渡るが、私が暫定的に分類するならば、身体や病気に関するもの（コレラ、感染、衛生、循環など）、都市と空間（ロンドン、パリ、墓地、地下、食肉処理場など）、群集や祝祭（カーニバル、コメディ・デラルテ、供犠、暴動など）、個人と住宅（権力、パノプティコン・モデル、労働者住宅など）、そして警察に関するもの（警察という語は単独で2回、「衛生と警察」「予防警察論」も含めれば4回、小見出しに登場する）などである。

本書において言及される（言い換えれば、本書と明示的にインターテキストualな関係に置かれた）多様なテキスト群は3種類に大別できると思われる。まずAグループとしてヴィクトリア朝の文学テキスト（『骨董屋』や『荒涼館』など）、次に、Bグループとしてヴィクトリア朝ではあるが文学以外のテキスト（ディケンズのジャーナリズムや手紙、トマス・サウスウッド・スミスやヘンリー・ロバーツやエドウィン・チャドウィックの論文、当時の地図やデータなど）、そして最後にCグループとして、著者が参考にした現代の理論的テキスト（フーコー、フロイト、ベンヤミン、バフチンなど）である。著者がいかに深く綿密にCグループのテキストを読み、そこから学んでいるかは上述の小見出しの内容からも推測できる。

しかし、本書の目玉は、「あとがき」にもあるように、著者がロンドン滞在中に「なつかしい未知の土地」（言い得て妙！）ベスナル・グリーン図書館で集めて読み、また、土地をくまなく歩き回って得たデータ、すなわち「十九世紀の人の思考をくっきりといまに伝えている」一次資料（Aもそうだが取り分けBに属するテキスト）の解析に他ならない。その意味で、Cグループの現代理論的テキストから引用した言説の正しさをAやBのヴィクトリア朝テキストを参照して証明または確認するという、本書に時たま見られる手順は、どこか転倒しているように私には思われた。Cグループに属する大御所たちの間違いを指摘するのであればニュースであろうが、彼らの洞察がいかに正しかったかを称揚されてもやや旧聞に属する。何しろ私たちは皆あの大御所たちのチルドレンなのだ。それよりもむしろ、フロイトもフーコーもベンヤミンもバフチンも、注と参考書目（ちなみに本書の充実した参考書目は裨益するところ大である）に封じ込め、本文ではひたすら、A・Bのグループに属するヴィクトリア朝テキストと著者自身との親密な対話を、もっともっと自由奔放に展開していたならば、さらに痛快であったことだろうと思う。これは私の単なる無い物ねだりではない。明敏な著者は自ら、そのような事態を、「フーコーの視線の呪縛を振り払って」という言葉で見事に言い当てているのだ（105頁）。私の好きな警察ドラマの台詞（「事件は会議室ではなく現場で起こっているのだ」）をもじって言えば、事件はフーコーのテキストの中で起こっているのではなく、

ベスナル・グリーンの図書館で起こったのである（後者もテキストであることに違いはないとしても）。

本書のテーマは、権力による「規制」が、法や規律やモラルという硬軟取り混ぜた形で、都市の住民の身体と精神に影響を及ぼして、社会秩序を維持し、経済的生産性を確保しながら（言い換えれば、都市の労働者を巧みに「生かしながら」）、権力それ自体も生き延びていく、そのような「生権力」の浸透という現象を描き出すことであると思われる。同時に、著者は、都市の近代的再編に伴う影の部分にも視線を向ける。すなわち、都市の整備が進み、スラムは再開発され、疫病の予防体制は確立し、個人あるいは家族を単位とする労働者住宅が建設されるという、快適さや喜びがある一方で、「新しいシステムは巧妙で、人々の美や清潔に対する志向性がある、密やかではあるが、もっと強力な何ものかを見ごとに覆い隠してしまったにすぎないことも考えられる」（206-07頁）というのである。

すなわち、「生きることを可能にする」規制を「人は喜んで受け容れても、その根拠にある社会的意思には気づきにくくなっているのだ」（9頁）。その結果、「社会の諸レベルにおける組織化と規律の浸透に相関して祝祭性が周縁化する」と著者は言う（181頁）。ここで「祝祭性」と呼ばれているものは、例えば、都市の密集空間における、病気や死や狂気とも隣り合わせの、猥雑な生のエネルギーであり、また、個の枠を超えて群集と一体化するディオニソスの陶醉感のことであると私は理解している。

ところで、著者は、快適性の獲得に伴う祝祭性の喪失という一方向的・直線的な時間の流れを暗黙の前提としているように思われるが、私は、人間的な時間が一直線に進むだけでなく、「循環」（ちなみに、これも本書のキーワードの一つである）することもあるだろうし、ロンドンのような強い都市は、清潔な「快適さ」と猥雑な「祝祭性」を並存させ、そのバランスをいつまでも取り続けるのではないだろうかとも思うのである。しかし、そのような私の感想は楽天的に過ぎるかもしれないし、また、著者が、本書最終章「都市の死」の最後から2つ目の段落において、想像力の中で「時間を逆行して」原初の「エロスにあふれた存在者に立ち戻る」ことを読者に勧めてはいるけれども（273頁）、全体的に見れば、本書の言説の迫力そのものが、実は、時間の不可逆性と関わりがあるように思われる。序章において、1831年10月のコレラのイギリス上陸を「ありありと蘇らせている」トマス・サウスウッド・スミス医師のテキストに言及しながら、著者は、「いつ、なにが起こってもおかしくない、事態の展開の速さだった」と書く（1頁）。この臨場感・切迫感こそが本書を貫く大きな魅力であると思うのである。

---

# Fellowship's Miscellany

---



## チャールズ・ディケンズからの贈り物

A Gift from Charles Dickens

東 徳子

Noriko AZUMA



私は2009年3月に慶應義塾大学の文学部を通信教育により卒業しました。卒業論文は河内恵子先生のもとでチャールズ・ディケンズ研究に取り組みました。河内先生の勧めで2005年にディケンズ・フェロウシップ日本支部の門を叩き、入会を許されてからは会員の皆様に暖かく接していただきました。また、ディケンズ研究者の方々の講演や研究発表を聴く機会に恵まれたことは感謝に堪えません。入会時の支部長であった西條隆雄先生、メイリング・リストでお世話になった松岡光治先生、そして今回の寄稿を勧めてくださった支部長の原英一先生に、この場を借りてお礼を申し上げます。

### はじめに

思えば、慶應で学び卒業論文を書くことは、自分が生きている世界がどのような価値観に基づくのかを理解する試みであった。日本の高度経

済成長期に生まれた私は、自分が育った町、両親の故郷である里山と島の景観が凄まじい速さで変化し、生活はより便利なものへと替わってゆくことを経験した。これまで、私自身はその恩恵を受けながらも、心の底では子供時代の記憶にある自然を渴望してきた。この卒業論文研究は、人々、社会、自然の善なる感化が私に注がれていたのだと鮮明に思い出すかけがえのない時間であった。そこで、お世話になった方々への感謝をこめて、卒業論文研究の4年間を中心に卒業までを振り返ってみたい。

### 入学から単位取得まで

慶應の通信教育課程には、文学・経済（商学を含む）・法学があり、入学時に普通課程、特別課程、学士入学によって単位が認定された。学習は、テキスト、スクーリング、メディア授業（ラジオ、現在はインターネットでも開講）を組み合わせて単

位を取得する。テキスト学習では、レポート受理後に科目試験（年に4回）を受け、両方が合格して単位取得となる。私の場合、入学した当初は目まぐるしく月日だけが過ぎてゆき、単位取得は遅々として進まなかった。

夏のスクーリングでは、教室の前の席から埋まってゆき、授業中は私語もなく先生の声とノートを取る鉛筆の音、そして蟬の鳴き声だけが響いていた。私達学生は、老若男女の通信生が熱心に学ぶ様子に、一人で学ぶ時も頑張ろうとその時だけは固く決意するのであった。授業はどれも印象に残るものであった。また、ある年のスクーリングで、「通信生は100単位取得してから卒業論文に取り組むことが望ましい」という噂を聞いた。この「100単位取得」という目標を持ってからは勉強に弾みがつき、単位の取得も進むようになった。

### 卒業論文研究

卒業論文への突破口が開いたのは、大谷愛人／他著『現代倫理学の諸問題』という教科書で見つけた「近世的思惟」に衝撃を受けたことである。それは、精神史の「主観の意識（精神）の在り方」で時代を区分した今日までの450～500年の思惟で、「近世的思惟の非倫理性による文化と人間性の破壊が今日の根源的状况をもたらし・・・今日の諸問題に適用しようとするそれが通用せず、かえってそれが事態を更に悪化させる原因になることが起る」というもので

あった。また、「英文学」について考えていた時、「文学の研究を通してわれわれの周りの世界をよりよく理解し、そこに生きる他者をよく知ることを心がける学問」とロバート・イーグルストンが定義しているのを見つけた。そこで、卒業論文では今日の社会の根底にあるという「近世的思惟」を明らかにし、それに代わる価値観を探すべく、英文学の作品に取り組もうと考えた。

私がディケンズ作品に出会うことができたのは、河内先生と小室正紀先生のおかげである。河内先生のスクーリングでのある一言を聞いて、私は「現代社会の便利さの礎となった産業革命後の実社会を描いた小説にしよう」と考えるようになった。そして、小室正紀先生は、卒業論文に関するオリエンテーションで私の「日本を外側から見るために、産業革命後のイギリス社会を描いた小説家を知りたい」という風変わりな質問に対して、ディケンズをご紹介くださったのである。実をいうと、ディケンズ作品との初めての出会いは、子供時代に買ってもらった世界文化社の『クリスマス・キャロル』（少年少女世界の名作3）であったが、幽霊が出るお話と挿絵に怖気づいて一度も読まずじまいであった。こうして、初めてディケンズの小説『オリバー・トゥイスト』を読んだ時は、涙と苦しい気持ちでいっぱいになった。

通信教育課程において、卒業論文指導は春と秋の年2回で行われるが、その様式は先生により様々である。河内先生の場合は、約2時間で毎回



5～6人のゼミ形式であった。ゼミの仲間は、会社を定年退職した方や様々な年齢層の主婦の方々であった。通信生として年に2回の指導で卒業論文を書くというのは、時に困難さを伴うものである。指導後は、先生から伺ったことを6ヶ月もかけて一人で深めてゆくので、仮に誤解していても気づかず、すぐに軌道修正ができないことがある。通学生のように、先生の言葉のニュアンスや意味を授業中に察したり、質問をかけて再度聞いたりできればと思ったものである。また、ゼミの仲間と会って相談することも、遠く離れているため叶わないのである。慶應の図書館では、通信生が卒業論文指導に入ると3年間は図書の貸し出しができる制度があるが、地方の通信生は東京まで頻繁に通うことができず、他大学への紹介状発行や資料の複写依頼の利用にとどまり、文献探しが大きな課題となった。幸いなことに、私の場合は、関西学院大学と聖トマス大学の図書館を近隣市民として利用することができた。また、主人に卒業生として利用できる大学図書館へも（時には、系列の女子大にまで）出向いてもらった。論文の提出期限を2ヶ月後に控えて、図書カードの期限が満了した時には紹介状を発行してもらえず困ったが、京都大学図書館の司書の方に、公共図書館を通して複写依頼をする方法を教えていただき、資料を入手したこともあった。他にも、哲文社の小川哲夫氏にはディケンズ全集の古本や研究書を探していただき、大変感謝している。

初めての卒業論文指導で河内先生は、一作品を読了し先行研究に入ろうとする私に、まず文献リストを作成すること、次に全作品を執筆順に原文で読み心に響く言葉とその理由をノートに書き留めること、そして作品を読んでいる間は伝記と時代思潮を顕す二次文献を読むことの3点を指導してくださった。また、卒業論文の指導を週に1回で2度まで二年間受ける通学生と同じ学位を出すのだから、年2回の指導となる通信生は少なくとも3年間は論文に取り組むようにと仰った。これを聞いた私は、3年もかけて研究している間に、最初に読んだ本の印象が薄らいでしまうのではと心配し、現代の情報を遮断して自分の生活のあらゆる場面において19世紀とディケンズの作品に向き合うことにした。

ディケンズ作品については、まず『ボズのスケッチ集』（デント・ユニフォーム版）に収録された作品を執筆順に並べ替えて読んだが、これにより19世紀の時代の雰囲気や人々の様子を感じることができた。発音そのままを書き写した会話文に、これが現代とは違うという19世紀の英語なのかもと辞書を調べたこともあった。人々と社会を見つめるディケンズの眼差しに、彼の問題意識のすべてがここにあるように思えた。小説については、文献リストを作成しながらどの版を読むかと悩んだが、『ノンサッチ・ディケンズ全集』（復刻版）が関西学院大学の図書館にあるのを見つけたので、これをペンギン・クラシックスの注釈を参考にして読

むことにした。作品は、一章をまず原文で読み、読み落としや誤りがないように邦訳を読んだ後、心に響く文章をノートに書き写すという作業を繰り返した。また、『ニコラス・ニクルビー』を読んだ時には、何章かにわたって「想像力」のモチーフが描かれているのではと気づき、西條先生の著書に分冊表があったのを思い出して、『骨董屋』からは分冊で区切りながら読むことにしたが、それからは、物語を読む楽しさもぐっと向上したように思う。河内先生からは、具体的で小さなテーマを多く見つけ、テーマの発展や作家の変化を全体から汲み取るなかで自分のテーマを探すように伺っていたので、私は全小説を一つの大きな作品と見立て、ディケンズの善と邪悪に対する価値観をみつめ、ディケンズ作品を形容する「愛と寛容」とは具体的にどんなものかを知ること努めた。だが、自分の価値観で善と邪悪を定義するのは、はなはだ心もとないと感じ、何冊かの一般書を一日の終わりに読んだ。すると、自己犠牲、献身、沈黙、善と邪悪の定義、人間の本質などの文章が、その日に読んだ分冊の理解をより深めてくれるようになった。ひとつの作品を読んでいる間は、すでに読んだ作品の登場人物の名前も思い出せなくなるほどに作品の世界に没頭した。時に、お話を紡ぐ糸車を止めてヴィクトリア朝の読者のように次の分冊までの時間を得て、もっとゆっくりと何度も読み直したい気持ちに駆られることもしばしばであった。

ある時、河内先生は、ディケンズが描く都会の自然にも美しさ（徳）があると仰った。それまで、自然といえば田舎にしか眼が向かない私だったが、『骨董屋』を読んでいる時、レイチェル・カーソンが言う「自然がくりかえすリフレイン」が私の住む町にもあると気づいた。すると、自然への渴望感は消え、幼い頃の自然とそのなかで生活する大人達の記憶が鮮明に蘇り、皆が私の心に蒔いてくれた種がようやく卒業論文という刈り取りを迎えているのだと気づいた。

ディケンズの後期の作品を読む前には、18世紀からルネサンスの時代までさかのぼり、西洋の歴史観や科学と宗教の関係などを学んだ。また、もう一人の‘C・D’チャールズ・ダーウィンが、『種の起原』を書くに至った経緯を知りたくて、彼の人生も追いかけた。作品の合間に少しずつ読み進んだピーター・アクロイドの伝記は、ディケンズの作品と人生に対する理解を深めてくれ、ジョン・フォースターの伝記は、私が涙なしには読めなかった文章の向こう側でディケンズも涙ながらに書いていたのだと教えてくれた。なによりも、作品の中にディケンズの思考を追ってゆく時、二者択一の思考方法ではなく、その両極端の間に無数に存在する様々な考え方を検討する彼の思考の深みと細やかさには、常に感銘を受けた。こうして、19世紀の読者と同様に小説の分冊を原文で執筆順に読んでゆくなかで、私もディケンズから愛と勇気をもらい、癒さ

れ、作中の人物達がいつも寄り添ってくれているように感じた。

私自身の在籍期限に合わせた卒業論文提出期限（2008年11月末）まで1年をきった頃、すでに卒業した友人達は、在籍期限が満了して涙を呑んだ人達を見てきたこともあって、激励の電話をかけてきてくれた。紀行文と（時間切れで断念した）後期の短編を除く小説作品を読了し、準備してきた先行研究の本読みに入っただけで、自分と研究者の方々の見解を明確に区別できると気づいた時には、作品との出会いを大切にしよう指導して下さった河内先生に深く感謝したものである。それからは、様々な考えの違うディケンズの研究者達が、私の論証に付き添ってくださることがうれしかった。

卒業論文提出期限まであと半年となった時、様々な論文の問題に直面して悩みながらの執筆となった。挫けそうになった時には、ビデオが、*'her hair always wanted brushing, her hands always wanted washing, and her shoes always wanted mending and pulling up at heel'* (GE 41) と窮乏を呈した状態から、*'Her shoes came up at the heel, her hair grew bright and neat, her hands were always clean'* (GE 122) までに、自らを成長させたことに思いを馳せた。夏に、通学生の「河内ゼミ」の先輩である宮丸裕二先生に、無理をお願いして卒業論文の第一稿を読んでいただき、また最後まで伴走していただけたことは感謝に堪えない。その後1ヶ月半をかけてS・T・コウルリッジから19世紀の思想史を学

び直し、序章を書き直した。その間、聖トマス大学で見つけたJ・S・ミルの『ベンサムとコウルリッジ』は、善さを快適さに置き換えて定義したというジェレミー・ベンサムにあまり好感を持ってなかった私に、彼の功利主義への動機も、法律が弊害に満ちていると衝撃を受けた状況改善への思いから始まったものと教えてくれた。また、サミュエル・バトラーがヴィクトリア朝のただなかであって「機械装置と生命体との対照」に取り組んでいたことも知った。

卒業論文提出まで最後の1ヶ月間は様々なことを同時にこなしながら、『ディケンズ鑑賞大事典』と『MLA英語論文の手引き』に首っ引きでの執筆となった。この時も、ディケンズの作品に思いを馳せて心を静けさで満たし、最後まで自分の裡なる声に耳を澄まし文章を推敲することができた。その後、卒業論文「呪縛からの解放—チャールズ・ディケンズの実践」の提出、卒業試験を経て、晴れて卒業の日を迎えることができた。

### これまでを振り返って

今振り返ってみると、卒業論文研究のために現代の情報や便利さからなるべく隔絶した4年間は、*'I don't want to know about it; I don't choose to discuss it; I don't admit it!'* (OMF 143) というポズナップ氏になっていたのかも反省する反面、小説を通して19世紀の現実とディケンズの実人生をみつめることによって、今日の日本社会や自分自身にまで思いを馳せ

ることができたようにも思う。その間、漫然と情報に晒されていた時と違って、ふと眼にした活字や見てしまったテレビで、多くの日本人の方々にディケンズを理解する糸口をもらった。また、今の日本でディケンズを、それも分冊で読む人がもっとたくさん増えればと願った。というのは、便利さゆえ他者と容易につながる世の中であって、孤独で寂しい思いをする人々の心に明かりが灯るだろうから。私自身、卒業論文を仕上

げてゆくなかで、たとえどんな困難に出会ったとしても、信念をもって小さな一歩を自分が踏み出しさえすれば必ず道は開かれると実感できたことは、ディケンズからの大きな贈り物である。そのディケンズの霊に愛と感謝を捧げたい。

これからは、お世話になった方々に恩返しをするべく、ディケンズ作品から学んだことを私自身の日常生活において実践してゆきたいと思う。



ディケンズのインクと本を読む人

## ノッティンガム留学記 2

## Life in Nottingham 2

佐々木 智史

Chifumi SASAKI



9月7日の修士論文提出をもって、(成績発表と卒業式はまだ控えているものの)1年間のMAコースが終了した。今回の修士論文では18世紀の作品を研究したので、残念ながらディケンズに関する報告ができそうにないのだが、'Long 19th Century Pathway' という括りに属した授業に参加したので、少しはノッティンガ

ム大学の19世紀文学研究のあり方をお伝えすることができるのではないかと思う。

ノッティンガム大学英文学研究科の修士課程では、前期はどの時代を専攻するかに関係なく全員が同じ授業を履修する必要がある、個々の文学作品ではなく、テキスト論、マニユスクリプトの扱い方、出版の歴史、



図書館の横道からみたキャンパス内の寮



といった文学研究への取り組み方そのものを講義形式で学ぶことになる。担当教授もテーマによって変わり、教授によって違ったやり方で授業が行われるので、戸惑うことも多かったが、毎回違った視点で行われる授業は一つも聴き逃すことのできない

研究発表のようで大変参考になった。また、'Research Methods in Literature and Drama' という授業では、修士論文のテーマについて、学生同士で意見交換をし、各々教授からもコメントをもらうという形式がとられており、コースのはじめから最終目標としての修士論文へ取り掛かる体制を整えられるよう構成されていたように思う。

後期には、時代や専門に応じて授業を選択できるようになり、私は'Literature and Identity, c. 1789-1914' と 'Popular Literature in Late 18th and 19th Centuries' という授業を選んだ。'Literature & Identity' は主にロマン派の詩を中心に扱うクラスで、私を含めても5人しか参加学生がおらず、毎回活発な意見交換が行われ、朝9時からの授業ではあったが、大変楽しく参加することができた。一

### 英文科のあるトレントビルディング



方、'Popular Literature' には心理学部の学生も参加し、13人と比較的大人数でのクラスであった。しかし、このクラスでは長編小説が中心に扱われ、日によってはウィルキー・コリンズの *Woman in White* とアン・ブロンテの *The Tenant of Wildfell Hall* という組み合わせでの授業が行われたり、ジョージ・ギッシングの *New Grub Street*、マリー・コレリの *The Sorrows of Satan*、ヘンリ・ジェイムズの *The Tragic Muse* の三作を一回の授業で取り扱ったりということもあり、予習が追いつかなかったこともあったので、人数が多くだったので発言回数が少なくて済んで助かったというのが本当のところである。

また、1年を通して 'Research Management' というモジュールがあり、どうやらこれが人文学系の修士課程では必修というようにイギリス



政府で取り決められたものらしく、大変複雑な上に最終的には 80 枚のポートフォリオを提出せねばならなかった。しかしこのモジュールでは、'Library Skills' や 'Academic Integrity' のようにイギリスの大学院で論文を書くに当たって必要最低限のことを教えてくれる講義や、'Tradition of Critique' のように毎週一人ずつ理論家について考える授業が用意されており実際大変役に立った。特に、このモジュールはポートフォリオ提出が合否判定に使用され、実際の点数は最後に行われる発表によるのだが、発表が大変に苦手な私は、このモジュール内に設定されていた 'Presentation Skills' というトレーニング形式の授業のおかげで何とか最後の発表を乗り越えることができた。

成績に関しては、すべてレポートによるものなのだが、ノッティンガム大学では事務室にレポートを提出する前に、'Tunitin' というオンラインシステムにレポートをアップロードし、プレジャリズムがおこなわれていなかいかどうかのチェックが行われる。インターネット上の作品や論文と比較して盗用がないかを監視する仕組みになっており、ここで盗用とみなされると罰則が科されることになる。その罰則につて、退学だとか、法廷に行くことになるだとか事前に聞いていたので、特に盗用した憶えはなくとも、毎回この作業がとても恐ろしかった。

このようなインターネットを使ったプレジャリズムがイギリスで特に問題になるのは、オンライン・アーカイブの充実というのも理由の一つなのではないだろうか。というのも、例えばノッティンガム大学では、'ECCO' (Eighteenth Century Collections Online) や 'LION' (Literature Online) といった作品のデータベースだけでなく 'Project MUSE' や 'JSTOR' のような論文データベースがとても充実しており、簡単に欲しい作品や論文を手に入れることができる上に、作品内を検索したり、似通ったテーマの論文を一度に見つけたりすることができる。図書館に向く時間が省くことができ、嵩張る資料もないため大変便利なのだが、あまりの情報量に、資料をきちんと論文に活用できなくなってしまうこともあるのだと思う。そういった事態を避けるために、計画を立てて論文に取り組むことの重要性が指摘されており、ノッティンガム大学のイギリス文学科は 'Research Management' モジュールの一環として 'Time Management' の講義を必修で学生に課している。時間管理能力の無さが盗用につながるという認識がなかった私は、いかに計画を立てて論文に取り組むことが重要かということをここで改めて学んだように思う。

6月に全ての授業の課題を提出し終え、修士論文の概要についての発

表を終えると、いよいよ指導教授と  
一対一の指導に入る。規定で指導教  
授が実際にチェックできる語数は、  
論文の制限語数 13,000 語から 15,000  
語のうち、3,000 語までと決められて  
おり、限られた回数の指導教授との  
面談で、いかに教授からのアドバイ  
スを活かして自分の論文を発展させ  
るかということが、私の 8 月前半ま  
での課題だったように思う。私の指  
導教授はインドにおけるイギリス文  
学と 18 世紀アイルランドの女性文学  
を専門とされている、アイルランド  
出身の女性であったが、大変厳しく  
的確なコメントを毎回して下さり、  
彼女の指導に報いるためにも納得の  
いく論文を書こうというやる気を与  
えてもらうことができた。

インターネットで資料が簡単に手  
に入るとはいえ、やはり修士論文に

取り掛かかると、プリティッシュラ  
イブラリーまで出向かなければなら  
ないことも多く、依頼した資料がな  
かなか手に入らず焦った時期もあっ  
たが、どうにか締め切り期限の 9 月  
7 日に論文を提出することができた。  
英語が母国語ではない学生は、事務  
に申請すれば 2 週間の猶予がもらえ  
たのだが、8 月の時点で指導教授か  
ら猶予は必要ないとお墨付きをもら  
い、他のイギリス人クラスメイトと  
一緒に論文を提出することができた  
こと、また論文を無事終わらせてこ  
のディケンズ・フェロウシップの会  
報に留学記を書く機会が得られたこ  
とを大変嬉しく思う。ノッティンガ  
ムで学んだことを生かして、これか  
らの研究、また人生を実りあるもの  
にしていけたらと思う。



トレントビルディング横の湖

# 2008 年度秋季総会

Annual General Meeting of the Japan Branch 2008

at Osaka Gakuin University, *Suita*

日時：平成 20 年 10 月 4 日（土）  
会場：大阪学院大学 2 号館 B1-04 教室

Digital photography by Mitsuharu Matsuoka and Yuji Miyamaru

2008 年度の秋季総会は 10 月 4 日（土）、大阪学院大学（大阪府吹田市岸部南）にて開催されました。参加者は約 40 名、清新な若手による研究発表と佐々木副支部長による講演が行われました。永岡規伊子先生、西條智子先生には大会をオーガナイズしていただき、大阪学院大学の皆様には大変お世話になりました。

残念ながら原支部長の出席が個人的事情からなりませんでしたが、代わって副支部長の佐々木徹氏による司会で総会が行われました。



## 研究発表 Papers

司会：山本 史郎（東京大学教授） Moderator: Shiro YAMAMOTO

## 大前義幸氏と木島菜菜子氏の研究発表について

今回は新進気鋭の二人の研究者に、日頃の研究成果を披露していただいた。まずは日本大学大学院在学中の大前義幸さんが、「小説と挿絵画家、対になる思想」という題名のもとに、ディケンズが *Oliver Twist* の執筆中、挿絵画家のクルックシャンクとの間でいかに緊張に満ちた関係にあったかを考察。昔からたびたび議論されている問題だが、果敢に挑戦し、大胆な解釈を行った点が興味深かった。次は京都大学大学院に在学中の木島菜菜子さんによる「The Picturesque and Reality in *Pictures from Italy*」。対象をあくまでもリアルに見る透徹したディケンズの目を、一枚の絵画の描写をもとに論じた。具体的な分析を大きな構図に結びつける手堅い手法が印象的であった。将来を感じさせる二人の研究者による、次なる成果の発表が楽しみである。

(山本 史郎)



## 作家と挿絵画家，対になる思想

### —*Oliver Twist* を中心に—

Ideological Conflict

between the Author and the Illustrator:

The Focus on Charles Dickens's *Oliver Twist*

大前 義幸 (日本大学大学院学生)

Akiyuki OMAE

(Student of the Graduate School of English,  
Nihon University)

本発表は、ディケンズの死後、挿絵画家クルックシャンクが *The Times* 紙へ投稿した「*Oliver Twist* の起源」という記事を取り上げ、両者の対立する思想を論じたものである。

まず、始めにクルックシャンクが物語冒頭の場面である、救貧院の食事の量が、成長盛りの子供にとっては余りにも少なすぎるために、くじで負けたオリヴァーが代表して院長に懇願する場面、'Please, sir, I want some more.' と、その後に描かれるオリヴァーの容姿が何か異なっているように描

いたという案を取り上げ、作中に登場するいくつかの挿絵を紹介した。また、生前ディケンズが活躍していた時に、すでにアメリカの雑誌にシェルトン・マッケンジーが「*Oliver Twist* の起案はクルックシャンクである」として投稿していたことについても触れた。

次に、ディケンズの草案ということから、フォスターが伝記に載せている「ディケンズの手紙」や他の周辺の伝記の記載を取り上げた。しかし、フォスターの伝記には、ディケンズにとって不利な事実は記載しないという意図が考えられるために、「ディケンズの手紙」の信憑性は少なく、そのため、互いに異なる意見を再考察し、ディケンズがクルックシャンクの家で待っている間に視線に入った、エッチングに注目した。その絵の中に描かれていたものは、すでにクルックシャンクが書き上げていたロンドンのスリの実態を描いた一連の連続版画であったと考えられ、それをディケンズが作中に取り入れたことから、作家と挿絵画家との対立する思想が生まれたのではないかとした。

そして、発表の最後に、ディケンズがこの作品に込めた真意は、救貧法改正に対する批判、ならびに救貧院のひどい実情を世間に伝えることが目的であり、教区院のバンプル氏を醜く描くことによってこの作品は成功したことを確認した。





## The Picturesque and Reality in *Pictures from Italy*

木島 菜菜子 (京都大学大学院学生)

Nanako KONOSHIMA

(Student of the Graduate School of English,  
Kyoto University)



ディケンズは *Pictures from Italy* (1846) を、主に芸術作品や歴史的遺物について言及し

た従来のイタリア旅行記とは異なり、独自の観察に基づいた旅行記としようとした。ディケンズはローマで目にする公開処刑の様子と Beatrice Cenci の肖像画を対比させて描写するなど、コントラストを生じさせるものを巧みに配置することで、イタリアの現実の様相を印象的に浮かび上がらせる。最終章においては「新しいピクチャレスク」を提唱し、貧困を異国情緒に溢れているからといって魅力的なものとして捉えるべきではないとして伝統的なピクチャレスク趣味を批判している。ピクチャレスク趣味の視点が前提とした対象からの物理的及び心理的な距離の隔たりをディケンズは本書での事物の描写において批判的に扱い、ロンドンを描いてきたように汚い路地へも足を踏み入れて至近距離からイタリアの日常を描いている。この試みは本書に付された二人の画家による挿絵とディケンズの関わりについて考察することによっても明らかとなる。一貫性に欠けると批難されてきた本書には実際、美化することなく現実を描こうと試みたディケンズの一貫した意図が読み取れるのである。





## 講演 Lecture

司会：鶴飼 信光（九州大学准教授） Introduction by Nobumitsu UKAI

## 近代的ディケンズ批評の源流を温めて

—ミラー、マーカス、リーヴィス—

The Rise of Modern Dickens Criticism: Miller, Marcus, and Leavis

講演者：佐々木 徹（京都大学教授）

Lectured by Toru Sasaki (Professor of Kyoto University)

ご講演の圧巻は、『ニコラス・ニクルビー』第40章の病弱な無名の少年の背中の湾曲と少年が常住した屋根裏とに着目し、その少年がディケンズの幾つかの作品でいわば蘇るように繰り返し現れていると見る考察であったと思われます。ヒリス・ミラー、ステイヴン・マーカス、リーヴィス夫妻への賞賛と鋭い批判が数多く盛り込まれた興味深いご講演でした。

(鶴飼 信光)



近代的ディケンズ批評を成立させた偉大な三人の先達を振り返ってみると、自分にとって一番面白い思えるのはリーヴィスである。と言っても、F・Rではなく、奥さんのQ・Dの方で、彼女は当たり外れの激しい人だから、妙なこともかなり言っているが、小説を読むセンスの良さは抜群である。もっと評価されて良い批評家だろう。

なお、この講演とほぼ同じ内容の文章を、塩谷清人・富山太佳夫（編）『イギリス 小説の愉しみ』（音羽書房鶴見書店、2009年）に書いたもので、詳しくはそちらを参照されたい。

(佐々木 徹)



懇 親 会



大会終了後、キャンパス内の職員食堂、シダ・レストランで30名ほどが参加して懇親会が開かれ、荻野先生による乾杯の音頭のあとは、酒池肉林(安い会費にもかかわらず豪華な料理と豊富な飲物)の中で水魚の交わり。大学近くのイタリアン・レストラン、ラ・フェスタに場所を移しての二次会にも19名が参加し、おいしい赤ワインに酔いしれながら楽しいひと時を過ごしました。ディケنز・フェロウシップの神髄は懇親会にあり、という至言が酔いのさめた今でも脳中を去来しています。

(松岡光治・永岡規伊子)



# 2009 年度春季大会

The Japan Branch Spring Conference 2009  
at Chukyo University, *Nagoya*

日時：平成 21 年 6 月 20 日（土）  
会場：中京大学 名古屋キャンパス 3号館 1階

Digital photography by Mitsuharu Matsuoka and Yuji Miyamaru

2009年度の春季大会は6月20日(土)、中京大学(名古屋市昭和区八事)にて開催されました。参加者は約50名超。応募者多数の中から選ばれた二名が研究発表を行いました。シンポジウムは、久しぶりに外部からの卓越した研究者お二人をお招きして行われ、大変刺激的な内容でした。あまりに充実していたために、時間が足りず、今後のプログラム編成の際に考慮しなければならないでしょう。大会準備にあたられました榎正行、武井暁子の両氏には深く感謝申し上げます。





## 研究発表 Papers

司会：宮丸 裕二（中央大学准教授） Moderator: Yuji MIYAMARU

今回の大会での研究発表では、これまで相当の場数を踏んでこられたお二人がそれぞれに最近の関心として調査された内容をまとめたお話を聞くことができました。お話の聞き易さもさながら、研究の視点の取り方が大変に興味を引きつけるものでありました。実際、それぞれのご発表の後には聴衆から大変活発に質問の手が挙がり、時間の制約から惜しくもすべてに応ずることが出来かねるほどの反応を集めることとなりました。

また二つのご発表は社会の中での慈善的介入という一点で、互いに響き合う内容のものであり、昨今の日本を取り巻く同種の問題とも併せ、一つの重要なトピックを多面的に考えさせてくれる機会を与えてくれるものでした。

### 田村真奈美氏の研究発表について

今回のご発表は田村さんが数年にわたって集中的に取り組んできた、キリスト教との関連から文学作品を見るという調査の延長上に現れる関心として、慈善という問題を深めるものでした。『荒涼館』の中に現れる悪い慈善と理想的な慈善とに注目して進める方法は、若年の執筆からある種の慈善を非難し続けながら、同時に慈善活動に期待を捨てず自らも関わり続けたディケンズの両面性を分析するのに極めてふさわしいものと映りました。最終的に慈善の組織化・専門化に触れる結論部によって、ディケンズという関心のみならず、当時の社会を説明する上での一事例としてのディケンズという位置づけを与える



のに成功していたと言えましょう。

#### 市川千恵子氏の研究発表について

市川さんのご発表は、ヴィクトリア朝の社会問題小説の関心を現代の同ジャンルの小説まで辿ることで、中産階級女性の役割ないしそこに社会から期待されるものをあぶり出すというものでした。そこにある精緻な分析は、歴史的な文脈を度外視した単純な比較とは一線を画する内容でありました。今回のご発表が視野に入れる範囲は、移民による人種格差問題や、それによってかたちを変えつつ伝統として残るイングリッシュネスへの問いかけにまで及んでおり、小説を題材に国民意識を明らかにすることを意図する、大変問題意識の高い発表であったと理解しました。

(宮丸 裕二)



#### ディケンズと慈善

Dickens and Charity

田村 真奈美 (豊橋技術科学大学准教授)

Manami TAMURA

(Associate Professor of

Toyohashi University of Technology)

る。慈善活動が組織化・専門化へと向かってきた現実を考えると、『荒涼館』における理想の慈善は時代に逆行しているように見える。

自らも慈善活動に深く関わっていたディケンズはその実態をよく知る立場におり、個人の善意だけでは解決できない問題につ

本発表では近年盛んに行われている慈善の研究の成果を踏まえて『荒涼館』を読み直し、ディケンズと慈善について改めて考察した。

『荒涼館』のジェリビー夫人、パーディグル夫人は「悪い」慈善家の代表としてしばしば慈善研究でも言及されるが、これは女性による安易な慈善活動が問題視されるようになっていた当時の社会的背景を反映している。また、『荒涼館』における「悪い」慈善家は女性に限らず、クウェイル、チャドバンドなど男性の慈善家も含まれる。対照的に、ジャーンダイス、ウッドコート、エスタは理想的な慈善家として描かれるが、「悪い」慈善家が組織的な慈善活動に従事していることが多いのに対し、理想的な慈善家はあくまで個人レベルで慈善を行ってい





いても熟知していた。しかしながら『荒涼館』では、慈善活動が組織化されてゆく時代に、原点に戻ってその基となるべき個人の慈愛の精神が強調される。これは、全知の語りとパーソナルなエスタの語りを使い分けて社会の制度や組織と個人を対照し、その上で希望を個人に託しているこの小説の構造とも合致する。『荒涼館』における慈善は、当時の事情を踏まえながらも、現実をそのまま反映するものではない。そこで試みられる理想の慈善の追求は、慈善活動が組織化・専門化してゆく動きのなかで立ち止まり、もう一度個人の善意のレベルに戻って慈善の本質を考え直すことだったのである。

### 厄介なる遺産

#### — 『ハード・タイムズ』と『北と南』から『素敵な仕事』へ—

Awkward Expectations:

From *Hard Times* and *North and South*  
to *Nice Work*

市川 千恵子 (釧路公立大学准教授)

Chieko ICHIKAWA

(Associate Professor of

Kushiro Public University of Economics)

ヴィクトリア朝において、労働者と女性はともに「持たざる者」であり、社会の周縁的な存在としての両者を物語の中心に置くことで、『ハード・タイムズ』と『北と南』は社会的な問題と私的な問題の連鎖を前景化させる。

『ハード・タイムズ』では、労使関係に結婚と教育をめぐる問題が複雑に絡み合う。労働者の代表として「持たざる者」の苦悩を代弁するステューブンの最後の願いを引き受けるルーイーザの内なる変化が、結束では社会の変化の兆しとして提示される。一



方、『北と南』は社会と家族の喚喩を使用し、個人の内なる変化を社会の変化として描き出す。マーガレットは階級間の調停役として人々の内面に介入し、一つの家族としてのミルトンに「Englishness」を構築することに寄与する。しかし、大団円の結末ではアイルランド移民の労働者問題が不問に付されるのである。

19世紀の産業小説を意識した『素敵な仕事』は、保守党が「ヴィクトリア朝的価値観への回帰」を政治的スローガンに掲げた1980年代の社会、教育、経済を検証するもう一つの「イングランドの状況小説」である。19世紀工業都市の工場経営者と労働者の問題、とりわけギヤスケルが吊りにした最下層非熟練労働者の問題は、世紀を超え、帝国主義の傷跡とも言える人種問題を抱えて、より複雑な様相を呈している。この小説が舞台とする工場と大学は、英国民としての「全体性」と、内的な差異を有する個人としての「部分性」を併せ持つ人々が暮らす社会を縮小した空間である。ロジはユーモアとリアリズムを融合させて、社会、文化、政治、経済のみならず、個人の心的構造にもヴィクトリア朝の遺産が影を落とす現実を明示するのである。

## シンポジウム Symposium

## ディケンズと現代作家たち

## Dickens and Contemporary Novelists

司会： 原 英一（東京女子大学教授）

Introduction by: Eiichi HARA

講師： 桑野 佳明（流通経済大学教授）

Lectures by: Yoshiaki KUWANO

斎藤 兆史（東京大学大学院准教授）

Yoshifumi SAITO

梅 正行（中京大学教授）

Masayuki TOGA

今回のシンポジウムは、梅正行氏が中心となって企画されたものです。梅氏の積極的な働きかけによって、桑野氏、斎藤氏という卓越した研究者をお迎えすることができました。

ディケンズが後の世代の作家たちに絶大な影響を与えてきたことは周知の事実ですが、私たちディケンズ研究家は20世紀以降の小説について、意外に無知です。キプリング、ナイポール、オクリといった作家たちは、アジア、カリブ海、そしてアフリカというポストコロニアル文学世界で活動するのですが、そこにディケンズはどのような形で息づいているのでしょうか。3人の講師は、いずれも事前に周到な原稿と充実したハンドアウトを準備していただき、実に刺激に満ち、豊かな内容によって、私たちに大いなる勉強の機会を与えてくれました。とくに若手のディケンズ研究家たちには、今後の新たな研究の方向についての示唆に富んでいたものだったことでしょう。このシンポジウムを契機として、ディケンズ研究が20世紀文学にまで拡大していくことが大いに期待されます。

(原 英一)



### ‘Two Lives’

—C・ディケンズとR・キプリング—

‘Two Lives’: C. Dickens and R. Kipling

桑野 佳明 (流通経済大学教授)

Yoshiaki KUWANO

(Professor of Ryutsu Keizai University)

桑野先生の発表では、ディケンズとキプリングとの関わりがあらためて明らかにされました。それと同時に、ディケンズの後継者ともいべきこの大作家の再評価が強く求められていることを痛感させられました。(原英一)



### ディケンズ vs ナイポール

Dickens vs Naipaul

斎藤 兆史 (東京大学大学院准教授)

Yoshifumi SAITO

(Associate Professor of the University of Tokyo)

ナイポールの伝記や回想録を読むかぎり、彼がディケンズの影響の下で小説を書き始めたことは自然の流れのように見える。しかしながら、やはり彼の回想録によれば、どうやら彼は故郷トリニダードや旧植民地、あるいは第三世界には、ディケンズが描いたような都会の文化や歴史がないことに失望したらしい。最近の彼のディケンズ批判は、開き直りともとれる作風の変化と見事に呼応している。

アザロの到着地にいたのは、

われわれのほうだった

—C・ディケンズとベン・オクリ—

We Have Been in the Destination of Azaro:

C. Dickens and Ben Okri

榎 正行 (中京大学教授)

Masayuki TOGA

(Professor of Chukyo University)

\* この講演については 80-98 ページの特別寄稿論文をご覧ください。



## 懇 親 会

今大会は、名古屋という土地の特殊性か、非常に懐かしい方や大変珍しい顔ぶれにお目にかかることができました。

大会の後は学内の「エルバ亭」での懇親会。いつものようにフェロウシップ精神の横溢する会でした。その後、名古屋中心部の栄に移動しての二次会、さらには？次会まで、歓談は尽きることなく続きました。







C・ディケンズとB・オクリ  
——アザロの到着地にいたのは、われわれのほうだった——  
C. Dickens and Ben Okri:  
We Have Been in the Destination of Azaro

梶 正行  
Masayuki TOGA

I. はじめに——青いサングラスと亀

ディケンズの愛読者はベン・オクリの作品世界に入ることができるか否か、これを試すため、オクリの最高傑作『飢えたる道』からひとつの挿話を引くでしょう！主人公の少年アザロの母の語るスケールのおおきな話だ。母の話を息子アザロは「青いサングラスの話」として記憶している。アザロは、アザロを守るための精霊との闘いに疲れた父が長い眠りにについている間、母に「青いサングラスの話」をしてくれとせがむ。

母は行商をしている。母が行商で通りを歩き、十字路に来ると、亀が茂みからでてきて何か言う。母がそれを聴き取れぬまましていると、今度は、白人が現れ母に「どうすればアフリカから出られるか教えてくれたら青いサングラスをあげる」とたずねる。母は白人に、その前に亀がなんといったか教えてと言う。白人はわからないと言い、自分は10年この土地にいて、7年政府の仕事をし、国の独立を機に、3年間、アフリカから逃げる道を探していると言う。飛行機に乗っても、それは世界をぐるりとまわり、降りてみると、もとの場所に戻っていたとも言う。その後、バスが通り、その横腹に「すべてのものはどこかでつながっている」と書いてあり、母はそれが亀のいったことだと直感する。白人の男は「アフリカから出る唯一の道は、自分のなかからアフリカを取り除くことだ」と言って立ち去る。

別の日、母は市場でヨルバ族の男に「私を覚えていないか」と声をかけられる。



「500年前に会ったじゃないか」。男はついに道を見つけたといい、最初にあった日から後のことを語り始める。男は、アフリカ人の召使を殺し、独房に入り、釈放され、道を裸で歩き回った。500年が経ち、「アフリカから逃げる唯一の道はアフリカ人になることだ」と知ったのだと続ける。男は、飛行機でイギリスに行き、結婚し、子供をもうけ、政府の仕事をやめ、70歳前に心臓発作でなくなった。時が流れ、また生まれ、ビジネスマンになり、アザロの母に今こうして市場で会ったと言う。母はまだ2週間しか経っていないと男に言う。

『西アフリカの小説におけるマジックリアリズム』の著者ブレンダ・クーパーによると、亀はアフリカの知恵を指し、サングラスは西洋の科学を指すという。ここに、生まれ変わるというアピクの要素が加わる。時間は直線的に進まず、男の500年と母の2週間が同じ扱いを受ける。マジックリアリズムということになれば、白人の男がヨルバ族の男に生まれ変わるということと、時間が直線的に進まぬことについては、そういうものとして、納得するしかない。亀がアフリカの知恵ということも、サングラスが西洋の科学ということも、説得力をもっている。男が最初に飛行機に乗ったときなぜ元の場所に戻り、二度目に飛行機でイギリスを目指したときなぜイギリスに帰れたのかも、マジックリアリズムだからといわれれば、返す言葉もない。これが絶頂期におけるベン・オクリの世界だ。

## II. ベン・オクリの半生と作品

しかし、この世界を楽しむには、若干の散文的事実を確認する必要がある。ベン・オクリは1959年3月15日、ナイジェリア中央部ミンナに生まれた。父シルヴァーはナイジャー川ワリ近郊出身のウルホボ人、母フェイスは中西部出身のイボ人だ。翌1960年、ナイジェリアはイギリスから独立する。1961年、父シルヴァーが渡英し、のちに家族が合流する。1964年9月、ベン・オクリはロンドン、ウッズ・ロードのジョン・ダン小学校に入学する。翌1965年、ベン・オクリ一家はナイジェリアに移り、ベン・オクリはワリ北部のチルドレンズ・ホーム・スクールに転校する。ベン・オクリは少年としてビアフラ戦争を体験することになる。

1975年、ベン・オクリはヨルバ・コレッジ卒業し、ロンドンに渡り、ラゴスを舞台とする『花と影』の執筆を開始する。一九七八年、ベン・オクリはロンドン、ニュー・クロスのおじの住居に寄宿する。以上が作品を書き始める前後までのベン・オクリの生活だが、そこから現代までの作品を確認しておく次のようになる。

- 1989年 『花と影』（アザロものとして再編）  
 1982年 『内部の風景』（『危険な愛』として再編）  
 1986年 『神殿での出来事』（短編集）  
 1988年 『新たなる戒厳令下の星空』（短編集）  
 1991年 『飢えたる道』（邦訳『満たされぬ道』，精霊の少年アザロを主人公とする小説）  
 1992年 『アフリカン・エレジー』（詩集）  
 1993年 『魅惑の歌』（アザロを主人公とする小説）  
 1995年 『見えざる神々の島』（イタロ・カルヴィーノ風の不思議な島の話）  
 1996年 『天空の鳥』（評論集），『危険な愛』（画家オモヴォを主人公とする小説）  
 1997年 『自由になる方法』（評論集）  
 1998年 『無限の富』（アザロを主人公とする小説）  
 1999年 『メンタル・ファイト』（詩集）  
 2001年 『アルカディアにて』（アルカディアを主題にドキュメンタリー映画を撮るグループの人々のアルカディア観）  
 2007年 『スターブック』（ある王子の物語）  
 2009年 『自由をめぐる話』

遠い過去のほうが、近い過去よりも、近く見えることがある。ディケンズの世界のほうが、ベン・オクリの世界より、あたかも近いかのように。あるいはディケンズの世界のほうが、文京区本郷のあたりを歩いて行き当たる樋口一葉の井戸や徳田秋声の旧居跡より、あたかも近いかのように。われわれ読者は、自分の好む作家に対しては、主観的な距離をかぎりなく縮めてゆく。

### III. リアリズムとマジックリアリズムの間の往還

ベン・オクリでは、いわゆるマジックリアリズム、つまり時空の制約に囚われぬ小説手法が問題になる。以下の表は、リアリズム的作品とマジックリアリズム的作品を分類し、作品の舞台をそえたものだ。（カッコ）内の数字は、発表年代を示す。

表1 ベン・オクリの作品

リアリズム的	マジックリアリズム的	リアリズム的	マジックリアリズム的	詩集	評論
ナイジェリア	ナイジェリア	ロンドン, パリなどヨーロッパ	具体名のない「島」や「王国」		
			『スターブック』(07)		
		『アルカディアにて』(01)			
				『メンタル・ファイト』(99)	
	『無限の富』(98)				
					『自由になる方法』(97)
『危険な愛』(96)					『天空の鳥』(96)
			『見えざる神々の島』(95)		
	『魅惑の歌』(93)				
				『アフリカン・エレジー』(92)	
	『飢えたる道』(91)				
『新たなる戒厳令下の星空』(88)					
『神殿での出来事』(86)					
『内部の風景』(81)					
『花と影』(79)					

オクリはナイジェリアを舞台とするリアリズム的作品から出発した。そこから91年のマジックリアリズム的作品『飢えたる道』に向かう。その続編が『魅惑の歌』と『無限の富』だ。

『魅惑の道』の次には『見えざる神々の島』が来る。これはイタリアの作家イタロ・カルヴィーノの『見えない都市』を連想させる作品で、ナイポールの『到着の謎』にもつながる作品だ。『見えざる神々の島』の特徴は、舞台がこの世ならぬ島であることだ。確認しておきたいのは、オクリがその後、『危険な愛』というリアリズム作品よりはじめ、三部作の第三部『無限の富』を経て、現代

小説『アルカディアにて』をはさみ、『スターブック』という、これも、どことわからぬ世界を舞台とする作品を書いた点だ。

オクリは二度、リアリズムの世界からマジックリアリズムの世界へと作風を変えたことになる。

#### IV. 「差し引いて読む」ことと「付け足して読む」こと

マジックリアリズム世界に入るには、やや覚悟がいる。一般にある作品世界に入っていきけるか否かについては、読者の側に、「差し引いて読む」という姿勢と「付け足して読むこと」という姿勢が必要だ。

「近代」という言葉がある。ディケンズは近代の作家である、『荒涼館』の作品世界は近代的である、と、飛行機や自動車とかれらが無縁であったとしても、また、ヴィクトリア朝の後にモダニズムが来ると知っていても、われわれはそう言うことができる。

また一方、ナイポールという作家が育ったトリニダードは、近代化の途上にあった、しかしナイポールはそこを去って、イギリスという近代世界に入り込んだ、その代表作『ビスワス氏の家』はプレモダンの世界を描いたとも言える。すると近代あるいはポストモダンに在るわれわれ21世紀のディケンズの読者は、オクリやナイポールの一見プレモダンと見える世界を読むときには、われわれがすでに持っている近代から、少し何かを「差し引いて読む」ということが必要になる。

反対に、オクリの世界の「精霊」に接するためには、われわれの世界には「精霊」はいないので、「付け加えて読む」ことが必要になる。こうして、われわれは「差し引いたり」「付け加えたり」しながら、作品を読む。「近代」、「大学」、「精霊」などさまざまな用語に関し、一度、複数の作家の問題意識、また彼らの作品を読むときの、われわれ読者の「差し引き」「付け加え」具合を検証してみる必要がある、実はある。また、たとえば、岩波新書のノーマ・フィールド著『小林多喜二』を開いてみたくなるのは、われわれとは別の意味での、この著者による「差し引いたり」「付け加えたり」を見てみたいからであろう。これを時間軸や地域差の点からではなく、ジェンダーの点から眺めると、男性読者である自分は、オースティン、ギャスケル、エリオット、ブロンテ姉妹を読むときに、何を「差し引き」、何を「付け加える」べきかも、見えてくる。

こうした用語の中で、ここでは三人の作家、とくにオクリを見ていくのに便利な言葉として、「道」を選ぶとする。ロードだ。

V. 道の作家たち

道の作家たちと名づけてみたくなる作家たちがいる。オクリに先立つ道の作家の作品を、その移動の主体と出発地と到着地に関しまとめると、以下のようになる。

表2 道の作家たち

作家	作品	出発地	道	到着地
ディケンズ	『オリヴァー・トウィスト』			
ディケンズ	『大いなる遺産』のウエミック	ジャガーズの事務所	ロンドンの道	父と婚約者の待つ家
ディケンズ	『荒涼館』のリチャード	荒涼館	さまざまな住居（ただし横着なりチャードは道を歩かない?）	裁判所に近い住居
キプリング	『キム』のキム			
チュツオーラ (精霊というオクリ的要素)	『やし酒のみ』	父の農園	森の中の道	やし酒つくりのいるところ
アチェベ (アビクというオクリ的要素)	『崩れゆく絆』	父の村（英雄）	母の村（七年間）	父の村（自殺）
ショインカ (道というオクリ的要素)	『ロード』	イバダン→ラゴス ラゴス→イバダン 芝居の演出のために車で往復	The right foot for joy, the left, dread And the mother prayed, Child May you never walk When the road waits, famished.	
ナイポール (道に住む人々)	『ミゲル・ストリート』の少年	ミゲル・ストリートにある母の家	ミゲル・ストリート	ロンドン
ナイポール (帰郷の航路)	『ミドル・パッセージ』のナイポール	イギリスから逆方向の旅に出る（帰郷）	航海。乗船者を克明に描写	トリニダードと四つの地域
ナイポール (不毛なドライブ)	『自由の国で』 『自由の国で』とロッシュ	会議会場の首都	アフリカの道	勤務地

ナイポール（ブジョーで東から西に道をたどるサリム）	『暗い河』のサリム	アフリカ東海岸	ブジョーでアフリカの道を東から西へ（『闇の奥』のマーロウと逆方向）	キサンガニ（そしてロンドン）
ナイポール（ナイポールが道をたどり到着した場の克明な描写）	『到着の謎』の私	トリニダード	世界中の道の旅	ウィルトシャー
ナイポール（トリニダードを出て、棺に入れられトリニダードに戻ったブレアの話など）	『世の習い』のブレア	トリニダード	アフリカ（ブレアのたどった具体的道の記述なし）	トリニダード（埋葬）、ブレアの無言の帰郷に自分を重ねるナイポール（キャリル・フィリップス説）

オリヴァーは、どこからどこへ行くのか？『大いなる遺産』のウェミックは、ジャガーズの事務所を出発し、ロンドンの道を歩き、顔の表情を和らげつつ、父と婚約者の待つ奇妙な家に到着する。『荒涼館』のリチャードは、荒涼館という家から、あちらこちらの住居を転々とし、裁判所近くのフラットで息絶える。

ナイポールについても、同様の確認ができる。彼の描く数ある移動から、ひとつ選んで紹介するとすれば、『世の習い』のブレアという男の旅が暗示的だ。トリニダードを出て、アフリカに渡り、ある政府の顧問となり、そこで殺され、トリニダードに帰郷する。それをナイポールは淡々と描くが、次の瞬間、ナイポールの、そして読者の背筋が寒くなる。ナイポールがブレアの姿に自分を重ね合わせていることが読者に伝わるからだと同じカリブ海出身のキャリル・フィリップスは述べている。

オクリとの関係で、ナイジェリアの重要な作家を三人あげておく。「精霊」という要素を入れて『やし酒のみ』という作品を書いたナイジェリア文学の父チュツオーラ。役所務めなどをしながら小説を書いていたが、本当になりたかった職業は、鍛冶屋だった。『大いなる遺産』のピップが聞いたらどう思うか？日本の読者が、イギリスの小説を読むときと、カリブ海の小説を読むときと、インドの小説を読むときと、アフリカの小説を読むときでは、「差し引いたり」「付け加えたり」するものも違ってくる。しかしその違いは、当然、これら地域それぞれの組み合わせの作家対読者にも成り立っているので、イギリス文学



とわれわれ日本の読者との間に一本の道をつくって往復するという事は、最近ますます困難になっている。

アチェベの『崩れゆく絆』には、アビクという両親のもとに生まれては死に、また生まれては死に、を繰り返す子供にまつわる挿話が出てきて、その描写はオクリより克明なので、オクリ世界の理解に役立つ。ショインカには、オクリの『飢えたる道』の靈感源がある。

さて、われわれは「近代」にどっぷりとつかっている。ノーマ・フィールドが著書『小林多喜二』のプロローグで、二人称をつかい多喜二に語りかけるときの言葉を借りれば、「私自身、中産階級の生活にしがみついてきましたし、今後も、絶対に、手放したくないと思っています。それはもちろん物質的なことを意味していますが、尊厳の問題でもあります。残念ではありますが、中産階級と称される物質的条件なしには、人間としての尊厳が確保されない社会に生きているからです」ということになる（12頁）。<sup>3</sup>アフリカの作家を読むとは、それ自体を読むことではなく、われわれの社会、つまり近代社会を読み解く手立てとして、これを読むことにもなる。

実は、近代は一度これを行い、やや成功し、味をしめている。山口昌男やレヴィ・ストロースを読むことによって。

## VI. ベン・オクリ主要作品の道

オクリの世界で、道はどうなっているのかをまとめたのが表3だ。その作品世界に入るには、21世紀のディケンズ愛読者は「差し引く」のか「付け足す」のかを考え、作中人物、出発地、道、到着地を確認し、まとめた。オクリで大事なものは、作中人物が到着地あるいは目的地に着かなかつたり、着いても出発地に戻ったり、その間を往還するという点だ。ここがナイポールと違う。

表3 オクリの作中人物はどこにたどりついたか？

作品	作中人物	21世紀の日本のディケンズ読者の姿勢	出発地	道	到着地	備考
「橋の下の笑い」 『神殿の出来事』	一人称の語り手「ぼく」、父、母、少女モニカ、兵士たち	差し引いて読む（近代化以前のナイジェリア）	寄宿学校（少女時代のモニカの記憶）	戦場の道 兵士に連れ去られる人々	父、母、モニカがいる町	モニカも最後に兵士に連れ去られる
「飢えた道」	アザロ、父、母、マダム・コト、写真屋、家主、精霊の王、精霊たち、イエロー・ジャガー、グリーン・レバード、黒猫、借金取りたち、白い服の男、貧乏党员、金持党员	付け加えて読む（読者は精霊の世界を想像して作品を読む）	精霊の世界の偉大な王のいる精霊の国	森の中の道 工事現場	父、母のいる一部の住居。ベッドとテーブルと椅子とマット。炊事場とトイレは共同。	アザロの到着地にいたのはわれわれだった
「魅惑の歌」	「飢えた道」に同じ	付け加えて読む（読者は精霊の世界を想像して作品を読む）				

『見えざる神々の島』	一人称の語り手「ぼく」、さまざまな声の持ち主、女の師、第二の師、第三の師	非リアリズム世界	故郷（はじめは羊飼いになろうとした）	海という道の七年間の航海	見えざる神々の島	イタロ・カルヴィーノの『見えない都市』、ナイポールの『到着の謎』につながる。
『危険な愛』	オモヴォ、イフィー、ドクター・オコチャ	差し引いて読む（近代化以前のナイジェリア）	故郷	街の迷路でイフィーを追うその後、故郷を離れる	故郷に戻りイフィーの死を知る	イフィーの死後、絵を描くことで情熱を昇華、恋愛を描くことの不得手なオクリ
『無限の富』	『飢えたる道』に同じ	付け加えて読む（読者は精霊の世界を想像して作品を読む）				
『アルカディアにて』	ドキュメンタリーの撮影クルーたち	アルカディアの探求の現代小説	倦怠感漂う日常生活の場ロンドン	一行を乗せた列車がたどる鉄の道	ギリシャ、アルカディアに至らず、スイスに向かう途上で終わる	作中人物それぞれのアルカディア告白
『スターブック』	王子、王、乙女	非リアリズム世界	宮殿	森の中の道	森で出会った乙女との結婚	恋愛を描くことの不得手なオクリ

「橋の下の笑い」は内戦が起こり、寄宿学校から主人公の少年が母と一緒に、父のいる町に戻るといふ作品だ。途中、検問が百もあるような道を経て、やっと家族再会をはたす。寄宿学校で主人公の少年が思い描いていた幼友達の少女モニカとも、故郷で再会する。ところが、その後、ある事件をきっかけに少女は兵士に連れ去られる。

モニカはまだ主人公の少年が幼いころ、川で男の子たちと水泳の競争しおぼれかかったことがある。泥の中から引き上げられたモニカ。

モニカの顔は青ざめていた。まるでモニカが自分の体から長い旅に出たかのようにだった。（「橋の下の笑い」『神殿の出来事』）<sup>4</sup>

この、体からモニカがどこかに長い旅に出たようだという考え方が、オクリにはあり、それが、さまざまな作品で、変奏的に現れる。

## VII. 『飢えたる道』

モニカの現実からの旅立ちを踏まえ、その逆の方向の移動について考えてみると、『飢えたる道』のアザロの移動が見えてくる。『飢えたる道』はこう始まる。

初めに川があった。川は道になり、道は枝分かれして全世界に広がっていった。道はかつて川だったから、いつも飢えていた。

その始原の地では精霊たちが、生まれる前の子供たちとまじりあって暮らしていた。

[中略]

ぼくたちの幸せが大きくふくらむにつれて、生まれるときが近づいてくる。そしていよいよ生まれかわるときがくると、最初の機会をとらえてこの精霊の世界に戻ってくるという約束をする。

[中略]

その誓いを立てた者は、生者の世界で「アビク」、つまり「精霊の子」と呼ばれる。人間がみんなぼくたちに気づくというわけではない。（『飢えたる道』、原文3頁、翻訳上巻9-11頁）<sup>5</sup>

アザロはアビクだ。アビクは同じ親のもとに何度も生まれ何度も死ぬ。『飢えたる道』と舞台と作中人物をまとめると以下のようになる。

表4 『飢えたる道』の舞台と作中人物

	精霊の世界 始原の世界 死者の世界	現実の世界 生者の世界
場（舞台）	森 森のなかの道 川 七つの山	街 人の住む場の道 市場 母の屋台 アザロの通う学校 父の働く集荷場 建設現場 空き地 鉄塔 高速道路の始点
人または精霊 （どちらか一方の世界の住 人と決め付けることが困 難な作中人物多数）	精霊 道の神 道の王 偉大な王者 黒猫 グリーン・レパード（父 の対戦相手） イエロー・ジャガー（父 の対戦相手、精霊の世界 からやってきたボクサー） 白い服の男 エイド（アザロの親友） 少女 雨の女王	アザロ 父（ブラック・タイガー） 母 マダム・コト 写真屋 家主 借金取り 金持党員たち 貧民党員たち 薬草医

アザロは、精霊の世界からを出発し、森の道を通して、現実の世界、今の両親の世界に到着した。アビクの仲間との約束では、アザロは現実世界で死に、精霊の世界に戻らなければならない。アビクの仲間たちはさまざまなかたちに姿をかえ、アザロを連れ戻そうとする。

そこでアザロの両親は、アザロを奪おうとする精霊に敢然と立ち向かう。父親は、道路建設資材の集荷所で、荷運びをしているが、やがてボクサーとなり、次々に相手を倒す。母親は、精霊に呼ばれても、いっちゃだめとアザロを諭す。

この作品の世界では、人も精霊も、道をつくっている。その建設途上の道は、できあがりつつあるすべてのもの、場合によってはこの小説自体すら表わしている。

アザロには放浪癖があり、ひとりであちらこちらをさまよう。すると人が道をつくっている現場に出る。

ぼくはどこにいけばいいかわからず、通りをあっちにいたりこっちにきたりしていた。あたりにはネズミの焼けるにおいがまだ強烈に残っていたので、森のまわりを歩いてみた。そこを歩いていた何本もの小道はもう太い通りになっている。ぼくは長いこと散歩するうちに突然、別の世界に飛びこんだ。まさかこんなところがあるとは思ってもみなかった。その世界では森は征服しつくされ、残っているのは木の切り株と、にじみ出る樹液だけだ。大地から何本もの木の柱が突き出っていて、電線が空を走って、地面のケーブルまでのびている。（『飢えたる道』、原文 277 頁、翻訳下巻 18 頁）

これはアザロの目撃した人間の手になる工事現場だが、精霊も道をつくっている。父親と息子アザロは精霊の道路工事を目撃する。父親が連中は「二千年の間ずっと道をつくっている」というと、息子は「なぜ」と問う。高いところに登っていくと、すばらしい人々の世界があり、道をつくれれば、かれらに会えるからだと言は答える。

「おそらく、道が完成してしまうと、もうすることがなくなり、夢が消えて、未来もいらなくなってしまうからだろう。完成してしまえば、退屈のあまり、滅びるしかない。道は、連中の魂なんだ。その魂は、連中の歴史そのものなんだ。だから、道がかなりできてしまったり、連中が予言をわすれかけて道が完成したと思いきみそうになると、いろいろなことが起こる」（『飢えたる道』、原文 329-33 頁、翻訳下巻 107 頁）

なにがおこるかという、地震、雷、噴火、洪水、台風などで、「道は怒り、身をよじって、自分で自分をこわして」しまう。

こういう両親だから、かれらが息子に話す話も尋常ではない。あるとき、ついに、父親は、飢えたる道とは何かというヒントとなる話、つまり「道の王の話」をアザロにする。「道の王」とは巨人だ。いつも腹をすかしている。人々に食べ物を求め、しまいには人々も食べてしまう。そうして食べ物がなくなると、ついに自分の体を食べ始め、自分の胃袋だけが残る。その夜、雨が降り、雨は胃袋を溶かす。雨は七日間続き、胃袋が消え去る。しかし、と父親は続ける。

「道の王が地面の下からうなる声は聞こえてきたらしい。こうして、道の王はこの世界のあらゆる道の一部になったというわけだ。道の王はいつも飢えている。そしていつまでも飢えているだろう。だからこの世界で、いろいろな事件が起こるんだ」（『飢えたる道』、原文 258-59、翻訳上巻 432 頁）



『飢えたる道』はボクシングの試合のあと長い眠りについた父親が覚醒ののちに語る壮大な作品で幕を閉じる。父は目を覚ますと、妻と息子アザロに、夢の内容を話しだす。それはひとつのヴィジョンを構成しており、モダン世界、あるいはポストモダン世界の住人であるわれわれにも大きな衝撃を与える。

自分自身を、今までとは違う目でみなくてはならない。[中略] われわれの飢えは世界を変えることができる。[中略] すべての道は死に通じているが、何本かは、決して終わることのないものへと通じている。素晴らしいものへと。(『飢えたる道』, 原文498頁, 翻訳下巻387頁)

ありふれた話のようであり、作品をここまで読んでくると、けっしてそうは思えない、そのように、この小説はできている。闘う父、眠り込む父、起き上がって話をする父。結末は、それまでの劇的な展開とは裏腹に、彼らのひと部屋のアパートが舞台となる。父の話をして満足したアザロ少年は、今日は床に、マットを敷いて寝る。ベッドの上の父と母の話し声が聞こえる。

オクリは、マジックリアリズム小説をさらにつきつめたような『見えざる神々の島』を書く。これは、『飢えたる道』の世界をある意味で解説しているが、からくり倒れに終わっていないわけでもない。それに気づいたのか、『危険な愛』という作品でリアリズム小説に回帰する。ただし、恋人を内戦で殺され、その喪失感を克服するために絵という芸術創造に向かうという設定は、短編「橋の下の笑い」を越えるところまで行っていない。

### VIII. 『アルカディアにて』

そうした安易さは2001年発表の『アルカディアにて』まで続く。この作品は、『飢えたる道』のオクリという作家を、反対の方向から説明する。『アルカディアにて』は、アルカディアとは何かを探求するドキュメンタリー映画の製作に加わったオクリの実体験に基づく作品だ。アルカディア探求というテーマは、人から与えられた。撮影クルーは全部で八人。それぞれが担当を持ち、当時のことなので、ウォータールー駅からパリに向かう。彼ら八人に指令を出しているのはマラッソという人物で、姿を現さない。次に何をすることも場当たりのところがあり、結局、列車の運転士ルークの家に呼ばれ、彼のアルカディアともいべき小さな庭を見学する。そうして仕事の内容への関心が一同に高まってきたところで、パリのイタリアン・レストランで、八人が、それぞれのアルカディアについて語る。ラオが呼び水として「一冊の本」、「ある曲」、「ひとつの顔」、「一枚の写真」、「ひとつの風景」、「恋人」、「都市」、「家」、「土地」、「儀式」、「道」、「存在のありよう」といったアルカディアの例を示す。月並みと言えば月並み、

さらに深めることができるといえばそう、というなかなか微妙な導入だ。

これに誘われて、メンバーが次々にかれらのアルカディアを語る。プロブルは金、サムは探求行為、ジュートは仕事、ジムはグルに学ぶこと、ハスクは愛、ライリーは夏の海で泳ぐこと、主人公とおぼしきラオは死を意識しての生。当然のことながら、みなこれで終わりではないと感じ、さらにアルカディア探求を続け、権力者のアルカディアであるヴェルサイユ宮殿を、やや興奮ぎみに見学する。宮殿見学後、かれら一同、靈感を経験し、夢を見る。その後、ルーブル美術館に行き、ニコラ・プッサンの絵を見る。そしてラオと館長の対談が続く。話はここで終わり、本来の旅の目的地であるはずのギリシャ、ペロポネソス半島まで、話は持たない。

作中人物たちのアルカディアをまとめると以下のようなになる。

表5 それぞれのアルカディア

『アルカディアにて』の作中人物	職業 撮影旅行での担当	それぞれがパリのイタリアン・レストランで語ったアルカディア
プロブル (男性)	機材	金
サム (男性)	カメラマン	探求行為
ジュート (女性)	経理	仕事
ジム (男性)	監督	グルに学ぶこと
ハスク (女性)	オーガナイザー	愛
ライリー (女性)	アシスタントカメラウーマン	夏の海で泳ぐこと
ラオ (男性)	インタビューアー	死を意識しての生
ミスルトウ (女性)	ラオの友人、画家	旅、絵を描くこと
マラッソ (男性)	企画全体を統括する謎の人物、作品に姿を見せず	不明
ルーク (男性)	ユーロスターの運転士	パリ郊外の小さな庭
オデッサ (女性)	ルークの妻	ルークと同じ
ルーブル美術館の館長	美術専門家	だれもいない博物館 (陳列物を独占)

主人公のラオにとってのアルカディアは、死を意識しての生、といったところに落ちていたかに見える。友人のミスルトウが絵を描くというのも、『危険な愛』につながりそうだ。

## IX. 小説の力—アザロ三部作と『アルカディアにて』

『アルカディア』ではアルカディア探求と言って、読者を期待させておいて、結局は、少々の理屈、あるいは思索と、絵を描く異性の友人とのゆったりとした時間、というのでは、物足りない。

オクリは、『アルカディアにて』で小説の力というものを放棄し、説明に走

った。アザロ三部作と『アルカディアにて』を比較対照してみよう。

表6 手法の異なるふたつの作品

	『飢えたる道』、『魅惑の歌』、『無限の富』	『アルカディアにて』
主人公	七歳のアビクの少年アザロ	思索的な男ラオ
移動	往還的	直線的
目的地	現実世界（父と母のいる場）	死を意識した上で現実を生きたること
ジャンル	小説的	非小説的
時代設定	プレモダン	ポストモダン
大学	いまだ父の壮大な夢の中にしかない	倦怠
道	具体的	やや抽象的（ユーロスターの走る線路）
入れ子構造	父の語る「道の王」の話 母の語る「アフリカを出る一本の道」の話	作中人物たちのアルカディア観 ウェルギリウスとブッサン 美術館長とラオの対談
ディケンズとの関係	ディケンズ的	非ディケンズ的

アフリカ、ナイジェリアに生まれたひとりの作家ベン・オクリが、『飢えたる道』を含む三部作という『オリヴァー・ツイスト』的作品を書き、イタロ・カルヴィーノの『見えない都市』の影響を受けたと思われる『見えざる神々の島』を書き、ポストモダンの倦怠に満ちた探求物語『アルカディアにて』を書き、昔話にも似た『スターブック』を書いた。

しかし、オクリ作品を、「差し引き」、「付け加え」読んだ結果、ディケンズ愛読者の心に残るのは、『飢えたる道』を含む三部作だ。

なぜか？そこには少年の主人公の世界認識のプロセスが小説的に描き出されているから、それが近所のいくつもの道を歩くという行為と重なっているから、道はやがて具体を越え、歴史や生といったさまざまな意味を暗喩的に担うから、時代設定がプレモダンからモダンに向かう小説にとっては絶好の時期であるからだ。

それに加えて、『飢えたる道』では、少年の旅の到着地が、現実世界の日常であるから、という理由が加わる。

少年の旅の到着地にいたのは、実はわれわれのほう、現実世界の住人であるわれわれのほうだった。

さらにその道は、出発地と到着地をただ結ぶものではない。道はそこを通るものを食べてしまう。人を通すという本来の役割を放棄する。

首都と地方を結ぶ道、首都と旧宗主国首都を結ぶ空路、そうした近代の道が一方にあり、もうひとつ、オクリの世界には、人を食う、別の意味でおそろし

い道がある。

『飢えたる道』以下三部作と『アルカディアにて』を比較すると、前者のほうが優れた小説と言える。また前者はディケンズ的であると形容できる。

すると今度は、ディケンズの作品とオクリの作品のどちらがすぐれているかと問いかけてみたい誘惑にかられる。こう問いかける者は、新旧論争もどきの結論の先延ばしという深みに足をとられることになりかねない。オクリはディケンズの肩に乗っている、したがってディケンズのほうが優れている。いや、その優れたディケンズの肩に乗っているのだからオクリのほうが高みにいる。どちらが本当なのか。ただ、はっきりしているのは、オクリであれ、オクリに先行する作家たちであれ、ディケンズ愛読者が楽しむことのできる現代小説には共通点がある。

劇的変貌の途上にある社会のなかの人物造型をしているという点だ。プレモダンからモダンに向かう社会における主人公（少年・少女）の認識深化の過程というものがテーマであるかぎり、それを描こうとする作家はいかなる時代のいかなる地域の作家であれ、ディケンズを意識せざるをえないところがある。まずプレモダンからモダンへの移行期の現実がある。詩人や作家がそれを肌で感じ取る。それを作品で表現する。やがて一般の人が芸術家の表現を共有する。そして現実にあった制度を整備し始める。社会のそのような段階に、それぞれの地域の作家たちはディケンズを意識しつつ、自分の社会の実情に合った表現を世にとう。

そうであればこそ、われわれは、ナイポールの『ビスワス氏の家』に、シヴァ・ナイポールの『潮干狩り』に、ベン・オクリの『飢えたる道』以下の三部作にディケンズの影を見る。

## X. 先行作家の呪縛

では、ディケンズの影響を受けたあと、作家たちはどのように自立を達成するのか？ つまり、独立するのか？冒頭で触れたアザロの母の語る、スケールのおおきな話を筆者なりに敷衍することで、このあたりの問題を考えるきっかけを提示したい。「アフリカから出る唯一の道は、自分のなかからアフリカを取り除くことだ」という言葉と、「アフリカから逃げる唯一の道はアフリカ人になることだ」という言葉は、なにを意味するのか？

これはおそらく、自分に決定的な影響をもたらしたものからいかに逃れられるか、という問いに一般化できる。たわむれに、われわれとしては、「ディケンズから出る唯一の道は、自分のなかからディケンズを取り除くことだ」と言い換えてみることも可能だ。小説を書くというレベルで、オクリはディケン

ズの影響を受け、さて、そのディケンズから出る唯一の道はないかと探し求めたのかもしれない。その答えは、「自分のなかからディケンズを取り除くこと」かもしれない。しかし、オクリはもうひとつの道を選んだ。「ディケンズから逃げる唯一の道はディケンズになることだ」という答えだ。

先行作家から影響を受ける。やがてそこから逃れたいと意識し始める。自分のなかから先行作家を取り除く。しかし、それはなかなかむずかしい。ということであれば、その作家に一度なりきってみる。すると今度は、かえって自分というものが立ち現れてくる。そうやってオクリは新旧論争的アポリアを越え、ますます自由な創作行為に耽ることができるようになったのではないか？

以下は、ベン・オクリの『魅惑の歌』の最初、父親とアザロが、家出した母親を探す場面からの引用だ。

We searched for mum everywhere. [. . .] . No one had seen her and no one knew who we are talking about. [. . .] . Then he[dad] began wandering the confusing streets, the dirt tracks, the rough pitted road, turning down blind alleys, backstreets, rutted pathways, roads that curved on themselves, following what he imagined to be the secret trail that mum took when she went hawking her meager wares. How we wandered that day! The world seemed to be the nightmare of streets, a fiendish labyrinth of paths and crossroads devised to drive human beings mad, calculated to get us lost. The world seemed to be composed of recently invented byways and tracks and dirt-roads created by the endless desire of human beings of shortcuts that elongate journeys, roads that start to induce their own peculiar form of dreaming on the exhausted soles of the feet. There are demons lurking underfoot in all the streets of the world that love to take men on terrifying unintended journeys.<sup>6</sup>

こうした記述にいくつも出会うにつけ、たとえば、ディケンズの『リトル・ドリット』でアーサー・クレナムとミーグル氏が、ミス・ウェイドの住まいを探す場面などが立ち現れ、改めてオクリにディケンズを見ることから生まれる読書の複層性を強調したくなる。

## 註

<sup>1</sup> Ben Okri, *The Famished Road*. London, 1991.

<sup>2</sup> Brenda Cooper, *Magical Realism in West African Fiction*. London: Routledge, 2004.

<sup>3</sup> ノーマ・フィールド, 『小林多喜二』, 東京: 岩波書店, 2009年.

<sup>4</sup> Ben Okri, *Incidents at the Shrine*. 1986; London: Vintage, 1993.

<sup>5</sup> 翻訳は, ベン・オクリ, 『飢えたる道』(金原瑞人訳, 上下巻, 東京: 平凡社)を使用した.

<sup>6</sup> Ben Okri, *Songs of Enchantment*, London, 1993, p. 32.



# ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約

## Agreements, Japan Branch of the Dickens Fellowship

制定 1970 年 11 月 12 日

改正 2000 年 6 月 10 日

改正 2005 年 12 月 1 日

### 第 I 章 総則

第 1 条 (名称) 本支部をディケンズ・フェロウシップ日本支部と称する。

第 2 条 (会員) 本支部は在ロンドンのディケンズ・フェロウシップ本部の規約に則り、日本に住み、チャールズ・ディケンズの人と作品を愛する人々を以て組織する。

第 3 条 (所在地) 本支部は支部事務局を原則として支部長の所属する研究機関に置く。

(2) 支部事務局とは別に、財務事務局を、財務理事の所属する研究機関に置くことができる。

(3) 本支部の所在地の詳細については付則に定める。

### 第 II 章 目的および事業

第 4 条 (目的) 本支部はディケンズ研究の推進とともに支部会員相互の交流・親睦をはかることを目的とする。

第 5 条 (事業) 本支部は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 全国大会および研究会の開催。
2. 機関誌の発行。
3. ロンドン本部および諸外国の各支部と連絡を密にして相互の理解と便宜をはかること。
4. その他、本支部の目的を達成するために必要と認められる事業。

### 第 III 章 役員

第 6 条 (役員) 本支部に次の役員を置く。

支部長 1 名、副支部長 1 名、監事 1 名、財務理事 1 名、理事 若干名。

第 7 条 (役員の職務) 支部長は理事会を構成し、支部の運営にあたる。

(2) 副支部長は支部長を補佐する。

(3) 監事は本支部の会計を監査し、理事会および総会に報告する。

(4) 財務理事は、本支部の財務を管理する。

第 8 条 (役員の選出および任期) 役員の選出は、理事会の推薦に基づき、総会においてこれを選出する。

(2) 役員の任期は 3 年とし、連続 2 期 6 年を越えて留任しない。

(3) 財務理事の任期は支部長の在任期間とする。

(4) 役員に事故がある場合は補充することができる。その場合、補充者の任期は前任者の残任期間とする。

#### 第IV章 会議

第9条(議決機関) 本支部には議決機関として総会、臨時総会、理事会を置く。

第10条(総会) 総会は本支部の最高議決機関であり、支部長がこれを招集する。

(2) 総会は、役員を選出、事業の方針、予算、決算、規約の変更など、支部運営の重要事項を審議する。

(3) 総会の議決は出席会員の過半数による。

(4) 総会は原則として年に1回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。

第11条(理事会) 理事会は本支部の執行機関として支部長が随時これを招集し、本支部の目的達成上必要な事項を審議する。

#### 第V章 会計

第12条(経費) 本支部の経費は、会費、寄附金、その他の収入を以ってこれにあてる。

第13条(会費) 会員は、本支部の運営のため、別に定める会費を負担する。

第14条(会計報告および監査) 本支部の会計報告ならびに監査報告は、毎年1回、総会で行う。

第15条(会計年度) 本支部の会計年度は10月1日より翌年9月30日までとする。

#### 付則

(1) 本支部の支部長、副支部長、監事および財務理事は次の会員とする。

支部長	仙台市青葉区中山9丁目16番16号	原英一
副支部長	京都市北区小山下内河原町3番4号	佐々木徹
監事	広島市西区己斐中3丁目2番17号	植木研介
財務理事	上市市大石2丁目3番30号	中村隆

(2) 本支部の事務局は、仙台市青葉区川内27番1号、東北大学大学院文学研究科英文学研究室に置く。

(3) 本支部の財務事務局は、山形市小白川町1丁目4番12号、山形大学人文学部中村隆研究室に置く。

(4) 本支部役員の名、住所、所属研究機関に異動があったときは、この付則にある該当事項は、総会の議を経ることなく、変更されるものとする。

(5) この規約は2005(平成17)年12月1日から適用する。

\* \* \* \*

※ 会員にはロンドン本部機関紙(*The Dickensian*) (年3回発行) および支部『年報』(年1回発行)を送ります。

※ 会費の支払いは、郵便振替でお願いいたします。(振替番号00130-5-96592)

## 『年報』への投稿について

### 論文投稿規定

- (a) 論文は日本語、英語いずれも可（英文の場合は事前にネイティブ・スピーカーによるチェックを受けてください）。
- (b) 論文の長さは、原則として、日本語の場合は 14,000 字（400 字詰原稿用紙換算 35 枚）以内、英語の場合は 7,000 語以内とします。
- (c) 論文原稿（フロッピー・ディスクおよび清書原稿）の締切は 6 月 10 日（必着）。理事の審査（採・否・再提出）をへて受理・掲載します。
- (d) 投稿先は日本支部事務局宛。

### 論文の書式について

- (1) 書式の細部については、原則として、*MHRA Style Guide* (<http://www.mhra.org.uk/Publications/Books/StyleGuide/download.shtml>)、または *MLA Handbook* の第 6 版 (<http://www.mla.org/style>) に従ってください。最終的な書式形式は編集で統一します。
- (2) 註については、脚註ではなく、尾註を用いて下さい。
- (3) 文献表については、引用した文献を、論文の末尾に付けて下さい。
- (4) 日本語論文で欧米人名を「サッカー」などと日本語表記する場合には「サッカー (William Makepeace Thackeray)」とカッコ内に原語を表記してください。
- (5) デイケンズの著作・登場人物名については、日本語表記する場合でも、原語を示す必要はありません。示す場合は、上記 (2) に従って一貫して表記してください。
- (6) 数字については原則としてアラビア数字としてください。(例:「一九世紀→19 世紀」,「一八一二年→1812 年」。ただし、「一人や二人」や「一度や二度」などは例外とします。) 章分けにはローマ数字を用いることができます。
- (7) 原稿は可能な限り、電子メールの添付ファイルにて、支部長宛にお送りください。
- (8) 手書き原稿の場合は、清書原稿 3 部（コピー）を提出してください。

### 論文以外の随筆、書評、ニュース等

- (1) 締切は 7 月 31 日です。支部長または年報担当補佐宛に提出してください。
- (2) 書式については、論文とは異なり、原則として著者の自由です。ただし、数字表記については論文と同様アラビア数字とします。
- (3) 長さは自由。ただし、原則として、最長でも 8,000 字（400 字詰原稿用紙換算 20 枚）を超えないようにしてください。写真の添付も自由です。
- (4) 編集上の都合により採用できない場合もあります。また、編集担当者の責任で内容を大幅に編集する場合があります。あらかじめご了承ください。
- (5) 提出にあたっては、清書原稿 1 部のほか、論文の場合と同様の要領により、ファイルの入ったフロッピーを添付してください。電子メールで提出していただいてもけっこうです（電子メールの場合は清書原稿とフロッピーは不要です）。手書き原稿の場合は清書原稿 1 部のみを提出してください。

※ 論文・一般記事等を問わず、すべての原稿に「英文タイトル」と「著者名のローマ字表記」を必ず付記してください。

## 追悼 伊藤廣里教授

(実践女子大学名誉教授)

In Memoriam: Professor Hirosato ITO  
(1925–2009)

西條 隆雄  
Takao SAJO

伊藤廣里先生は1925年のお生まれで、文学研究に傾頭しはじめたのは法政大学大学院において本多顕彰教授より指導を受けたときであった。教授より「英文学徒はシェイクスピアとかディケンズのような大物に取り組んだほうがよいのですよ」と言われて、即座にディケンズを研究対象に選び、研究を続けられたそうである。実践女子大学に迎えられると、『ボズ』を皮切りに『オリヴァー』、『骨董店』、『荒涼館』、『大いなる遺産』、『共通の友』等の作品研究をつぎつぎに発表され、1970年にディケンズ・フェロウシップ日本支部を立ち上げる際には、これに積極的に関わられた。

先生は作品研究とともに、作品に現われる人物、地名、ゆかりを詳しく訪ねられ、貴重な情報をいろいろな機会に提供されたことでもよく知られる。たとえば『無商旅人』第2章の難破船記事のなかに載っている、暴風雨の中で懸命に乗組員の救助活動に当たったヒューズ牧師についてしらべ、その墓をウェールズの片田舎を訪ねて苔むした墓石をきれいに磨いたり、あるいはフランスのブ

ローニュを訪ね、ディケンズが執筆のため滞在した家とか古い鐘樓をカメラに収めたりしている。生粋のディケンズ愛好家だ。

先生は「ギャズヒル」と命名した自宅の離れを書齋とし、そこでディケンズを読み、研究に精出し、翻訳に情熱を傾けられた。広い庭には松、梅、千両に混じって、ディケンズの愛したゼラニウムが植えられていて、そこを散歩しながら作家の人柄を偲ぶとともに世の不正、驕り、つつましさ、潔さ、美しさに目を凝らしていたようだ。こうした態度を映すかのように、座右の銘は「天爵を修めて人爵これに従う」であると、いつか書き送ってくださった。穏やかにして気骨のある、すがすがしい人柄であった。

カメラを愛好された先生は、2003年6月、ロチェスターで開催されたディケンズ祭に参加され、町中あげてディケンズを称揚し彼の生んだ人物や場面を再現している光景を写真入りで紹介し、学問学問と声高に叫ぶ日本とは対照的に、作家の偉大さを認めかつそれを楽しむ彼の地のデ

イケンジアン<sup>①</sup>の姿を伝えてくれたことは、とりわけ興味深い出来事であった。いつかチョーサー<sup>②</sup>の碩学、池上忠弘先生とお話をしていたとき「そうですね。日本でもかの地のように作家を素朴に愛する読者を育てねばなりませんね」とおっしゃったのが鮮明に思い出される。心すべき指摘である。また、ロンドン大学のマイケル・スレイター教授は伊藤先生が撮影された写真を大事に保管され、これを『ディケンズの見たアメリカおよ

びアメリカ人』(1979)の著者紹介覧に載せて先生の飾らぬ人柄を懐かしんでおられたことは、ご記憶の方も多いかと思う。実践女子大学図書館長を最後に退官された先生は、ギャズヒルにて『クリスマス・キャロル』を訳され、つづいて『炉辺のおおろぎ』(2004)を出され、まだまだご活躍が期待されるさなかの8月15日、病魔に倒れ帰らぬ人となられた。先生のご冥福を心よりお祈りする。



伊藤廣里教授は2009年8月15日に永眠されました。享年90歳でした。

## フェロウシップ会員の執筆業績

### Publications by Members of the Japan Branch

(2008 ~ 2009)

#### 著書・編書・共著

- Holt, Jenny, *Public School Literature, Civic Education and the Politics of Male Adolescence*, Ashgate, 2008
- 新井潤美 (共著), 『イギリス文化 55 のキーワード』, 木下卓/窪田憲子/久守和子編, ミネルヴァ書房, 2009 年
- 荻野昌利, 『小説空間を〈読む〉—ジョージ・エリオットとヘンリー・ジェイムズ』, 英宝社, 2009 年
- 荻野昌利 (共著), 「ジョージ・エリオット『ロモラ』の時空をく切る」, 『イギリス小説の愉しみ—深澤俊先生退職記念論集』, 音羽書房鶴見書店, 2009 年, 121-36 頁
- 閑田朋子 (共著), 「ジョン・アッシュワースによる民衆教育の試み—日曜学校についてのケース・スタディ」, 『実像への挑戦—英米文学研究』, 欧米言語文化学会編, 音羽書房鶴見書店, 2009 年, 121-36 頁
- 岸本京子 (共著), 『日本におけるジョージ・エリオット書誌』, 大嶋浩編, 大阪教育図書, 2009 年
- 小池滋, 『「坊っちゃん」はなぜ市電の技術者になったか』, 新潮文庫 こ-45-1, 新潮社, 2008 年
- 佐々木徹 (共著), 「近代的ディケンズ批評の源流を温めて—ミラー, マーカス, リーヴィス」, 塩谷清人/富山太佳夫編, 『イギリス小説の愉しみ』, 音羽書房鶴見書店, 2009 年, 86-100 頁
- 武井暁子 (共著), 「チャールズ・ディケンズ—エディンバラの二人の『父』」, 『文学都市エディンバラ—ゆかりの文学者たち』, 木村正俊編, あるば書房, 2009 年, 193-212 頁
- 田中孝信 (共著), 「*The Household Narrative of Current Events* と 1850 年代前半のディケンズ小説」, 『*The Household Narrative of Current Events, 1850-1855*』, 別冊解説, アティーナ・プレス, 2008 年, 9-32 頁
- 廣野由美子, 『ミステリーの人間学—英国古典探偵小説を読む』, 岩波新書 1187, 岩波書店, 2009 年
- 堀正広, 『英語コロケーション研究入門』, 研究社, 2009 年
- [堀正広 (共編著)] Hori, Masahiro, Tomoji Tabata, and Sadahiro Kumamoto, ed., *Stylistic Studies of Literature: In Honour of Professor Hiroyuki Ito*, Lang, 2009
- 堀正広 (共著), 「コロケーションと英語史」, 『コロケーションの通時的研究—英語・日本語研究の試み』, 浮網茂信/西村秀夫/小迫勝/前川喜久雄/ほか編, ひつじ書房, 2009 年, 1-20 頁
- 堀正広 (共著), 「18 世紀から 20 世紀までのコロケーションの通時的研究」, 『コロケーションの通時的研究—英語・日本語研究の試み』, 浮網茂信/西村秀夫/小迫勝/前川喜久雄/ほか編, ひつじ書房, 2009 年, 145-81 頁
- 松村昌家, 『幕末維新使節団のイギリス往来記』—ヴィクトリアン・インパクト』, 柏書房, 2008 年



- 水野隆之（共著），『『我らが共通の友』における相互関係の再生』、『実像への挑戦—英米文学研究』、欧米言語文化学会編、音羽書房鶴見書店、2009年、105-19頁
- 宮川和子（共著），『『ジェイン・エア』と現代小説—『ジーン・ブrouディの青春』『滝』『ジェイン・エアからすべては始まった』』、『英語・英米文学のフォームとエッセンス』（佐野哲郎教授喜寿記念論文集）、大阪教育図書、2009年、43-52頁
- 吉田一穂（共著），『『二都物語』—歴史的テーマと個人の生と死』、『実像への挑戦—英米文学研究』、欧米言語文化学会編、音羽書房鶴見書店、2009年、93-104頁

## 論文

- 青木健，「十九世紀作家の権利意識（1）—Sketches by Boz 出版にからんで」、『成城文藝』、第204号（2008年9月）、160-45頁
- 青木健，「ディケンズと宗教教育」、『成城文藝』、第205号（2008年12月）、138-15頁
- 新井潤美，「カズオ・シングロの小説の『顔のない』語り手たち」、『水声通信』、第4巻第5号（2008年11月）、108-15頁
- [今村紅子], Imamura, Beniko, 'The Detached View of Personal and Historical Realities: Hardy's Psychologically Distant Text', 『福岡女学院大学紀要英語英文学』、第45号（2009年）、27-39頁
- 今村紅子，『『赤毛のアン』再考—少女の成長物語と孤児物語と』、『福岡女学院大学教育フォーラム』、第11号（2009年）、63-69頁
- 小野寺進，「公開朗読とリアリズム—『オリヴァー・トゥイスト』のナンシー」、『人文社会論叢人文科学篇』（弘前大学人文学部）、第21号（2009年）、47-57頁
- 加藤匠，「『迷い続けるひと』—ピーター・ケアリー『ジャック・マッグズ』におけるオーストラリア」、『FLC 言語文化論集ポリフォニア』、第1号（2009年3月）、89-104頁
- 金山亮太，「サヴォイ・オペラをアメリカで観る」、『人文科学研究』、第122号（2008年）、55-76頁
- 金山亮太，「血は水よりも濃いのか—英文学の場合」、『19世紀学研究』、第2号（2008年）、87-104頁
- 川崎明子，『『デイヴィッド・コパフィールド』における英雄と英雄崇拜—一人称の語りと作家の自伝』、『テキスト研究』（テキスト研究会）、第4号（2008年）、45-61頁（<http://texts.at.infoseek.co.jp/magazine/papers.html>）
- [川崎明子], Kawasaki, Akiko, 'Reading for Recovery: Illness and the Brontë Plots', 『駒澤大学文学部研究紀要』、第66号（2008年）、47-62頁
- 川崎明子，「ペットの特権—アン・ブロンテの動物たち」、『駒澤大学文学部研究紀要』、第67号（2009年）、1-20頁
- 川崎明子，「2009年の『ダニエル・デロンダ』—フランクフルト、ホンブルク、マインツ」、『駒澤大学文学部英米文学科研究論集』、第44号（2009年）、121-50頁
- 小池滋，「鉄道と英文学」、『英米文学』（立教大学文学部）、第69号（2009年）、47-57頁
- 齋藤九一，「トロロブ『自伝』研究—アイルランド赴任以前」、『白山英米文学』（東洋大学）、第33号（2008年2月）、39-44頁
- 齋藤九一，「トロロブ『自伝』研究—第1作執筆から *The Warden* まで」、『白山英米文学』（東洋大学）、第34号（2009年2月）、61-68頁
- [佐々木徹] Sasaki, Toru, 'John Schlesinger's *Far from the Madding Crowd*: A Reassessment', *Literature/Film Quarterly*, 37.3 (July 2009): 194-200
- 田中孝信，「ポーア戦争における兵士像—表出する<異質なもの>」、『人文研究』（大阪市立大学大学院文学研究科）、第60巻（2009年）、110-24頁

- 梅正行, 「V・S・ナイポールのモダンガールズ—それぞれのモダン」, 『国際教養学部論叢』(中京大学国際教養学部), 第2巻第1号(2009年), 39-48頁
- 梅正行, 「最初の一文を待つということ—卒業論文を書く学生と」, 『国際教養学部論叢』(中京大学国際教養学部), 第2巻第1号(2009年), 49-61頁
- 西垣佐理, 『『荒涼館』にみる看護・ジェンダー・階級』, 『関西学院大学英米文学』, 第52号(2008年3月), 35-52頁
- 西垣佐理, 「The Turning Point of the Narrative: Victorian Nursing and Cultural Aspects in the World of Charles Dickens」, 博士論文(関西学院大学), 2008年3月
- 西垣佐理, 「男が癒し手になるとき—『マーティン・チャズルウィット』にみる看護の諸相」, 『JBBDF』, 第31号(2008年), 3-15頁
- 西垣佐理, 「『ルース』に見る看護と感化力—『荒涼館』との比較をつうじて」, 『ギヤスケル論集』(日本ギヤスケル協会), 第19号(2009年), 27-42頁
- 藤井晶宏, 「十九世紀前半の「公」のロンドン—ディケンズ, 通りそしてコーヒー・ハウス」, 『Fortuna』(欧米言語文化学会), 第20号(2009年), 23-32頁
- 堀正広, 「日本文化は英訳できるか—宮本武蔵著『五輪書』の場合」, 『海外事情研究』, 第35巻第2号(2008年2月), 85-108頁
- [松本靖彦] Yasuhiko Matsumoto, 「Affectation and Laughter in Dickens' *Great Expectations*」, 『東京理科大学紀要(教養篇)』, 第41号(2009年3月), 405-22頁
- 水野隆之, 「『鐘の音』の枠組みについて」, 『Fortuna』(欧米言語文化学会), 第20号(2009年), 13-21頁
- 吉田一穂, 「*A Tale of Two Cities*—精神的外傷とその影響」, 『英米評論』(桃山学院大学総合研究所), 第23号(2009年) 19-33頁
- 吉田一穂, 「*Wuthering Heights*—復讐心と孤児の運命」, 『甲南英文学』(甲南大学), 第24号(2009年), 1-14頁
- [渡部智也] Watanabe, Tomoya, 「“Is Oliver Dreaming?” Revisited: The Mystery of *Oliver Twist*」, 『Zephyr』(京都大学大学院英文学研究会), 第21号(2009年), 1-17頁

## 翻訳

- 市川千恵子(訳), エリザベス・ギヤスケル, 「フランス日記」, 『ギヤスケル全集』, 別巻II, 大阪教育図書, 2009年, 622-79頁
- 今村紅子(訳), ラドヤード・キプリング, 「獣のしるし」, 『キプリング・インド傑作選』, 橋本横矩/高橋和久編, 鳳書房, 2008年, 434-52頁
- 梅宮創造(訳), チャールズ・ディケンズ, 「炉辺のおおろぎ」(荻窪, 俳芸館にて2009年7月25日に佐藤昇朗読)
- 梅宮創造(訳), チャールズ・ディケンズ, 「ドクター・マリゴールド」(山形にて2009年10月に佐藤昇朗読)
- 太田良子(訳), 『愛の世界』, ボウエン・コレクション, 国書刊行会, 2009年
- 金山亮太(訳) ハンプリー・ハウス, 「ディケンズの世界(その2)」, 『言語文化研究』, 第13号(2008年), 111-22頁
- 田中孝信(訳), エリザベス・ギヤスケル, 「本当なら奇妙」, 『ギヤスケル全集』, 別巻II, 大阪教育図書, 2009年, 310-27頁
- 田辺洋子(訳), チャールズ・ディケンズ, 『ハード・タイムズ』, あぼろん社, 2009年
- 田辺洋子(訳), チャールズ・ディケンズ, 『骨董屋』, あぼろん社, 2008年
- 梅正行(訳), ラドヤード・キプリング, 「兵卒オーゼリスの狂気」, 『キプリング・インド傑作選』, 橋本横矩/高橋和久編, 鳳書房, 2008年, 453-62頁

松岡光治 (訳), アミーリア・エドワーズ, 「鉄道員の復讐」, 『言語文化論集』 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科), 第 31 巻第 1 号 (2009 年), 1-21 頁

## 書評

- 市川千恵子, 「Dinah Birch, *Our Victorian Education*」, 『ギヤスケル論集』 (日本ギヤスケル協会), 第 19 号 (2009 年), 79-80 頁
- 井原慶一郎, 「Tamara S. Wagner, and Narin Hassan, eds, *Consuming Culture in the Long Nineteenth Century: Narratives of Consumption, 1700-1900*」, 『JBBDF』, 第 31 号 (2008 年), 35-38 頁
- 金山亮太, 「ディケンズ著, 田辺洋子訳, 『ボズの素描集』」, 『JBBDF』, 第 31 号 (2008 年), 16-21 頁
- 西條隆雄, 「日本ハーディ協会編, 『トマス・ハーディ全貌』」, 『JBBDF』, 第 31 号 (2008 年), 26-29 頁
- [ 佐々木徹 ] Sasaki, Toru, 'Charles Dickens, *Sketches by Boz* (Audio Book), read by Peter Joyce', *Dickensian* 104.3 (2009): 257-58.
- 梅正行, 「要田圭治著, 『ヴィクトリア朝の生権力と都市』」, 『英語青年』, 第 155 巻第 4 号 (2009 年 7 月), 55-57 頁
- 梅正行, 「今に手繰りよせられた全体像—木村正俊／照山顕人編, 『ロバート・バーンズ—スコットランドの国民詩人』」, 『ジェイン・オースティン研究』, 第 3 号 (2009 年), 96-99 頁
- 中和彩子, 「Gail Turley Houston, *From Dickens to Dracula: Gothic, Economics, and Victorian Fiction*」, 『JBBDF』, 第 31 号 (2008 年), 30-32 頁
- 中和彩子, 「度会好一, 『ユダヤ人とイギリス帝国』」, 『JBBDF』, 第 31 号 (2008 年), 33-35 頁
- 永岡規伊子, 「松岡光治編, 『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』」, 『JBBDF』, 第 31 号 (2008 年), 22-26 頁
- 堀正広, 「A・P・Cowie 編, 南出康世／石川慎一郎監訳, 『慣用連語とコロケーション—コーパス・辞書・言語教育への応用』」, 『英語教育』 第 155 巻第 6 号 (2009 年 9 月号), 93 頁

## エッセイ・その他

- 新井潤美, 「『自分だけ』の存在—執事の魅力」, 『出版ダイジェスト』, 第 2138 号 (2008 年 11 月), 1 頁
- 新井潤美, 「『嫌味な言葉』の訳し方—文体の選択」, 『中央評論』, 第 61 巻第 1 号 (2009 年 5 月)
- 新井潤美, 「知的でないことの重要性」, アラン・ベネット著 『やんごとなき読者』解説, 白水社, 2009 年
- 新井潤美, 「『古き良き(?) イギリス』へのノスタルジー」, 『熱風—スタジオジブリの好奇心』, 第 7 巻第 6 号 (2009 年 6 月), 10-15 頁
- 新井潤美, 「自分の作品に恋する男—ピグマリオン神話のさまざまなかたち」, 新国立劇場バレエ公演 『ローラン・プティのコッペリア』プログラム, 2009 年, 27-29 頁
- 梅宮創造, 「藝の核心」, 『英文学』 (早稲田大学英文学会), 2009 年 3 月, 94-97 頁
- 梅宮創造, デイズニー映画 『クリスマス・キャロル』台本翻訳監修, 2009 年
- 西條隆雄, 「第 102 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」, 『JBBDF』, 第 31 号 (2008 年), 42-48 頁
- 佐々木智史, 「ノッティンガム留学記」, 『JBBDF』, 第 31 号 (2008 年), 39-41 頁

中島彰子,「ブロードウェイミュージカル『二都物語』を観て」,『JBBDF』,第31号(2008年),  
49-51頁

本誌『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』(*The Japan Branch Bulletin of the Dickens Fellowship*)を『JBBDF』と省略して表記しています.



“Let him remember it in that room, years to come!”

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

## お問い合わせ先

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1

東京女子大学現代教養学部 英語文学文化専攻 原英一研究室内

電話 03 (5382) 6348 (直通)

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/dickens/>

email: [haral2cdfj48@ktb.biglobe.ne.jp](mailto:haral2cdfj48@ktb.biglobe.ne.jp)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動および会員について情報につきましては、上記のいずれかによりお問い合わせ下さい。

また、新規入会希望の方も随時お待ちしております。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

## 役員一覧

ディケンズ・フェロウシップ日本支部では「支部規約」に従い、2008年総会において選出された以下の役員および名誉職を以て、運営に当たっています。

役員の内任期は2008年10月より2011年9月までの3年間です。

名誉支部長	小池 滋	東京都立大学 名誉教授
支部長 (年報担当)	原 英一	東京女子大学 現代教養学部 教授
副支部長	佐々木 徹	京都大学大学院 文学研究科 教授
監事	植木 研介	広島大学 名誉教授
財務担当理事	中村 隆	山形大学 人文学部 准教授
理事	金山 亮太	新潟大学 人文学部 准教授
理事	武井 暁子	中京大学 国際教養学部 教授
理事	田中 孝信	大阪市立大学大学院 文学研究科 教授
理事	玉井 史絵	同志社大学 言語文化教育研究センター 准教授
理事	梅 正行	中京大学 国際教養学部 教授
理事	松本 靖彦	東京理科大学 理工学部 准教授
理事	山本 史郎	東京大学大学院 総合文化研究科 教授
年報担当補佐	宮丸 裕二	中央大学 法学部 准教授
Net 担当補佐	松岡 光治	名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 教授
VOD 担当補佐	梶山 秀雄	島根大学 外国語教育センター 准教授

## 編集後記

○ディケンズ博物館から生誕 200 年記念事業 Great Expectations への寄付要請があったのは、6 月初めのことでした。諸事情のため、募集の期限が 7 月末と時間的余裕がありませんでしたが、日本支部としては 4,000 ポンドの寄付を目標額と定めて、支部会員への協力を呼びかけることになりました。皆様からのご協力のおかげで、目標額を達成することができました。今後、ダウティ街 48 番地を私たち日本支部会員は、鼻高々で訪問することができます。皆様のご協力にあらためて深く感謝申し上げます。○既報の通り、長年にわたって日本支部の会員であった伊藤廣里先生が、8 月半ばに逝去されました。ご葬儀は東京中野区の金剛寺で営まれ、日本支部を代表して列席させていただき、弔辞を捧げました。伊藤先生と初めて親しくお話をさせていただいたのは、1991 年に仙台の宮城教育大学で大会が開催されたときでした。それ以来、折にふれて励ましをいただいていた、真のディケンジアンであった先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(原 英一)

○本年は昨年度にも増して出版が遅れました。原因の九割は私の能力不足でありまして、残り一割の内九分は教育研究を取り巻く過酷な環境、一分は家族の健康状態でありましょうか。それでもなお若きディケンズの如く、今後の改善・発展を盲信したいと思います。

○今回も書評欄をはじめ、多くの方々にご執筆・ご協力を頂きましたことを感謝致します。書評欄には外部からのゲストとして田中裕介氏にご執筆頂きました。学会が乱立しつつも文学研究・教育の制度全体が細りゆく中、学会の外部の類似分野の優秀な研究者とのパイプをつなぎ、維持することの一層の重要性を思います。

○今回寂しいのは海外の学会参加の報告が欠けたことですが、皆さん次回はこちらで参加して、ご報告を頂くのをお待ちしております。

(宮丸 裕二)

---

### 第 32 号投稿論文の審査結果

応募論文数 3 採用数 1

### 編集

原 英一 宮丸 裕二

### 投稿論文審査担当理事

金山 亮太 佐々木 徹 武井 暁子

田中 孝信 榎 正行 中村 隆

原 英一 山本 史郎

## ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報

### 第 32 号

発行 2009 年 11 月 30 日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1

東京女子大学 現代教養学部

英語文学文化専攻 原英一研究室内

電話 03 (5382) 6348

印刷 株式会社 東北プリント

〒980-0822 仙台市青葉区立町 24-24